

2014年 12月 8日

報道機関各位

2014年度子育て支援策等に関する調査結果のお知らせ ～次世代育成支援対策10年の変化と新制度に向けて～

三菱UFJフィナンシャル・グループの総合シンクタンクである三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社(本社:東京都港区 社長:藤井 秀延)は、「子育て支援策等に関する調査 2014」を実施しました。

わが国の少子化対策は、平成17年4月に施行された次世代育成支援対策推進法に基づく取組から、平成24年8月に成立した「子ども・子育て関連3法」に基づく「子ども・子育て支援新制度」へと移行しようとしています。現在、平成27年4月からの新制度スタートに向けて、新制度の実施主体である市町村及び都道府県が新たな計画の策定に取り組んでおり、各地域における子どもの育ちや子育て家庭の実態把握が進められています。では、わが国全体の子どもの育ち・子育て家庭の実状はどうなっているのでしょうか?当社は、新制度スタート直前であり、次世代育成支援対策の10年がまさに終わろうとしている現時点における、「わが国の子ども・子育てにおける現状と課題」を把握することを目的として、自主調査を実施いたしました。

なお、当社では、次世代育成支援対策がスタートする前、平成14年度に(当時は前身の株式会社UFJ総合研究所)、厚生労働省雇用均等・児童家庭局から委託を受けて「子育て支援策等に関する調査」を実施しています。平成14年度調査を“前回調査”と位置づけ、今回の調査とあわせて、次世代育成支援対策のおよそ10年間の子育て家庭の変化も調査分析対象としております。

平成14年度「子育て支援策等に関する調査報告書」(厚生労働省委託調査)

URL: <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1a.html> ※今回の調査とは、調査方法・調査項目が一部異なります。

また、「子育て支援策等に関する調査 2014」は、「未就学児の父母調査」と「中高生調査」からなっており、中高生調査からは、都道府県・市町村で策定が進められている「子ども・若者育成支援推進法」に基づく計画策定の課題も見えてくる内容となっています。

新制度に基づく計画の策定や、新たな支援サービスのご検討にご活用いただければ幸いです。

詳細は、調査概要をご参照ください。また、本調査の結果をとりまとめたレポートと調査票(PDFファイル)、ご希望の地域ブロックの市区町村規模別集計結果(Microsoft Excelファイル)を、有償にて販売いたします。購入受付サイトは以下のURLです。

■調査概要: http://www.murc.jp/corporate/cnsl_intl/diversity/kosodate

■購入受付: <https://reg26.smp.ne.jp/regist/is?SMPFORM=ojt-mhnfo-2d32546565bd90fafd22af96a6d0f556>

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
女性活躍推進・ダイバーシティマネジメント戦略室 経済・社会政策部
矢島、鈴木、川澤、尾島
〒105-8501 東京都港区虎ノ門5-11-2 E-Mail: diversity@murc.jp
TEL: 03-6733-3791

子育て支援策等に関する調査 2014

報告書概要

<調査目的>

わが国の少子化対策は、平成17年4月に施行された次世代育成支援対策推進法に基づく取組から、平成24年8月に成立した「子ども・子育て関連3法」に基づく「子ども・子育て支援新制度」へと移行しようとしています。

現在、平成27年4月からの新制度スタートに向けて、新制度の実施主体である市町村及び都道府県が新たな計画の策定に取り組んでおり、各地域における子どもの育ちや子育て家庭の実態把握が進められています。

では、わが国全体の子どもの育ち・子育て家庭の実状はどうなっているのでしょうか？当社は、新制度スタート直前であり、次世代育成支援対策の10年がまさに終わろうとしている現時点における、「わが国の子ども・子育てにおける現状と課題」を把握することを目的として、自主調査を実施いたしました。

なお、当社では、次世代育成支援対策がスタートする前、平成14年度に（当時は前身の株式会社UFJ総合研究所）、厚生労働省雇用均等・児童家庭局から委託を受けて「子育て支援策等に関する調査」を実施しています。平成14年度調査を“前回調査”と位置づけ、今回の調査とあわせて、次世代育成支援対策のおよそ10年間の子育て家庭の変化も調査分析対象としております。

平成14年度「子育て支援策等に関する調査報告書」(厚生労働省委託調査)

URL：<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1a.html>

※今回の調査とは、調査方法・調査項目が一部異なります。

また、「子育て支援策等に関する調査2014」は、「未就学児の父母調査」と「中高生調査」からなっており、中高生調査からは、都道府県・市町村で策定が進められている「子ども・若者育成支援推進法」に基づく計画策定の課題も見えてくる内容となっています。

新制度に基づく計画の策定や、新たな支援サービスのご検討にご活用いただければ幸いです。

2014年12月

＜調査結果に基づく提言＞

＜子育て支援に関する提言：未就学児父母調査より＞

平成14年度の調査報告書では、「Ⅲ.今後の子育て支援策のあり方」の中で、父母調査の結果について、このような指摘をしている。

「女性だけでなく、男性も、仕事のみではなく、家族の時間や自分の時間を、もっと生活の中に配していきたい」と考えているが、「現実には子育てや家族との時間、地域との関わりを持つことができない」。また、「女性は、専業主婦と働く女性それぞれに抱えている問題がある」。「専業主婦の中でも、特に核家族で親族の支援を得にくく、地域の支援なども得られない女性が、ひとりで子育てを行うことの精神的な負担を感じており、自分の時間や社会との接点を求めている」、一方「働いている母親は、逆に、子どもを預けるばかりではなく、自らもっと子育てに向き合う時間を望んでいる。また、地域との関わり、母親同士のネットワークを望んでいる」。そして「働く母親も働いていない母親もともに、子どもを安心して遊ばせることのできる場所や機会を求めている」。(306P,307Pより)

今回の調査では、地域の中で、子どもを通じた関わりを持っている人がさらに減っている状況や家族以外で相談できる知人が少なくなっている状況がみられた。特に、低年齢の子をもった専業主婦では支援サービスの利用も少なく、子育ての楽しさを感じられない人の割合も高い。出産前から子どもを持つことに不安を感じている人は、出産後の子育ての不安も高い。次世代育成支援の中で実施されている出産前後の支援はまだ浸透しておらず、必要な人に届いていない状況がうかがわれる。認定こども園についても、制度や内容が浸透していないためか、利用意向をたずねても「わからない」との回答が多く、ニーズの把握がまだ難しい状況にある。

仕事と子育ての両立やワーク・ライフ・バランス(WLB)に関しては、父母ともに一定の環境改善が進んできていることがうかがわれる。ただし、そうした変化の中で新たな問題もみえてきた。WLBを求める父親は平成14年度調査よりも多くなっており、実際に「恒常的に残業」している割合や帰宅時間などをみると、父親のWLB環境は改善されているとみられる。だが、父親の家事・育児への参加の割合は、本人の評価としても配偶者の評価としても、まだ不十分であるとの認識が強い。一方、母親は、働く母親に占める正社員の割合がわずかだが増え、「おおむね定時退社」や「短時間・フレックス」の割合も微増するなど働き方の選択肢が出てきているが、育児休業からの復帰に不安を覚える、と言う声や、保育園の送り迎え等育児や家事の負担を親のみが負っていることによる働き方の時間的制約の問題などがある。

こうした調査結果を踏まえ、子育て支援について3つの提言を行う。

提言1. 出産前から地域の人的ネットワークで包括的な支援を！

提言2. WLBを実現しながら、子育ても仕事も質的に充実させられる社会に！

提言3. 目指すべき社会像を共有し、子育て家庭を取り巻く施策に一貫性を！

<調査結果に基づく提言>

提言1. 出産前から地域の人的ネットワークで包括的な支援を！

出産前後の支援は、まだ利用者も利用意向も少ないのが実状だが、出産前から不安を抱える人が増えている状況から、相談支援を中心に、支援ニーズがあると考えられる。また、出産前に不安を抱えていた人は、出産後も子育てに不安や悩みを抱えている割合が高く、継続的な支援が必要である。支援を利用していない低年齢児の親たちは、利用意向も低く、「わからない」という回答も少なくない。地域の子どもの遊び場の課題も「よくわからない」という回答が増えている。地域の中で、子どもを通した付き合いが減っている中で、地域の中で孤立せずに、必要な支援や良好な子育て環境にアクセスできるよう地域の人的なつながりの輪の中に、子育て家庭を包み込むような支援が求められる。新制度のもと、各地域で特徴ある子育て支援の充実が期待されるが、単に施策メニューを多く並べるだけでなく、出産前から「この地域で子どもと暮らすということ」に、具体的なイメージと安心感が持てるような自治体の周知戦略が求められる。また、包括的な支援、という視点から、新たな支援ニーズがみえてきた際、地域のNPO等による新しい試みが柔軟にできることも必要であろう。

提言2. WLBを実現しながら、子育ても仕事も質的に充実させられる社会に！

WLBは、単に子育てをしながら働き続けられる取り組みから、WLBをはかりながら子育ても仕事も質的に充実させることが可能になる段階へのステップアップが期待される。父親は、早く帰るだけでなく、家事や育児に積極的に参加し、自身と配偶者の満足感を高めることが求められる。父母ともに、子どもをもった時の働き方として「フルタイムだが融通が利く仕事」を求める割合は高く、労働時間を短くするだけでなく、各自の子育て観に応じた柔軟な働き方を選択できることも必要である。母親については、定時退社や短時間勤務などの働き方の選択肢は出てきたが、「女性の活躍」への社会的な期待が高まる中、そうした時間制約のある働き方をしながらも能力発揮ができるのか、評価を得られるか等の不安がある。育児休業についても取得はできても、休業中に復帰への不安を抱えている女性も少なくなく、休業中や休業前後に、安心して復帰ができるような職場からのアプローチも必要である。WLBとして「自分の時間」を重視する傾向は強まりつつあるが、子育てや仕事の質を充実させることで、子育て期の生活全体の満足度をあげることによりバランスがはかれる可能性もある。

提言3. 目指すべき社会像を共有し、子育て家庭を取り巻く施策に一貫性を！

子育て家庭を取り巻く様々な施策の充実がはかられる中で、目指すべき社会像が一致しているのか、という懸念がある。特に、仕事と家庭の両立支援については、親たちが望むライフステージに応じた柔軟な働き方を選択しながら企業内でキャリア形成をはかることが、まだ困難な状況である。そのような中で、企業における「女性の活躍」、「管理職登用」に注目が集まるあまり、本来目指していたダイバーシティ(多様性を生かす)戦略から、従来の単一的なキャリア路線に女性を乗せ早期に管理職を増やす戦略を取る企業が増える懸念がある。子育て家庭支援の立場からも、企業においてあるべき「男女の活躍像」が問われる。また、育児休業が1歳まで取得可能で、「パパ・ママ育休プラス」などの施策でさらに休業期間を取ることを可能としたにも関わらず、保育所の整備が進まないため、育児休業を短く切り上げている人が少なくない。働き方の支援と保育支援についても、制度が目指す趣旨に沿った利用が可能となるよう、両者併せての検討と運用が必要である。保育について、低年齢児の不足感が強いが、上記の趣旨から、特に1歳から確実に利用できるような充実が早急に必要である。

＜調査結果に基づく提言＞

＜子ども・若者の育ちに関する提言：中高生調査より＞

平成14年度の調査報告書では、「Ⅲ.今後の子育て支援策のあり方」の中で、中高生調査の結果についてこのような指摘をしている。

「中高生の調査からは、次世代での新たな少子化の要因がみえてきた。仕事との両立の困難さから子どもをもつことを躊躇する世代から、自分の人生を充実させるために子どもが重荷であると考える世代へ、そして次の世代は、人との関わりや自分の人生を充実させることさえも不安であると考える人が増えるのではないか。子育てに対する積極性は、仕事や結婚に対する積極性と相互に関係しており、それは取りも直さず、人との関わりに対する積極性に関係している。人との関わりに臆病になり、負担感が強くなるほど、仕事・結婚・育児をためらう気持ちは強くなるとみられる。」また「仕事・結婚・育児に対する積極性が相互に関係しているということは、現在の親の世代同様、こうした生活要素を、どれかに偏るのではなく、生活の中にバランスよく配っていきたいという欲求には変わらないものがあるということであろう」。

今回の調査を通じて見えてきたのは、「人との関わりに対する積極性」がさらに失われている状況である。親しい友達をつくることができない、悩みを相談する相手がいない、親子でほとんど話しをしないといった中高生が増えている。家や学校外の活動をしていたり、家以外に居場所がある中高生などが友人関係なども良好な状況は、前回調査の結果と変わらないが、そうした活動を行ったり、居場所を持つ中高生は少なくなっている。特に、中学生よりも高校生で、良好な友人関係を持っていない状況がある。

また、仕事・結婚・育児に対する積極性について、「全体に前向きなグループ」と「全体に後ろ向きなグループ」がいることは、前回調査と同じだが、その全て後ろ向きグループが全体に占める割合は7.5%から17.2%へと高くなっており、前回調査の「男子中高生の中にみられる少数の特有グループ」から、今回調査では、「女性も含めた一定割合を占める層」に拡大していることがうかがえた。人との関わりが希薄化する中で、将来についても前向きに考えることができない層が増加していることがうかがえる。

こうした調査結果を踏まえ、子ども・若者の育ちに関して、3つの提言を行う。

提言4. 「家＋学校＋α」3つめの居場所・活動場所の確保を！

提言5. 他世代共生へ向けて、多様な交流機会の確保を！

提言6. 若者にとって魅力あるワーク・ライフ・バランスのロールモデルの提示を！

<調査結果に基づく提言>

提言4. 「家+学校+α」3つめの居場所・活動場所の確保を！

家や学校以外に、別の居場所や活動場所を持てるような支援が期待される。学校や学校外の活動に参加していたり、家以外にも居心地のよい場所を持ている中高生は、良好な友達関係を築くことができ、将来への前向きな意識を持つ割合も高い。パソコンやゲーム、スマートフォンに時間をかけたい子どもが増えている中、親たちの不安も、子どもたちが実際の友人や自然などにふれあい、身体を使った遊びや経験をする機会が減っていることにある。活動の場を広げる中で、現実に向き合った人とのコミュニケーションをはかる経験を増やし、人間関係を築く機会を増やすことが重要である。また、家庭と学校は、大人にとっては狭い世界でも、中高生にとっては世界のすべてになってしまう可能性があり、その中で人間関係がうまくいかない状況に陥った場合、人生すべてに悲観的になってしまう危険性がある。インターネット上のSNSやゲーム等の空間が避難場所になっている可能性もあるが、現実社会で人間関係を築く意欲や必要性を感じなくなってしまう恐れがある。前回の調査報告書でも、「中高生等の青少年が、学校や家庭内の人間関係のみにしぼられず、地域や社会との接点を持てる機会の提供」が提案されているが、その必要度は一層増していると考えられる。

提言5. 他世代共生へ向けて、多様な交流機会の確保を！

少子高齢化・核家族化が進む中、中高生が小さな子どもや高齢者と触れ合う機会は、ますます減少している。小さな子どもとふれあう機会のない中高生が、結婚や子育てに具体的なイメージを持ちにくい状況は、前回調査と同様である。小さな子どもとふれあう機会の減少と共に、中高生のみならず社会全体で、子どもの存在に対する寛容さが失われつつある。前回調査では、小さな子どもとふれあう機会としては、「親戚の子どもと遊んだり、世話をしている」がもっとも多かったが、今回の調査では、「学校の授業や行事」がもっとも多くなっている。小さな子どもや高齢者をふれあう機会は、親族や地域の中で自然に持てることが理想的ではあろうが、すでにそうした環境が失われている以上、学校等でのプログラムによって中高生が確実にそうした経験ができるよう、普及をはかることが重要であろう。また、単に「ふれあう」とどまらず、小さな子どもや高齢者と多様な経験を共有する機会も増えることが期待される。

提言6. 若者にとって魅力あるワーク・ライフ・バランスのロールモデルの提示を！

就労観、結婚観、子育て観によりグループ分けをしたところ、前回調査に比べ、全てに後ろ向きなグループの割合が増えていることに加え、前回は見られなかった、「仕事はお金を稼ぐこと」という割り切った意識の強いグループが5つのうち2つあった。また、両親について、仕事や家事にやりがいを感じているか、子育てに熱心か、についての評価も、前回調査よりも低くなっている。若者の就労観、結婚観、子育て観は、若者が、親や友人等との人間関係をいかに築いているかということと、両親を含めた大人たちの仕事・結婚・子育ての現実を見る中で形成されていると考えられる。そのため、学校の教育等で、「意識啓発」的に前向きな意識を持たせることは困難であり、現実には今の大人たちが、充実した仕事・結婚・子育て生活を送りつつ自分の時間も持てること、すなわち、若者にとって魅力的なワーク・ライフ・バランスのロールモデルを提示して見せることができるか、にかかっていると考えられる。

子育て支援策等に関する調査2014 報告書
<調査結果に基づく提言>

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
〒105-8501 東京都港区虎ノ門5-11-2オランダヒルズ森タワー
女性活躍推進・ダイバーシティマネジメント戦略室
経済・社会政策部
矢島、鈴木、川澤、尾島
E-Mail: diversity@murc.jp

子育て支援策等に関する調査 2014 報告書(未就学の父母アンケート調査)概要

調査目的:子育てに対する意識等に関する実態を把握するためアンケートにより調査を実施した。

調査対象:未就学児を持つ4,000名の父母
(父親2,000名、母親2,000名)

調査方法:ネット調査会社の登録モニターを利用したウェブアンケート調査 *2002年調査は登録モニターによる郵送調査

抽出方法:北海道・東北、東京都、北関東・南関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄8つの地域ブロック別に、人口比率にあわせて登録モニターを無作為に抽出

調査実施時期:平成26年6月

<分析項目>

1. 子育てについての意識
2. 子どもの育ちと子育て支援環境
3. 子育てにおける父母の役割分担
4. 仕事と子育ての両立の状況
5. 基本属性

<まとめ>

1. 子育てについての意識

～子どもが生まれる前の子どもを持つことに対する不安感は、前回調査(2002年)よりも、2割程度増加。父親の仕事と子育ての優先度は、仕事から子育てにシフトする傾向、希望する子ども数自体は減っていないが現実には持っていない状況もある～
(p.8-17)

●子育ての楽しさ

父親、母親ともに、7割前後が子育てを楽しんでいると感じており、前回調査(2002年)と同程度である。夫婦の就業形態別にみると、「正社員×専業主婦(夫)」世帯の母親がもっとも子育ての楽しさを感じている割合が低い。

●子どもが生まれる前の子育て観

父親、母親ともに、「子どもが好きで、欲しいと思っていた」等前向きな子育て観を持っていた人が7～8割を占めている。ただし「子どもを持つのが不安だった」という人が、今回調査では父親46.6%、母親50.1%と、前回調査の父親29.4%、母親35.2%よりもかなり多く、不安感が強くなっている状況が見られる。また、子どもを持つことに不安を感じていた人は、感じていなかった人よりも、出産後、子育てを楽しんでいる割合が低い。

●子育ての優先度

父親の子育ての優先度についての希望は、前回調査よりも「仕事と家事や育児等を同等に重視」が減少し、「どちらかと言えば家事・育児等が優先」が増加している。また、父親の子育ての現実には、「仕事等の自分の活動に専念」、「どちらかと言えば仕事等が優先」が減少し、「どちらかと言えば家事・育児等が優先」、「家事や育児が優先」が増加している。

●希望する子ども数

現在の子ども数と今後持ちたい子ども数を合わせてみると、現在の子ども数「1人」と「2人」で、前回調査と比べて「今後出産希望あり」の割合が高い。希望する子ども数をまだ持っていない人の割合が高いが、希望する子ども数そのものは、あまり減少はしていないとみられる。

2. 子どもの育ちと子育て支援環境

～子どもの育つ環境としてIT機器等の利用が増え、自然や同年代の子と触れ合う機会の減少が懸念されている。また親についても、地域の中での子どもを通じた付き合いや近所の子育て相談相手等、人的なつながりが減少している～

(p.18-31)

●家の近くの子どもの遊び場

家の近くの子どもの遊び場について最も多いのは、今回の調査でも前回の調査と同様「雨の日に遊べる場所がない」、次いで多いのが「遊具などの種類が充実していない」であった。今回調査では、3番目に「近くに遊び場がない」が上がってきている。

●子どもの育つ環境についての不安

TV・DVDやパソコン・スマートフォン等の利用が多く、屋外で身体を動かしたり、自然と触れ合ったり、同年齢の子どもたちと遊ぶ機会が不足していることなどが上位にあげられる。

●地域の中での子どもを通じた付き合い、子育ての相談相手

父親、母親ともに「子どもを通して関わっている人はいない」と回答する割合が増え、子どもを通じた付き合いが全体的に減少している状況が見られる。また、子育ての相談相手についても、近所に家族以外の相談相手を持つ人の割合が減少している状況が見られる。

●出産前後の支援と子育て支援サービス

出産前後の支援、まだ浸透していないためか利用状況も利用意向も低い。保育等の子育て支援でも「わからない」、「ない」に次いで多いのは「一時預かり」、「放課後児童クラブ」となっている。年齢別に利用している・したことのある子育て支援をみると、子の年齢が低いほど、利用したサービスが「ない」あるいは「わからない」の割合が高い。

●認定こども園が増えた際の認定こども園の利用意向

父親、母親ともに最も多いのは「わからない」がもっとも多く、まだ制度や保育・教育内容が浸透していないため、判断が難しいものとみられる。

3. 子育てにおける父母の役割分担

～主に、母親が家事(食事の支度等)や子育て(食事をさせる等)を担い、父親は、一部の家事(ゴミ出し等)や子育て(遊ぶ等)を担っている。父親が担っている子育てのうち、「保育園、幼稚園等の送り」、「保育園、幼稚園等のお迎え」、「子育て生活のマネジメント」の割合は低い～

(p.32-39)

●家事、子育ての役割分担

家事・子育ての役割分担について、父親でもっとも多いのは「配偶者・パートナーが主で自分が一部担っている」で、家事では57.8%、育児では62.0%である。母親で最も多いのは「自分が主で、配偶者・パートナーが一部担っている」であり、家事では47.9%、子育てでは68.1%であった。

●担っている家事、子育て

父親が担っている役割は、家事では「ゴミ出し」等の割合が高く、子育てでは「遊ぶ」等の割合が高く、「保育園、幼稚園等の送り」、「保育園、幼稚園等のお迎え」、「子育て生活のマネジメント」の割合は低い。正社員の父親で保育園等の送り迎えを配偶者にすべて任せている割合は、父親の労働時間が50時間/週を超えると高くなる。父親の家事・子育てへの関わりについて、母親が評価している点としては、「子どもとよく遊ぶ」、「子どもの日常の世話をする」が多く、不満な点としては、「子どもの模範となる生活態度をとる」、「日常の家事をする」が多くあげられている。

●子育てへの関わり度合い

自身の子育てへの関わり度合いについて、父親の「ある程度は十分である」と「十分である」の合計は63.2%、母親の「ある程度は十分である」と「十分である」の合計は85.9%であった。前回調査では、自身の関わりについて「十分である」と「ある程度は十分である」を合計した割合は、父親で55.9%、母親で91.9%であった。子育てへの関わりが十分でない原因については、父親、母親ともに、「仕事が忙しすぎる」と回答した割合が最も高く、前回調査と同様であった。父親の平日の家事・育児時間は、週当たり労働時間が長いほど低い傾向がみられる。

4. 仕事と子育ての両立の状況

～結婚後や子どもをもった後は、父母ともに「フルタイムだが時間の融通が利く仕事」、「フルタイムだが残業のない仕事」、母親では、「短時間勤務」や「在宅勤務」で働きたいという希望が多い。実態としても、父親では「恒常的に残業あり」で働く正社員の割合は減っている～ (p.40 -49)

●就業形態

就業形態でもっとも多いのは、父親では「正社員：恒常的に残業あり」、母親では「無職」であった。前回調査でも、もっとも多い就業形態は父母ともに同じだが、父親の「恒常的に残業あり」の割合は減っている。

●通常働いている日に帰宅する時間、週当たりの平均労働時間

父親と母親が通常働いている日に帰宅する時間のうち最も多い組合せは、「父親の19時以降22時未満、母親の16時以降19時未満」であった。父親と母親の週当たりの平均労働時間のうち最も多い組み合わせは、「父親の40～49時間と母親の40～49時間」であった。

●育児休業取得の状況

末子で育児休業を取得した割合は、父親の場合、正社員で8.8%、契約・パート等で8.8%である。母親では、正社員で81.1%、契約・パート等で22.9%である。父母ともに、契約・パート等では「対象でない・働いていない」が5割強を占めるが、中には、自身が対象であるもののそのことを知らない人が含まれる可能性がある。育休を取得した女性の中には復帰に不安を感じた人も3割を超える。

●理想の働き方

父親、母親ともに、結婚後や子どもをもった後は、未婚の時のような「急な残業もあるフルタイムの仕事」を希望する割合は減少し、父母ともに「フルタイムだが時間の融通が利く仕事」、「フルタイムだが残業のない仕事」、母親では、「短時間勤務」や「在宅勤務」で働きたいという希望が多くなっている。

●ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)への満足度

自身のワーク・ライフ・バランスの満足度について、満足している(「満足している」、「まあ満足している」)は、父親で58.1%、母親で55.1%である。就業形態別にみると満足していない理由について、父親で最も多いのは「子育てに十分取り組めていない」、母親で最も多いのは「自分の時間が十分に取れていない」、次いで、「子育てに十分取り組めていない」であった。

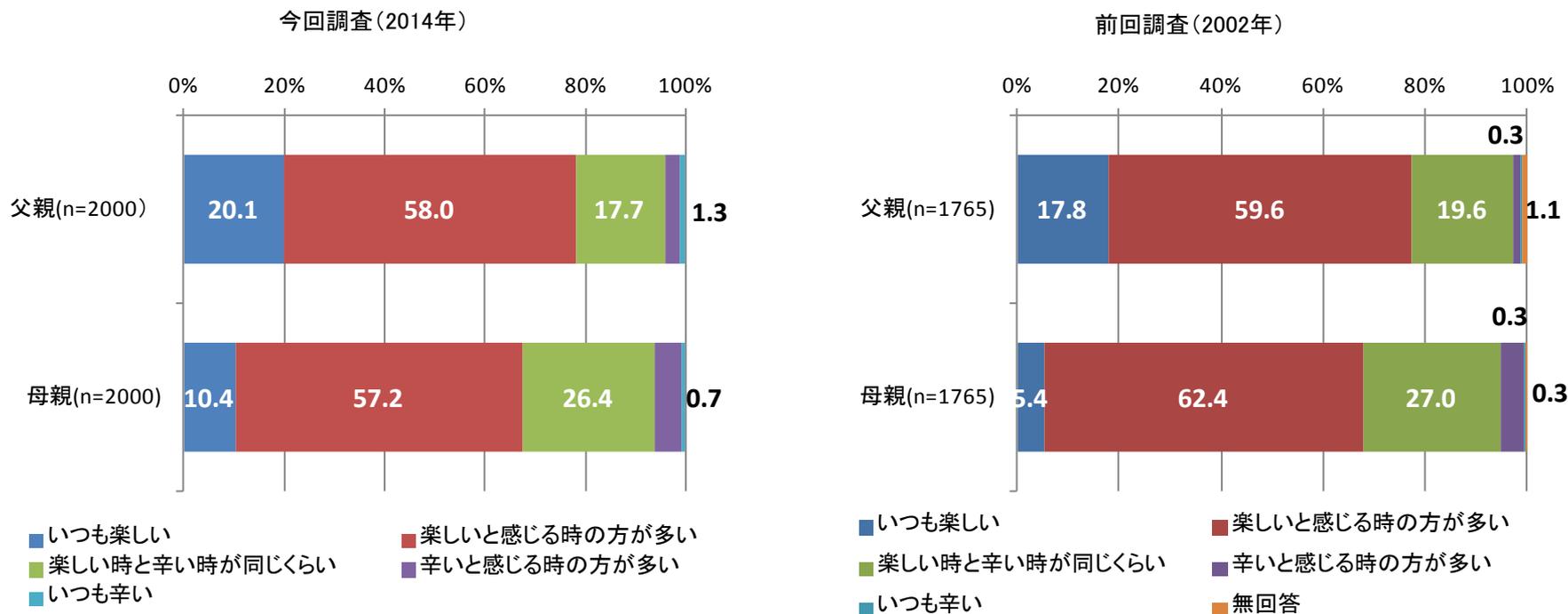
<参照データ>

1. 子育てについての意識

(1) 子育ての楽しさ

子育てを楽しんでいるかについて、「楽しい」(「いつも楽しい」、「楽しいと感じる時の方が多」の合計)と感じる割合は、父親78.1%、母親67.6%であり、7割前後が子育てを楽しんでいる。前回調査でも、「楽しい」と感じる割合は、父親77.4%、母親67.8%であり、同じく7割前後が子育てを楽しんでいた。母親の方が楽しいと感じている割合が低い傾向も変わらない。

図表1 子育ての楽しさ:単数回答

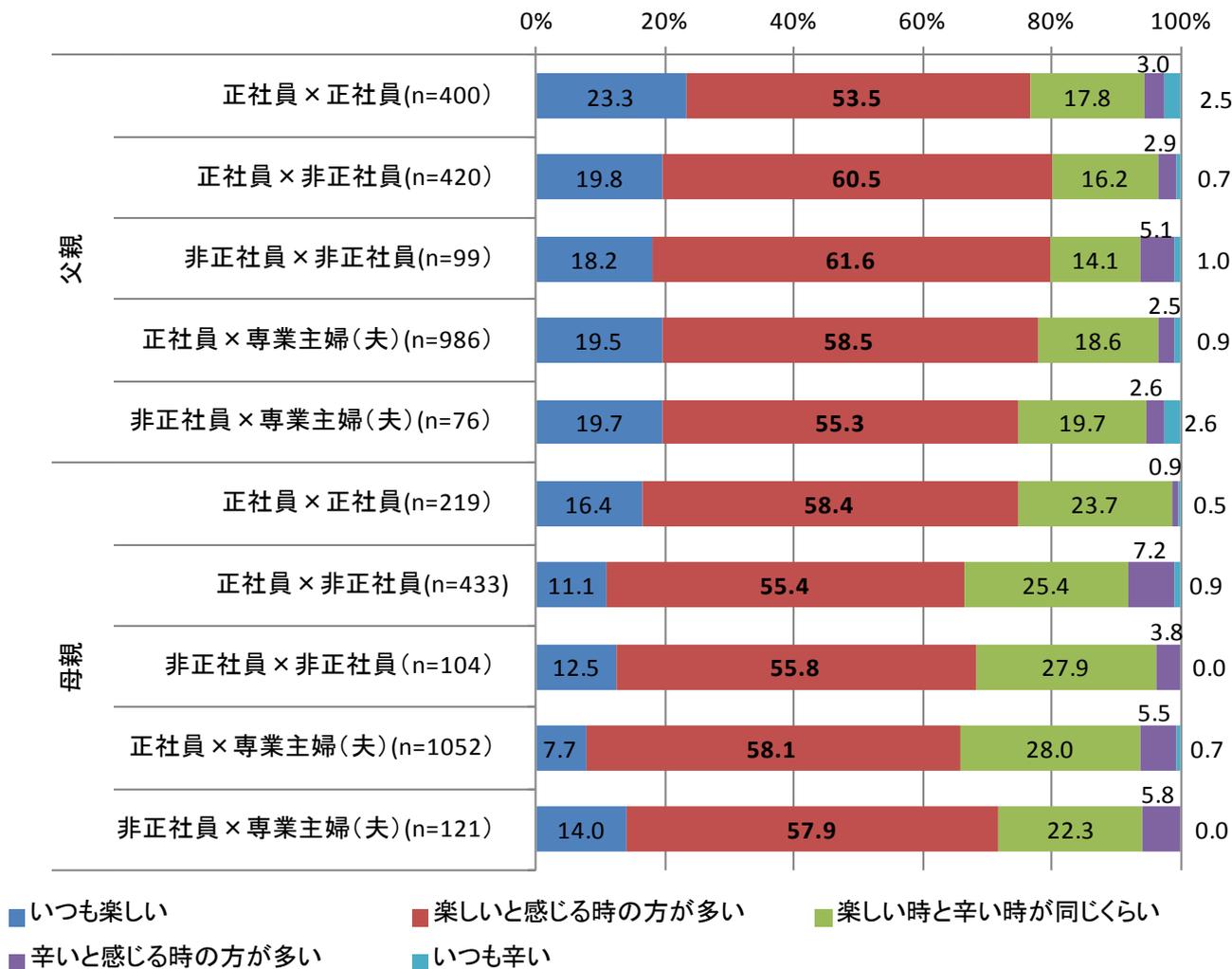


(2)夫婦の就業形態と子育ての楽しさ

夫婦の就業形態の組み合わせ別に子育てを楽しんでいるかについてみると、父親よりも母親で、就業形態による差が大きい。「楽しい」「いつも楽しい」、「楽しいと感じる時の方が多
い」と回答する割合がもっとも低いのは、「正社員×専業主婦(夫)」家庭の母親である。

今回調査(2014年)

図表2 夫婦の就業形態別子育ての楽しさ:単数回答

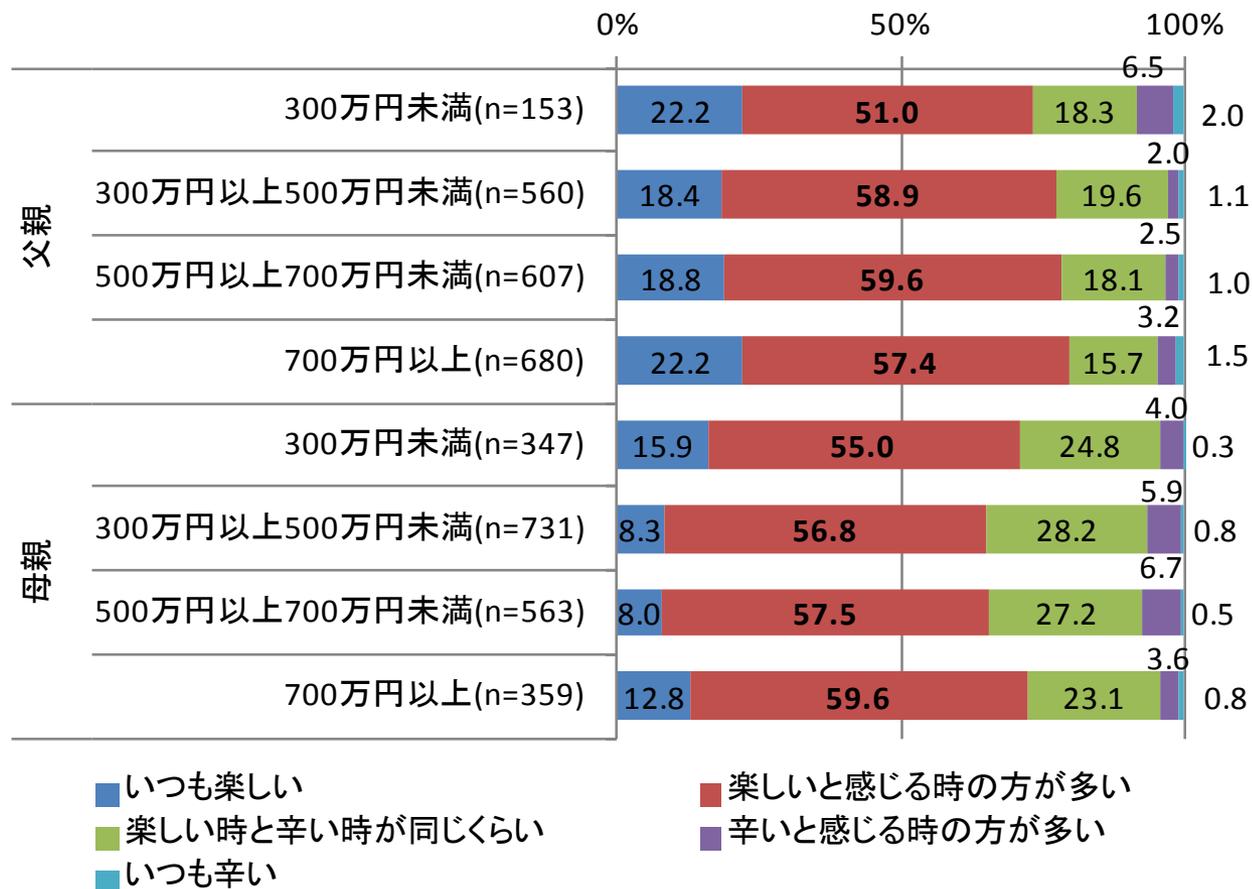


<参考> 世帯年収と子育ての楽しさ

夫婦の就業形態の違いによる子育ての楽しさは、世帯年収の違いを背景としたものではないかとも推測されることから、世帯年収別子育ての楽しさについて確認した。下図のとおり、父親では世帯年収の違いによる子育ての楽しさの違いはほとんどなく、母親では中間層で子育てが「いつも楽しい」と回答する割合がやや低い傾向はみられない。

今回調査(2014年)

図表3 世帯年収別子育ての楽しさ:単数回答

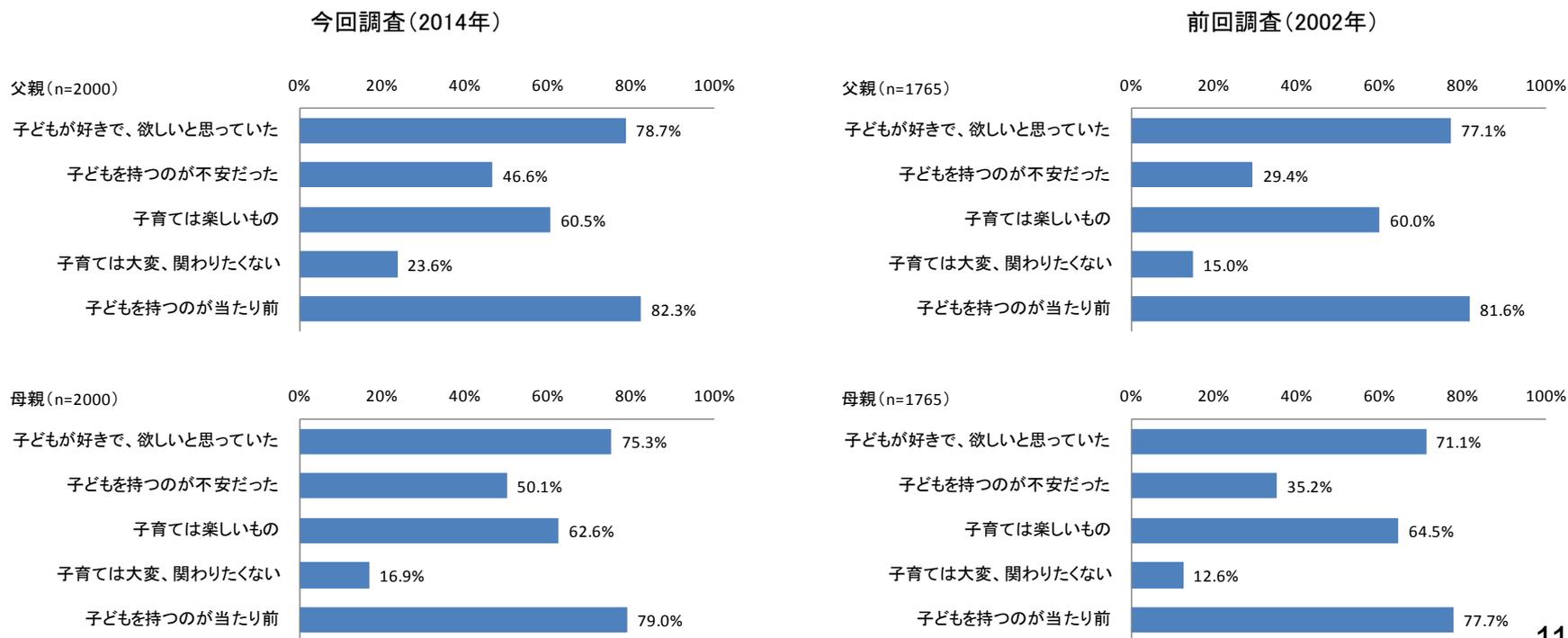


(3)子どもが生まれる前の子育て観

子どもが生まれる前の子育て観について、全般的に父親と母親は近い傾向を示しており、「結婚したら子どもを持つのが当たり前だと思っていた」、「子どもが好きで、欲しいと思っていた」と回答した割合が、7～8割を占めていた。

ただし、「子どもを持つのが不安だった」と回答した割合は、今回調査では、父親46.6%、母親50.1%であり、前回調査の父親29.4%、母親35.2%と比較すると、生まれる前の子どもを持つことに対する不安感が高くなっている状況が見られる。

図表4 子どもが生まれる前の子育て観：単数回答

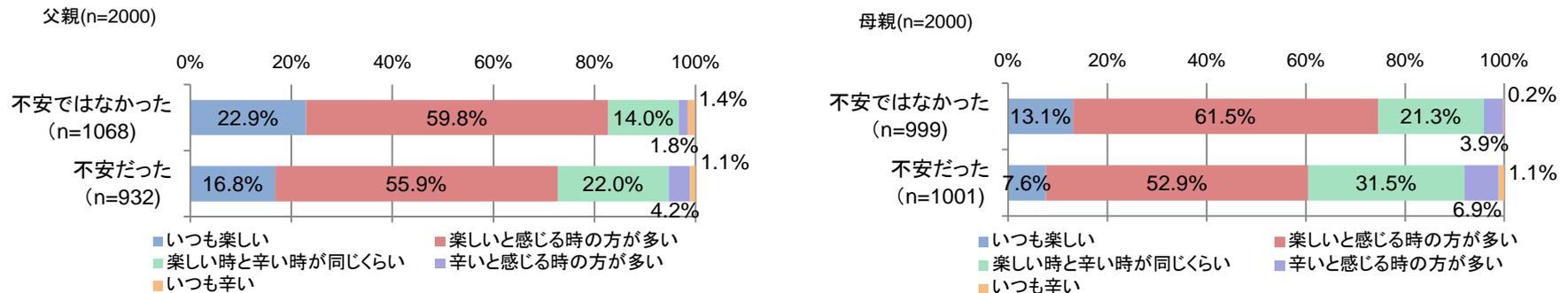


(4) 出産前の子どもを持つことへの不安と出産後の子育ての楽しさ

子どもを持つ前の子育て観として、子どもを持つことに不安を感じていた者が、現在、子育てを「楽しい」「いつも楽しい」「楽しいと感じる時の方が多い」と回答した割合は、父親72.7%、母親60.5%である一方、「不安でなかった」と感じていた者が「楽しい」と回答した割合は、父親82.7%、母親74.6%であった。出産前に不安を感じていた人の方が、出産後も子育てを楽しんでいる割合が高い。

図表5 子育てについて不安の有無別の子育ての楽しさ:単数回答

今回調査(2014年)

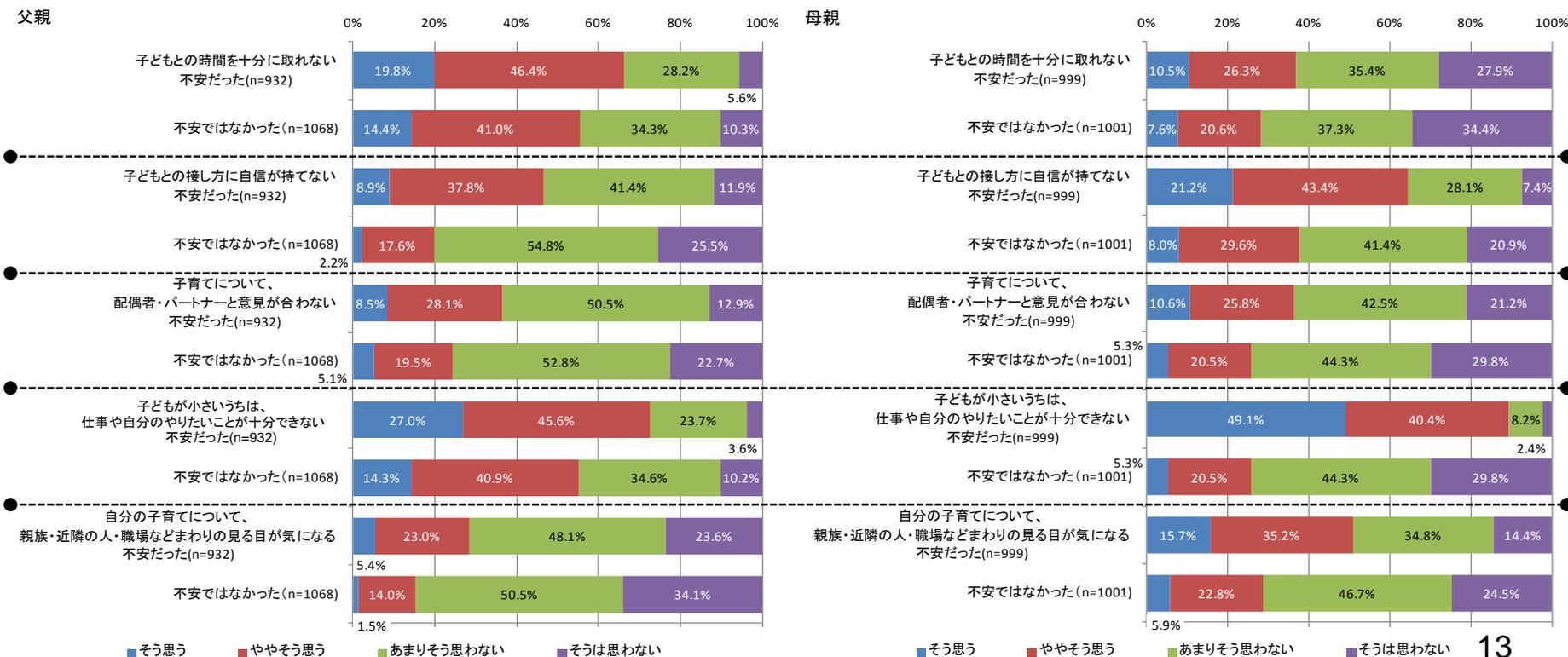


(5) 出産前の子どもを持つことへの不安と出産後の子育ての不安・悩み

出産前に子どもを持つことに不安を感じていた人の不安や悩みの内容について、不安を感じていた父親は、「子どもとの接し方に自信がもてない」の「そう思う」「ややそう思う」の合計が46.7%である一方、不安を感じていなかった人は19.8%であった。また、不安を感じていた母親は、「子どもが小さいうちは仕事や自分のやりたいことが十分できない」の「そう思う」「ややそう思う」の合計が、不安を感じていた人は89.1%である一方、不安を感じていなかった人は25.8%であった。

図表6 子どもをもつことの不安の有無別子育ての不安・悩み：単数回答

今回調査(2014年)



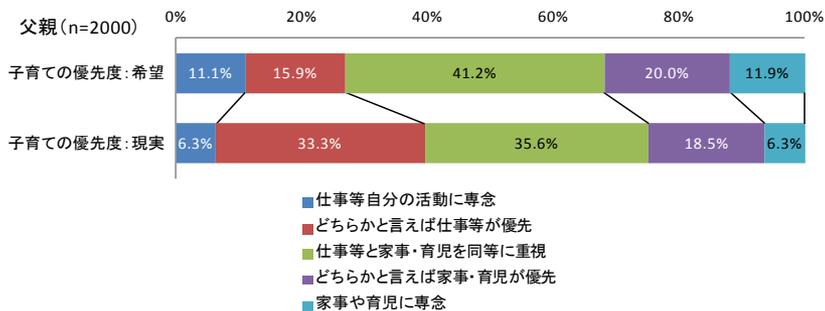
(6)子育ての優先度

父親の子育ての優先度(希望)は、「仕事と家事や育児等を同等に重視」が前回調査から減少し、「どちらかと言えば家事・育児等が優先」が増加している。また、父親の子育ての優先度(現実)は、「仕事等の自分の活動に専念」、「どちらかと言えば仕事等が優先」が減少し、「どちらかと言えば家事・育児等が優先」、「家事や育児が優先」が増加している。

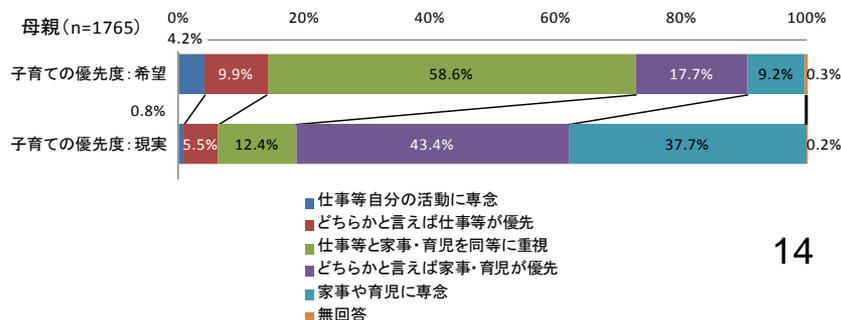
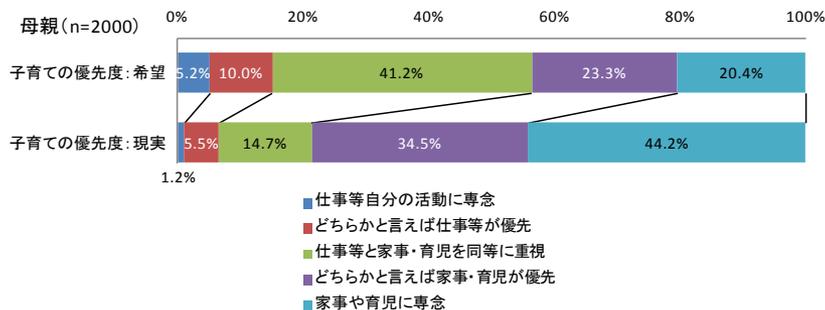
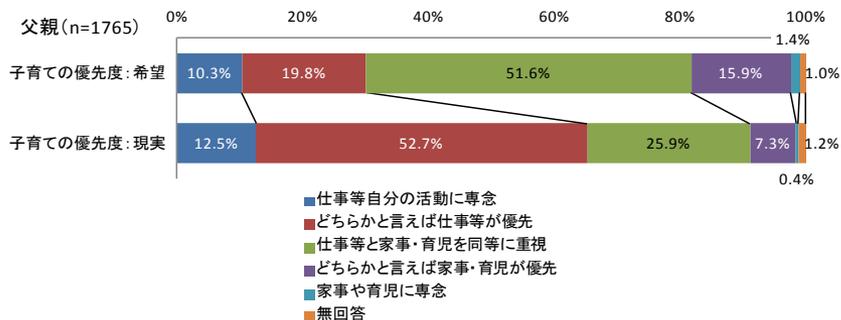
一方、母親の子育ての優先度(希望)は、「仕事と家事が同等」が減少し、「どちらかと言えば、仕事や自分の活動よりも家事や育児が優先」、「家事や育児に専念」が増加している。また、母親の子育ての優先度(現実)は、「家事や育児に専念」が増加し、「どちらかといえば家事優先」が減少している。

図表7 子育ての優先度(希望、現実):単数回答

今回調査(2014年)



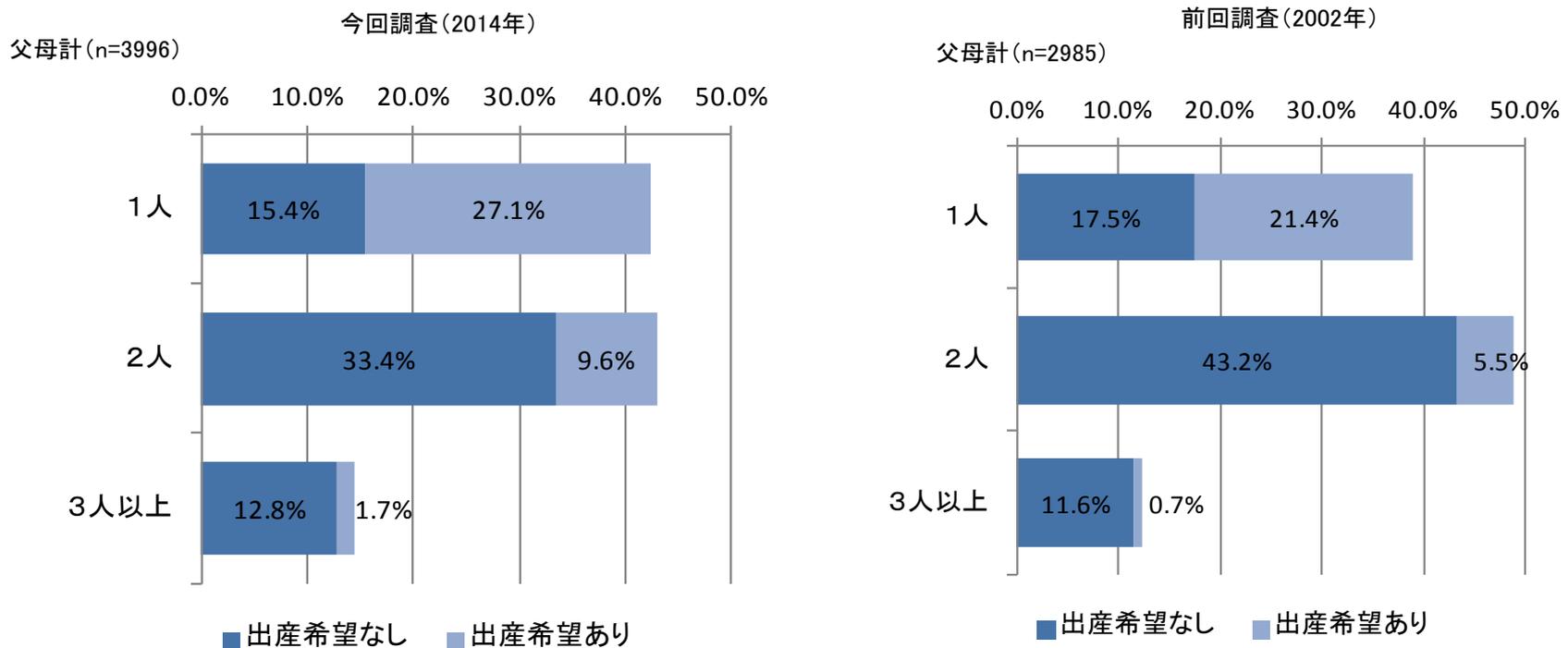
前回調査(2002年)



(7)今後の出産希望

今回の調査対象の父母全体に対して、現在の子ども数と今後の出産希望の分布状況をみた。今回の調査では、「子どもが1人で、今後の出産希望なし」が15.4%、「子どもが1人で、今後の出産希望あり」が27.1%となっている。前回調査と比較すると、現在の子ども数「3人以上」はわずかに増加しており、現在「2人」だがさらに子が欲しい人の割合も増加している。また、現在の子ども数「2人」で、「今後の出産希望なし」の割合がやや低く、現在の子ども数「1人」と「2人」で、前回調査と比べて「今後出産希望あり」の割合が高い。希望する子ども数をまだ持っていない人の割合が高いが、希望する子ども数そのものは、あまり減少はしていないとみられる。

図表8 現在の子ども数別 今後の出産希望



注:「現在の子ども数」と「今後の出産希望の有無」に回答のあった「父母計」を母数(100%)として算出している。

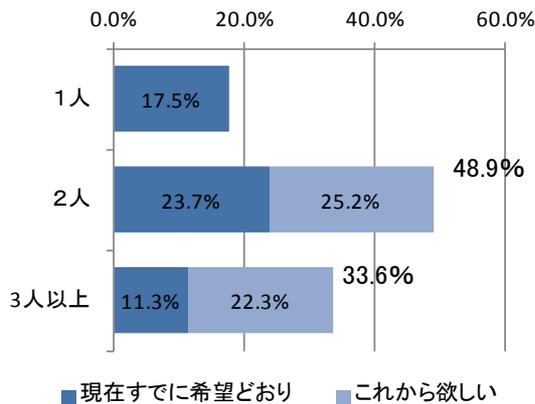
(8) 就業形態と希望する子ども数

就業形態別に現在の子ども数と今後の出産希望を合わせた希望する子ども数を見ると、「2人」の割合は、専業主婦＞自営・内職＞契約・パート＞正社員の順で多く、3人以上はまったく逆に正社員＞契約・パート＞自営・内職＞専業主婦の順に多い。

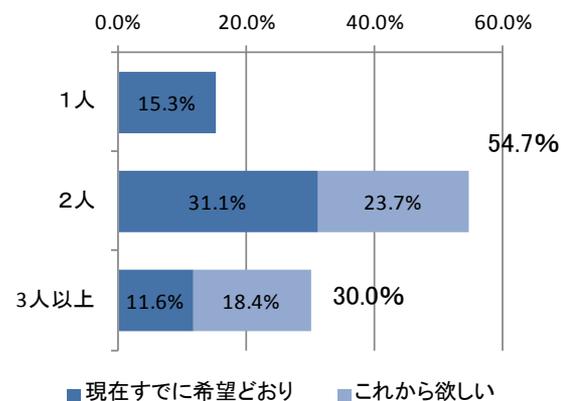
図表9 女性の就業形態別 希望する子ども数別現在の子ども数＋今後の出産希望

今回調査(2014年)

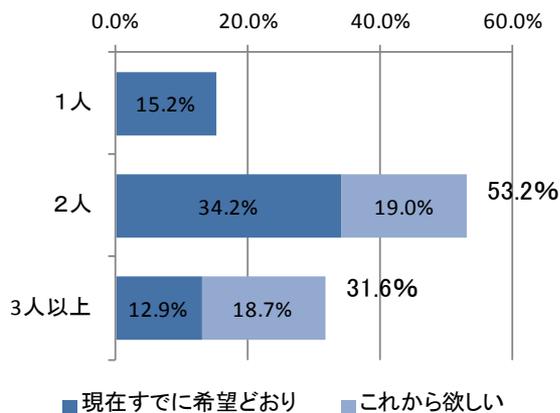
正社員 (n=274)



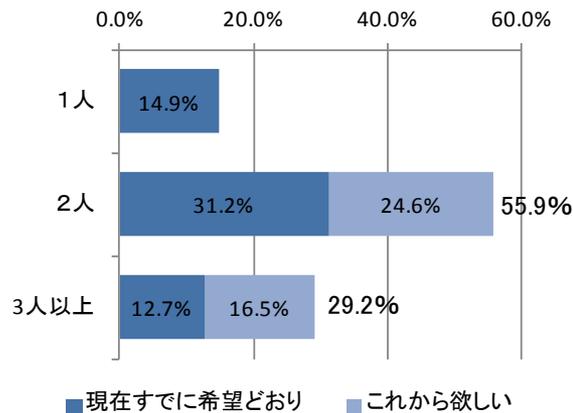
自営・内職・その他 (n=190)



契約・パート社員 (n=348)



専業主婦 (n=1181)

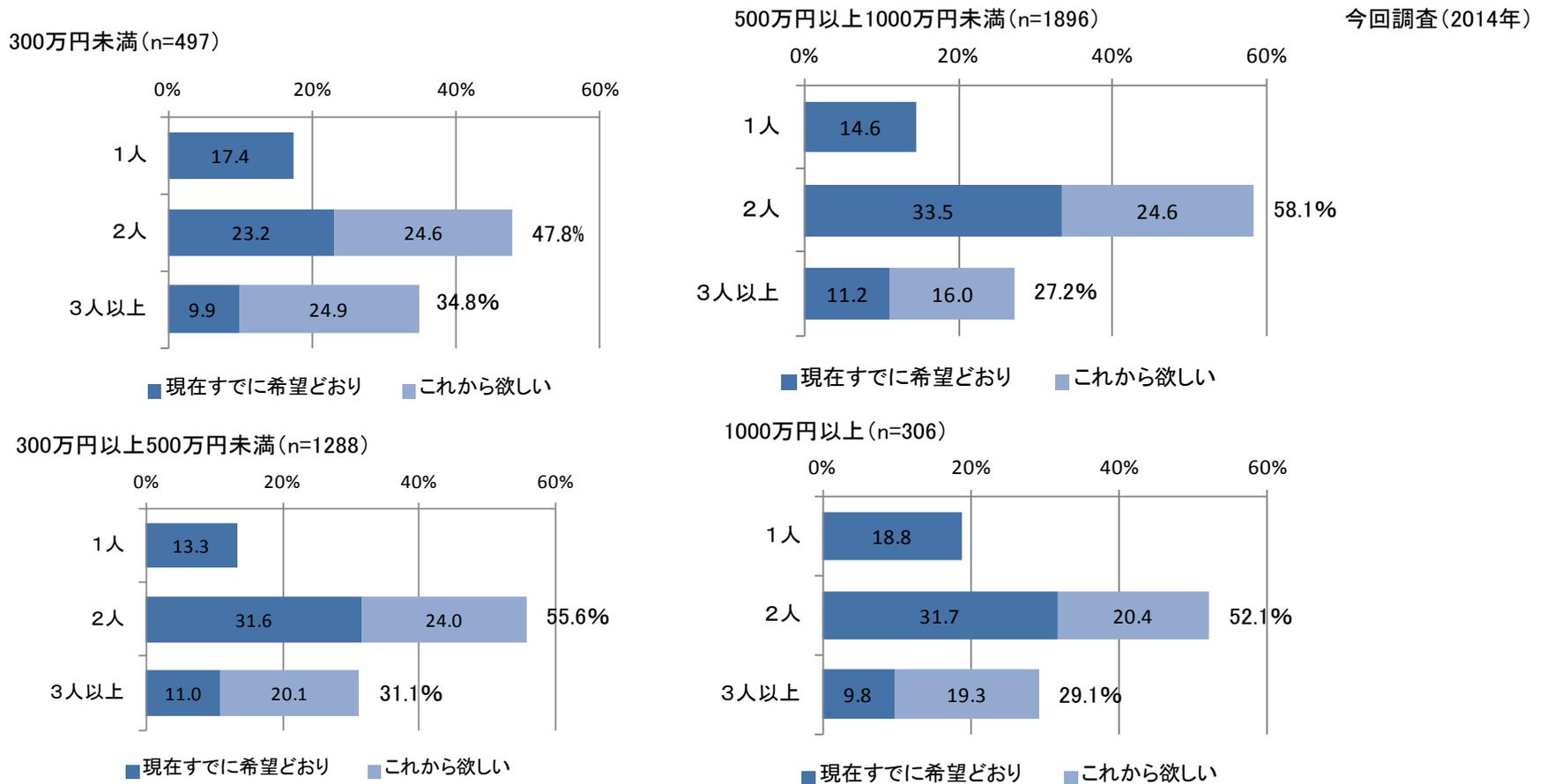


注: 各就業形態ごとに「現在の子ども数」と「今後の出産希望の有無」と「出産希望子ども数」に回答のあった女性の人数を母数(100%)として算出している。

<参考> 世帯年収と希望する子ども数

就業形態による違いの背景に世帯年収があるとみられる可能性があることから、世帯年収別に希望する子ども数の分布状況を確認した。年収300万円未満では、希望する子ども数が3人以上の割合が高く、2人がやや低い。現実には、希望する子ども数2人についてもまだ持っていない割合が高い。

図表10 世帯年収別 希望する子ども数別現在の子ども数＋今後の出産希望



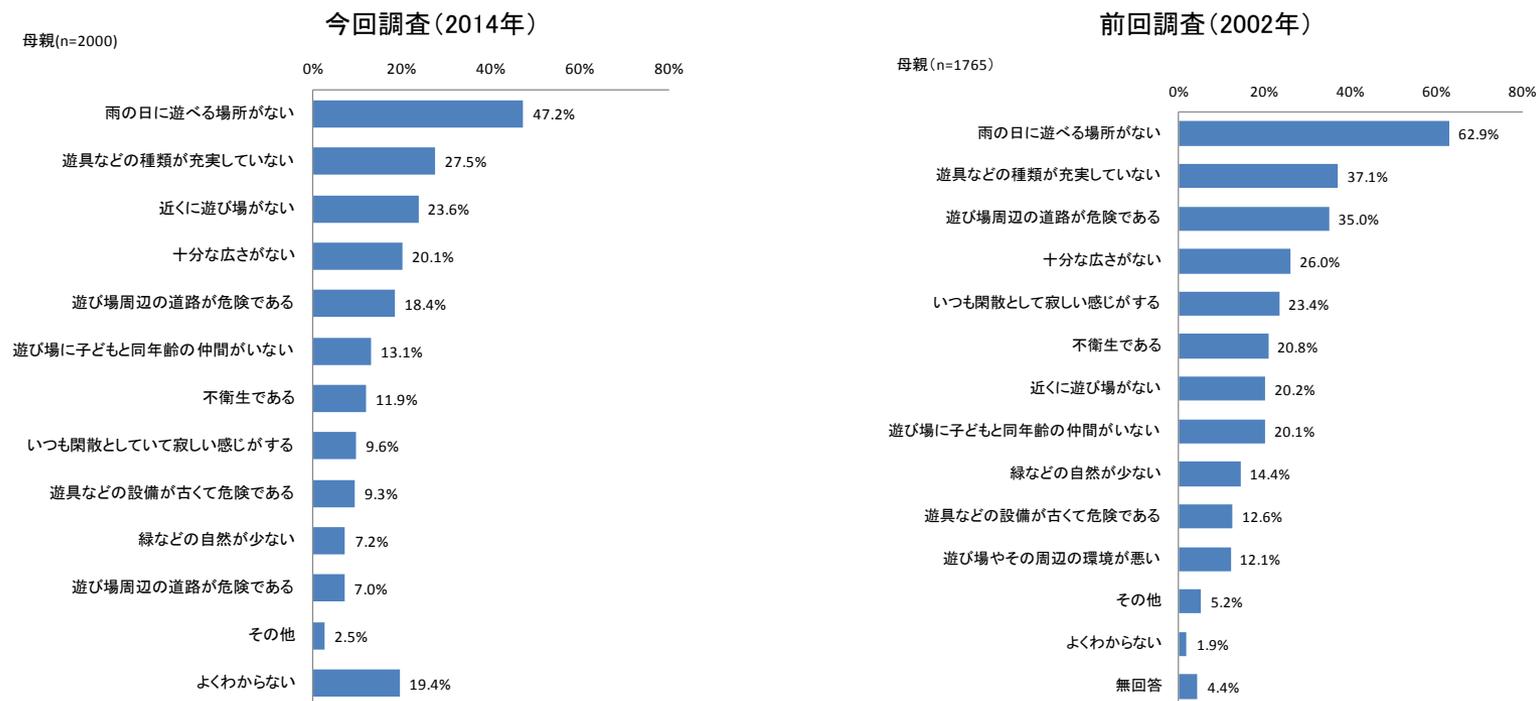
注:各世帯年収区分ごとに「現在の子ども数」と「今後の出産希望の有無」と「出産希望子ども数」に回答のあった男女の人数を母数(100%)として算出している。

2. 子どもの育ちと子育て支援環境

(1) 家の近くの子どもの遊び場

家の近くの子どもの遊び場の課題について最も多いのは、「雨の日に遊べる場所がない」で47.2%、次いで「遊具などの種類が充実していない」で27.5%である。前回調査でも、近隣の子どもの遊び場で困ることについて、「雨の日に遊べる場所がない」が最も多く、次いで「遊具などの種類が充実していない」が多いことは同じだが、今回は、3番目に前回調査と異なり「近くに遊び場がない」が多くなっている。また、前回調査に比べ「よくわからない」という回答が多くなっており、2割弱となっている。

図表11 家の近くの子どもの遊び場(母親):複数回答

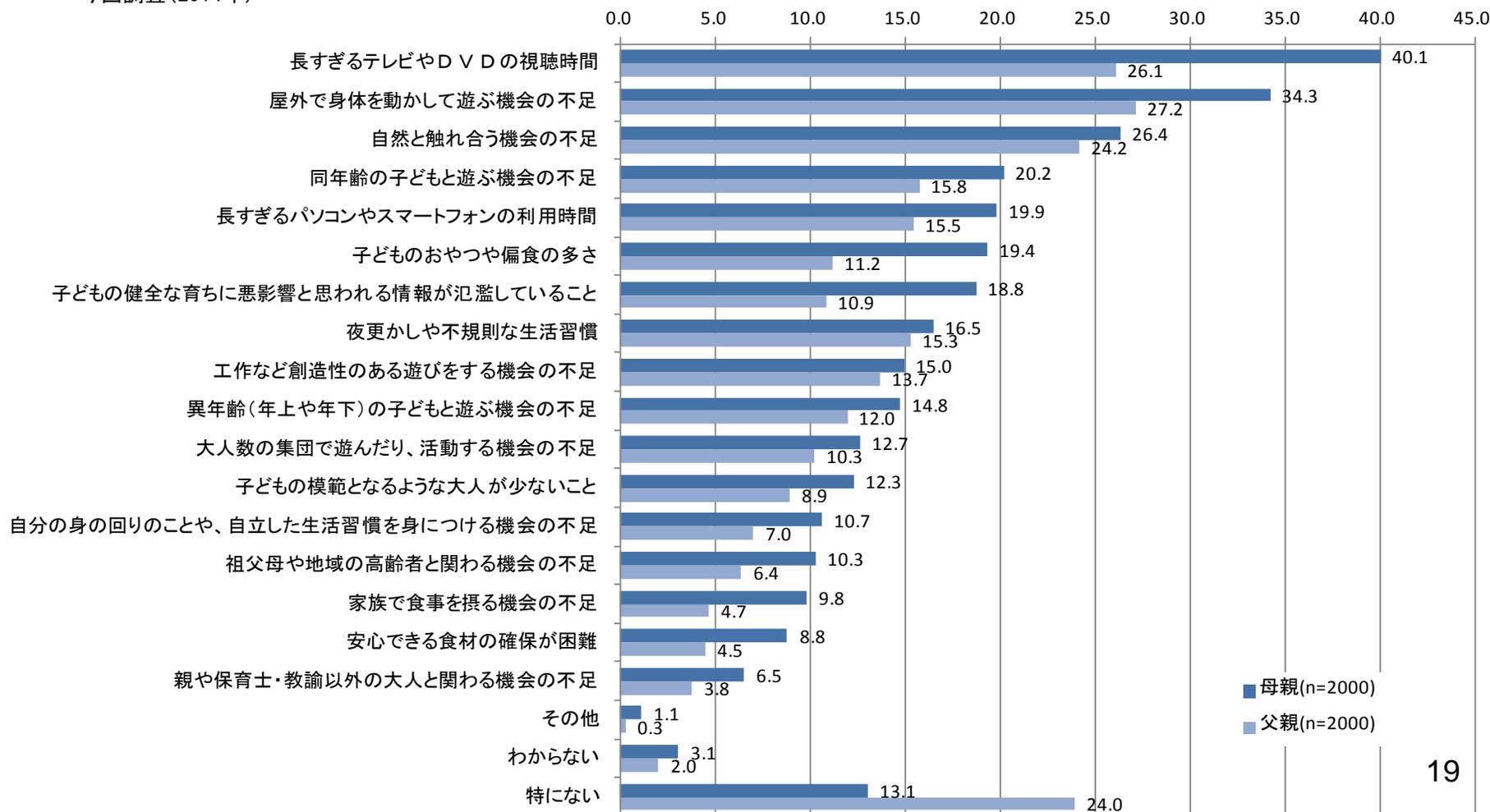


(2)子どもの育つ環境についての不安

父母の不安としては、TV・DVDやパソコン・スマートフォン等の利用が多く、屋外で身体を動かしたり、自然と触れ合ったり、同年齢の子どもたちと遊ぶ機会が不足していることなどが上位にあげられる。全体に、母親の方が不安に思っている割合が高く、父親は、「特にない」の割合(24.0%)が母親(13.1%)と比較して高い。

今回調査(2014年)

図表12 子どもの育つ環境についての不安:複数回答

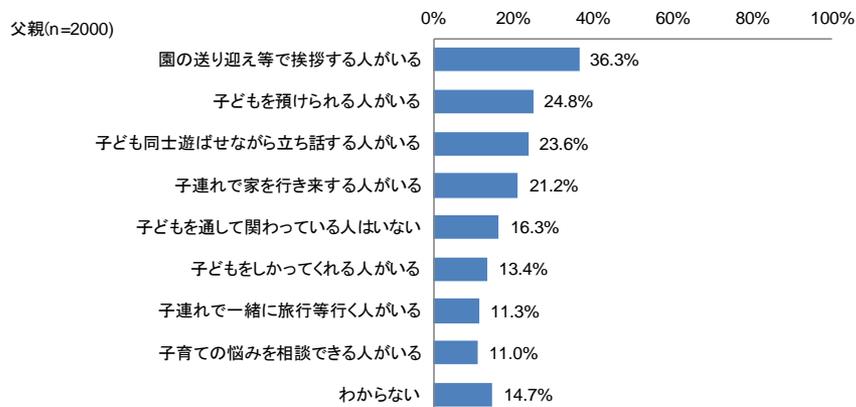


(3) 地域の中での子どもを通じた付き合い

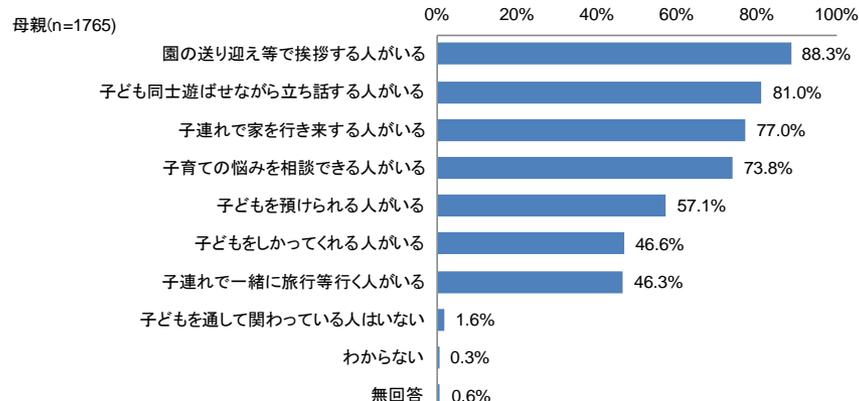
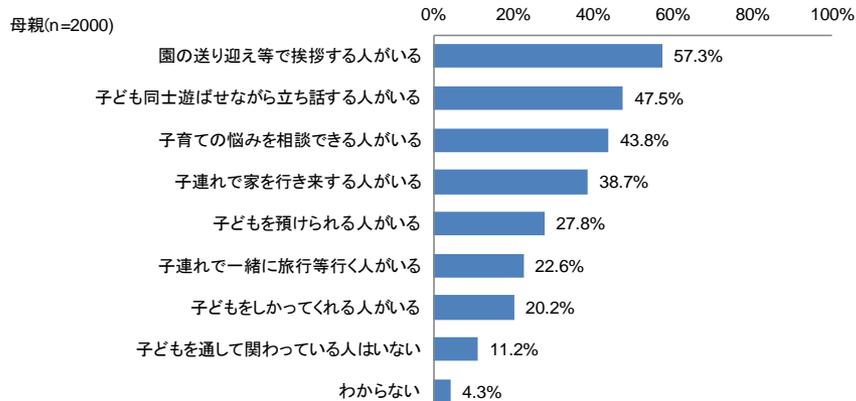
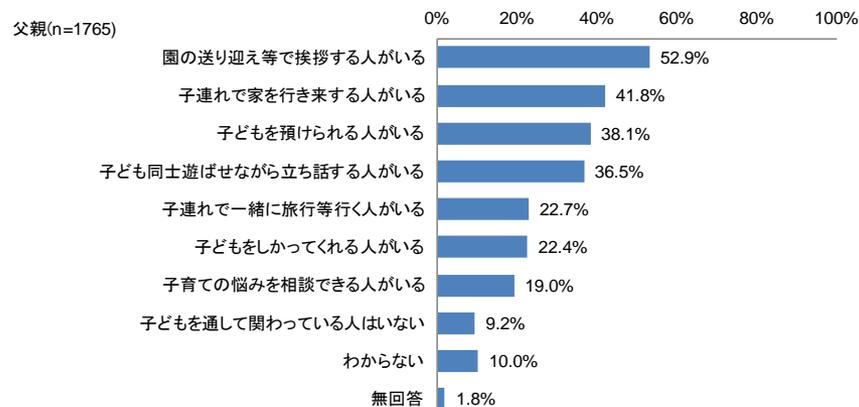
地域の中での子どもを通じた付き合いは、父親、母親ともに「園の送り迎え等で挨拶する人がいる」が最も高い割合(36.3%、57.3%)であった。ただし、前回調査では、「園の送り迎え等で挨拶する人がいる」と回答した割合は、52.9%、88.3%であり、また、「子どもを通して関わっている人はいない」とする回答が高くなっており、子どもを通じた付き合いが全体的に減少している状況が見られる。

図表13 地域の中での子どもを通じた付き合い:複数回答

今回調査(2014年)



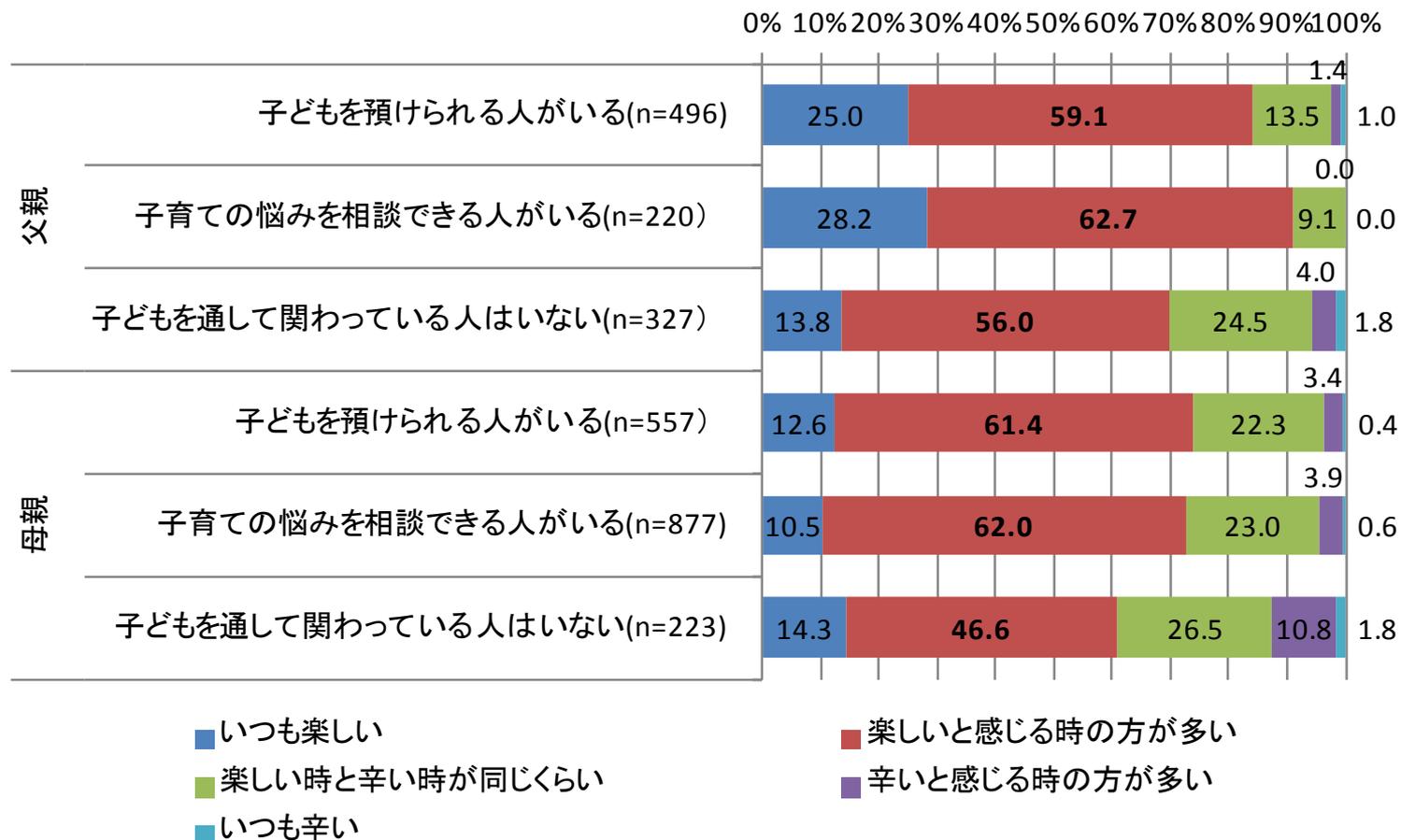
前回調査(2002年)



(4)地域の中での子どもを通じた付き合いと子育ての楽しさ

地域の中での子どもを通じた付き合いの度合いごとに、子育ての楽しさの感じ方をみると、「子どもを通して関わっている人はいない」と答えた人で、父親、母親ともに「いつも楽しい」+「楽しいと感じる時のほうが多い」と回答する割合が低い。

図表14 地域の中での子どもを通じた付き合い別子育ての楽しさ:単数回答

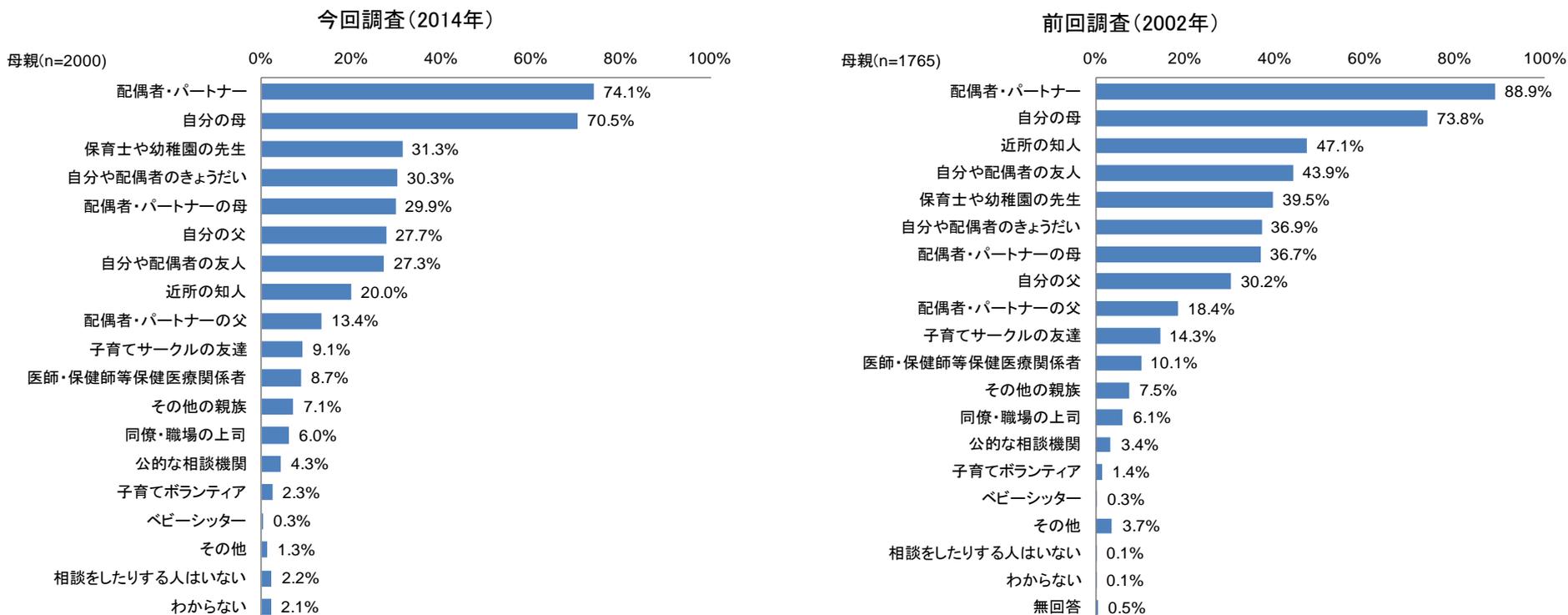


注:前頁の「地域の中での子どもを通じた付き合い」(複数回答)の選択肢「子どもを預けられる人がいる」、「子育ての悩みを相談できる人がいる」、「子どもを通して関わっている人はいない」の3つについて、それぞれ「はい」と答えた人を母数(n)として集計している。

(5)子育てについての相談相手

子育てについての相談相手は、「配偶者・パートナー」が74.1%と最も高く、次いで「自分の母親」(70.5%)であった。前回調査でも「配偶者・パートナー」(88.9%)、「自分の母」(73.8%)が高い割合であったが、前回調査で3番目に高い割合であった「近所の知人」(47.1%)は、今回調査では8番目(20.0%)であり、家族以外の近所で子育てについて相談する相手が減っている状況が見られる。

図表15 子育てについての相談相手(母親):複数回答

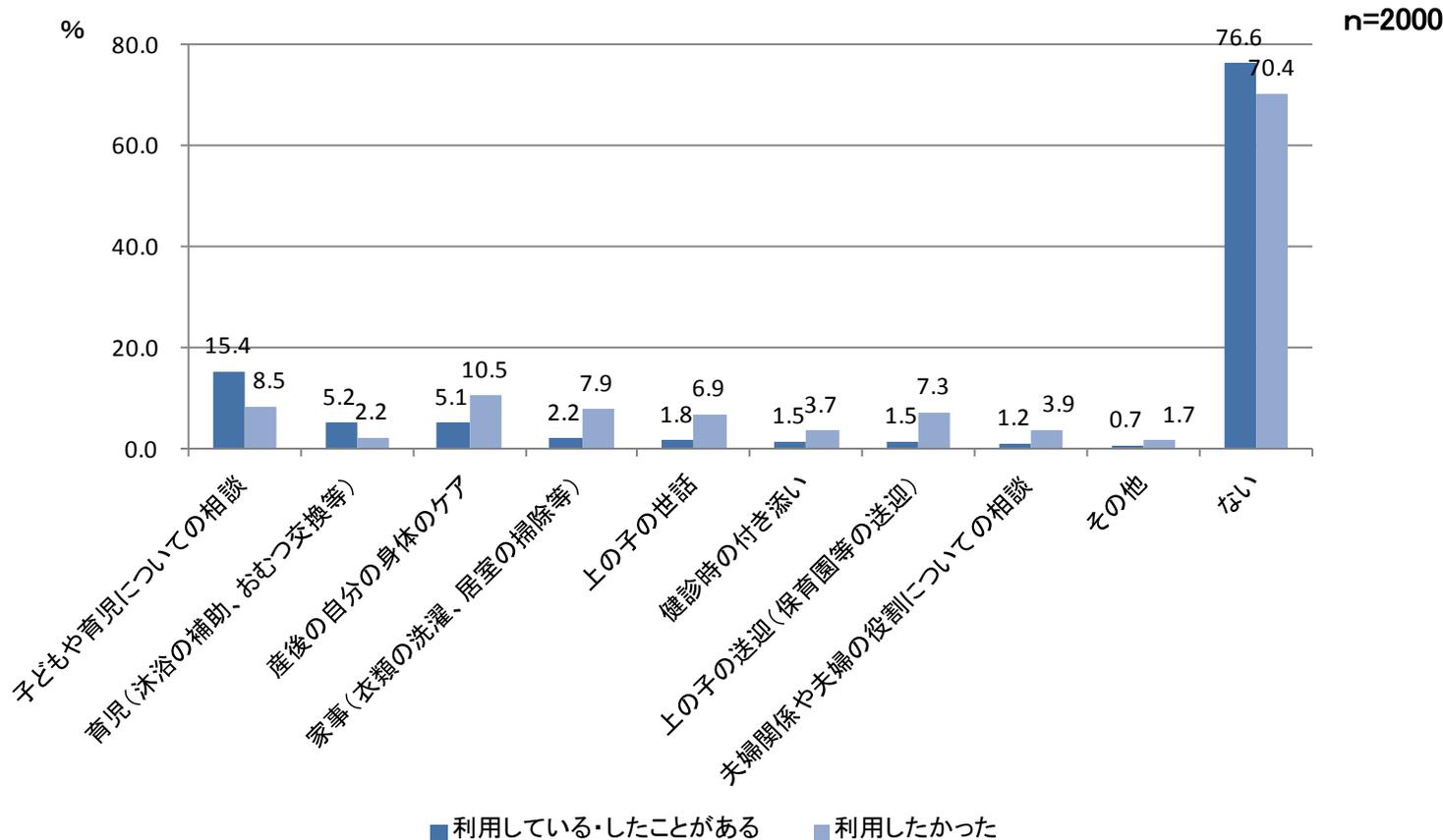


(6) 出産前後に利用した・しなかった家事・育児支援

出産前後に利用した家事・育児支援としては、「子どもや育児についての相談」がもっとも多いが、利用率としては15.4%と、あまり高い水準ではない。利用しなかった支援としては、「産後の自分の身体のケア」がもっとも多いが、これも10.5%にとどまっている。「利用したサービス」、「利用しなかったサービス」とともに、「ない」という回答が7割以上を占めている。出産前後の支援については、保育等の子育て支援に比べて、まだあまり浸透していないとみられる。

今回調査(2014年)

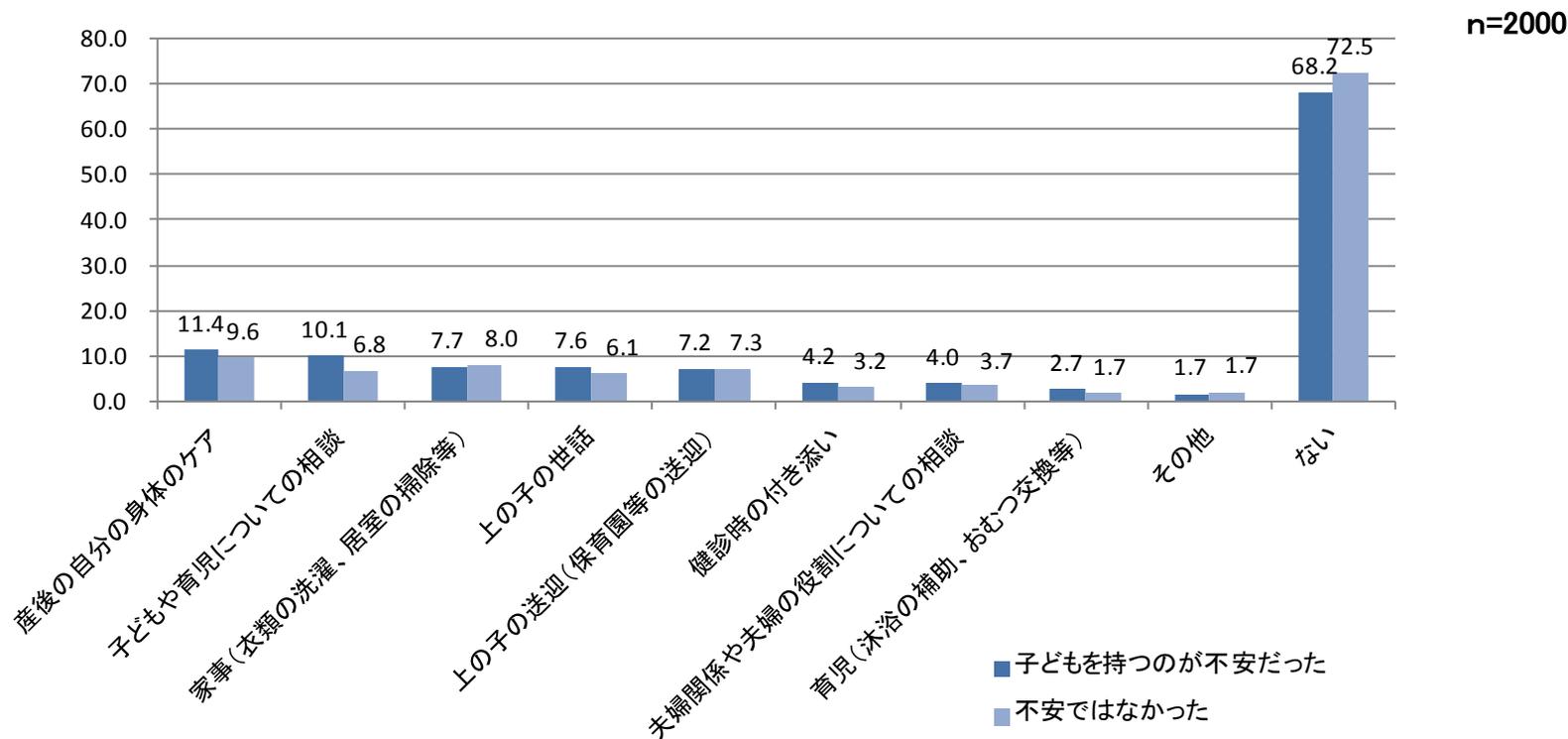
図表16 出産前後に利用した・しなかった家事・育児支援サービス(母親):複数回答



(7)子どもを持つ不安と出産前後に利用したかった家事・育児支援

出産前の子どもを持つことの不安の有無別に「利用したかった」出産前後のサービスをみると、全体に「子どもを持つのが不安だった」人で支援の利用意向がわずかに高いが、その差は小さい。支援の対象とみられる人にも、まだ支援の内容が浸透していないか、支援ニーズにあったサービスになっていない可能性がある。

図表17 子どもを持つ不安の有無別出産前後に利用したかった家事・育児支援サービス(母親)
:複数回答

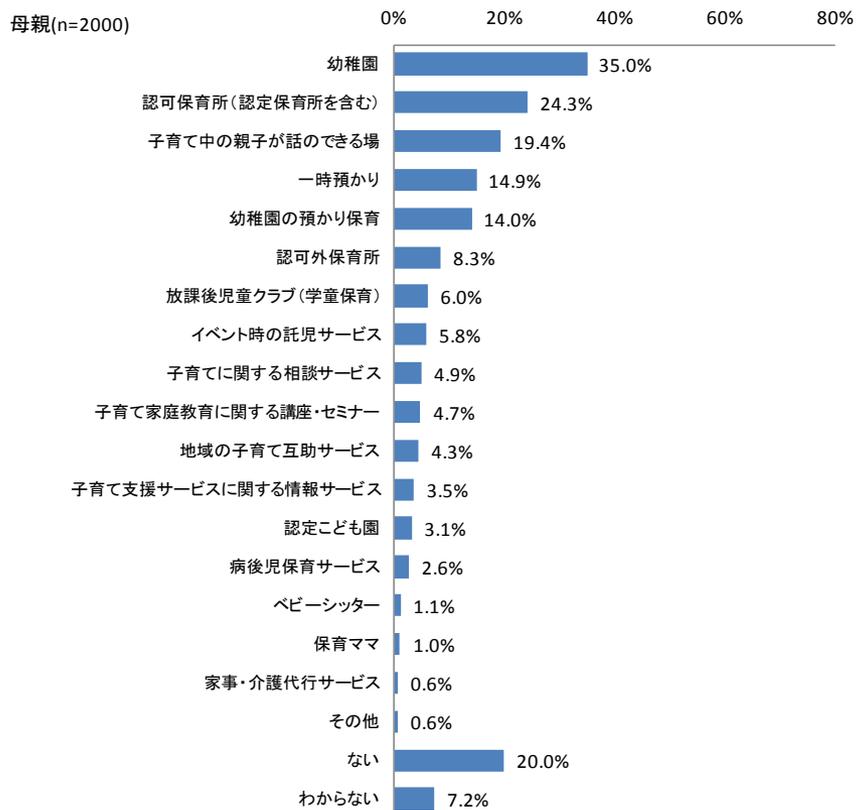


(8)子育て支援サービスの利用状況

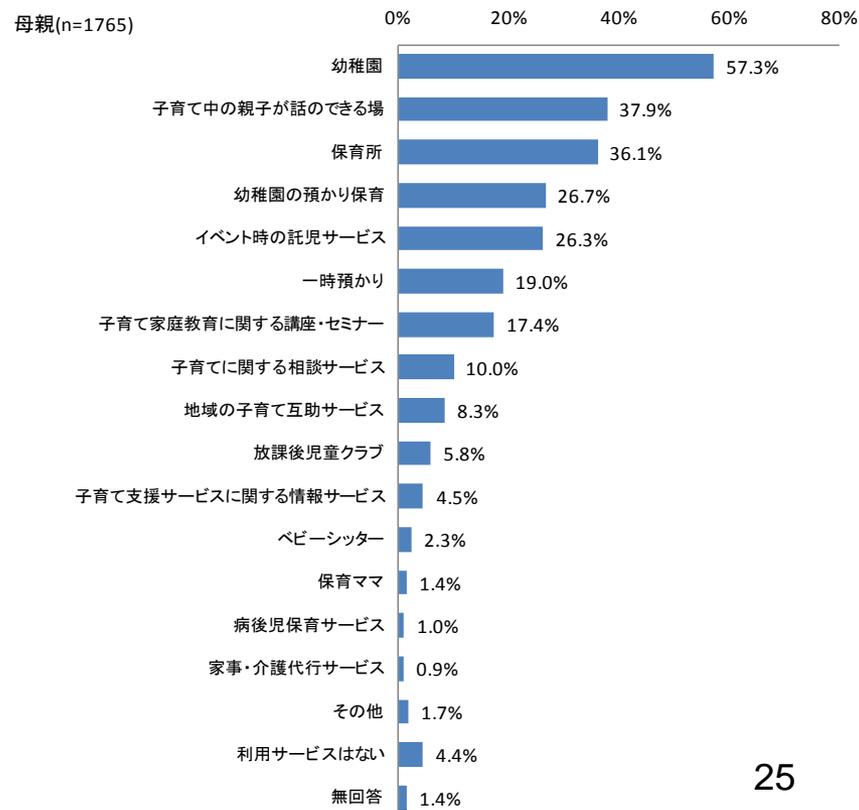
利用している・したことのある子育て支援サービスについて最も多いのは「幼稚園」の35.0%、次いで「認可保育所(認定保育所を含む)」が24.3%であった。前回調査では、「幼稚園」が最も多く57.3%、次いで「子育て中の親子が話のできる場」が37.9%であり、2位と3位が入れ替わっている。また、前回調査に比べて利用したことのあるサービスが「ない」と答えている割合が高い。

図表18 利用している・したことのある子育て支援サービス(母親):複数回答

今回調査(2014年)



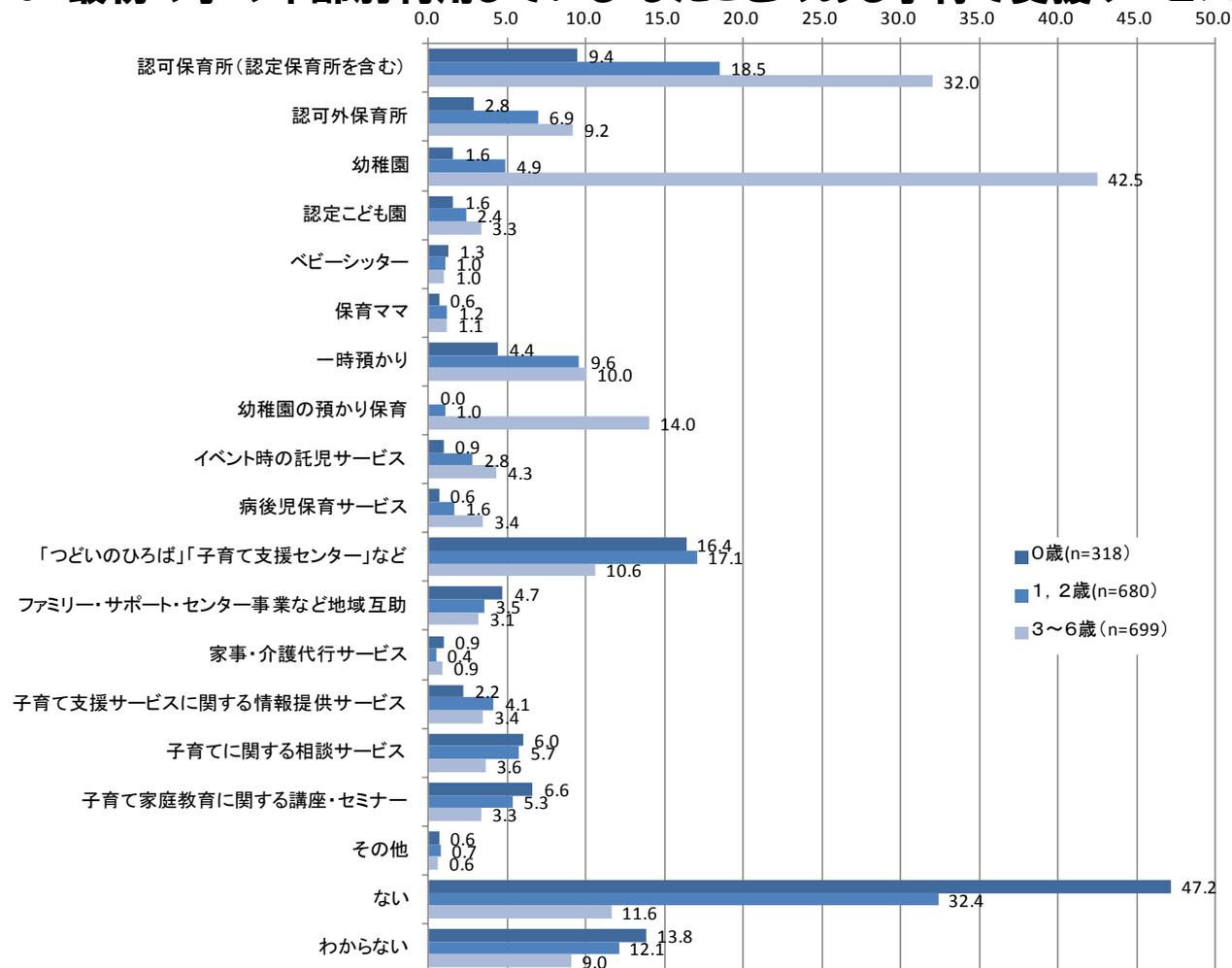
前回調査(2002年)



(9)一人目の子の年齢別子育て支援の利用状況

子が一人の親について、子の年齢別に利用している・したことのある子育て支援サービスについてみると、子の年齢が低いほど、利用したサービスが「ない」あるいは「わからない」の割合が高い。

図表19 最初の子の年齢別利用している・したことのある子育て支援サービス：複数回答



注:「子が一人のみ」の回答者(1697件)を母数とした。

(10)夫婦の就業形態と子育て支援の利用状況

夫婦の就業形態の組み合わせ別にサービスの利用状況は、下表のとおりである。「専業主婦(夫)」の家庭で、利用しているサービスは「ない」と回答する割合が高い。

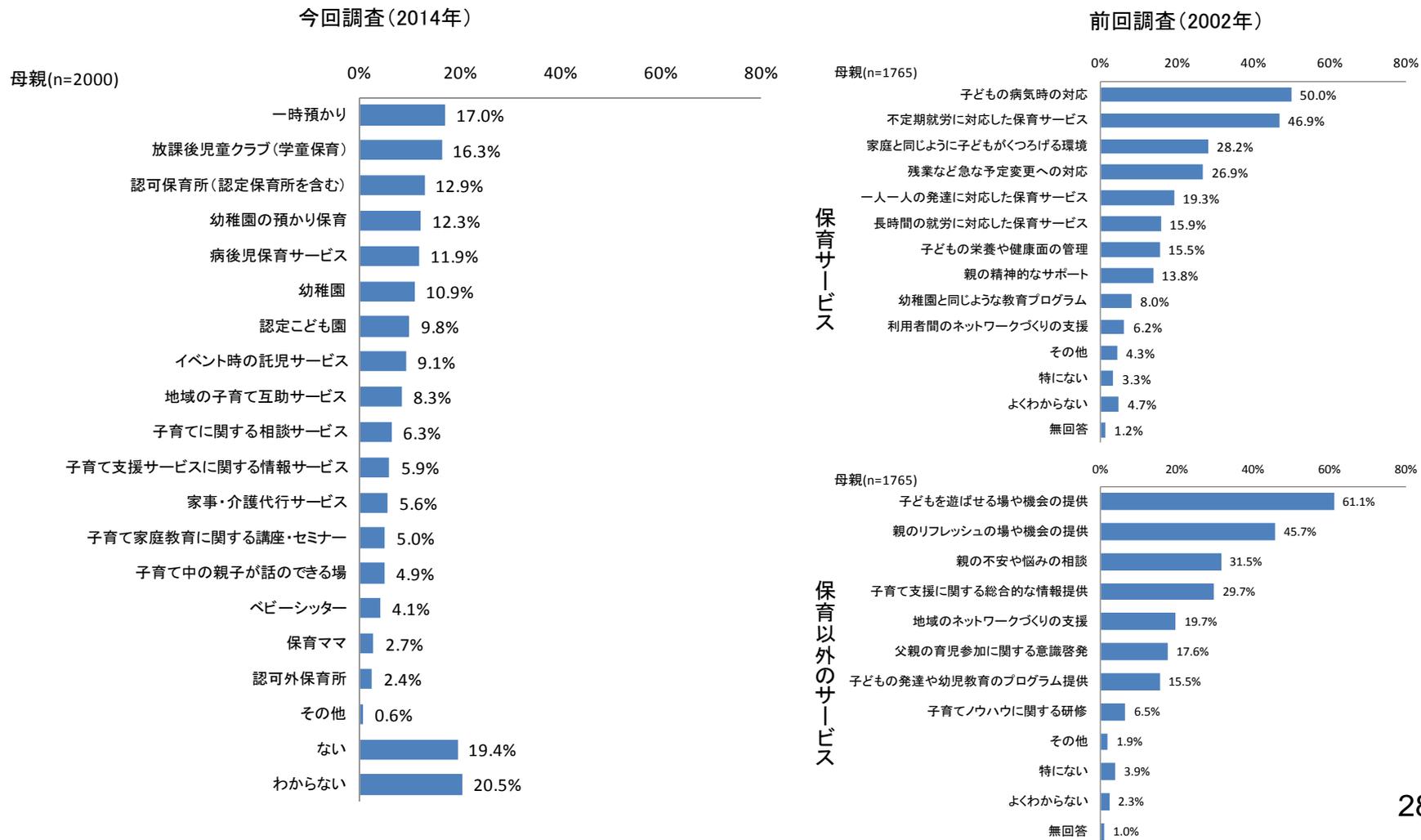
図表20 夫婦の就業形態別利用している・したことがある子育て支援サービス：複数回答

		利用している・したことがあるサービス										
		合計	認可保育所 (認定保育 所を含む)	認可外保育 所	幼稚園	認定こども 園	ベビーシッ ター	保育ママ	一時預かり	幼稚園の預 かり保育	イベント時 の託児サー ビス	放課後児童 クラブ(学 童保育)
全体		4000 100.0	1072 26.8	299 7.5	1418 35.5	141 3.5	49 1.2	49 1.2	456 11.4	472 11.8	148 3.7	243 6.1
夫婦の 就業 形態	正社員×正社員	619 100.0	352 56.9	80 12.9	84 13.6	32 5.2	12 1.9	13 2.1	51 8.2	27 4.4	20 3.2	66 10.7
	正社員×非正社員	853 100.0	332 38.9	102 12.0	294 34.5	34 4.0	14 1.6	16 1.9	116 13.6	125 14.7	32 3.8	83 9.7
	非正社員×非正社員	203 100.0	101 49.8	15 7.4	57 28.1	7 3.4	2 1.0	4 2.0	32 15.8	26 12.8	5 2.5	16 7.9
	正社員×専業主婦 (夫)	2038 100.0	225 11.0	87 4.3	882 43.3	62 3.0	19 0.9	14 0.7	232 11.4	259 12.7	85 4.2	68 3.3
	非正社員×専業主婦 (夫)	197 100.0	24 12.2	8 4.1	82 41.6	5 2.5	1 0.5	1 0.5	18 9.1	30 15.2	6 3.0	5 2.5
	ともに働いていない	13 100.0	0 0.0	1 7.7	7 53.8	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 15.4	0 0.0	0 0.0	0 0.0
		利用している・したことがあるサービス つづき										
		合計	病後児保育 サービス	「つどいの ひろば」 「子育て支 援セン	ファミリー・サ ポート・セン ターなど地域互 助サービス	家事・介護 代行サービ ス	子育て支援 サービスに 関する情報 提供サービ	子育てに関 する相談 サービス	子育て家庭 教育に関す る講座・セ ミナー	その他	ない	わからない
全体		4000 100.0	84 2.1	485 12.1	158 4.0	31 0.8	109 2.7	145 3.6	136 3.4	22 0.6	721 18.0	381 9.5
夫婦の 就業 形態	正社員×正社員	619 100.0	38 6.1	54 8.7	34 5.5	9 1.5	11 1.8	17 2.7	19 3.1	2 0.3	62 10.0	51 8.2
	正社員×非正社員	853 100.0	23 2.7	83 9.7	37 4.3	0 0.0	17 2.0	29 3.4	22 2.6	3 0.4	99 11.6	71 8.3
	非正社員×非正社員	203 100.0	7 3.4	24 11.8	7 3.4	1 0.5	7 3.4	6 3.0	6 3.0	2 1.0	28 13.8	17 8.4
	正社員×専業主婦 (夫)	2038 100.0	15 0.7	290 14.2	69 3.4	19 0.9	68 3.3	84 4.1	80 3.9	13 0.6	466 22.9	210 10.3
	非正社員×専業主婦 (夫)	197 100.0	0 0.0	27 13.7	6 3.0	1 0.5	5 2.5	6 3.0	7 3.6	1 0.5	55 27.9	19 9.6
	ともに働いていない	13 100.0	0 0.0	2 15.4	1 7.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 23.1	2 15.4

(11)利用したい子育て支援サービス

利用したい子育て支援サービスについて最も多いのは「わからない」が20.5%、次いで「ない」(19.4%)、「一時預かり」(17.0%)、「放課後児童クラブ(学童保育)」16.3%であった。

図表21 利用したい子育て支援サービス(母親):複数回答



(12)夫婦の就業形態と子育て支援の利用意向

夫婦の就業形態別のサービスの利用意向(現在利用していないが利用したい)は、下表のとおりである。全体にそれほど高くはないが、「専業主婦(夫)」の家庭で、もっとも利用意向の高いサービスは「一時預かり」である。

図表22 夫婦の就業形態別利用したい子育て支援サービス:複数回答

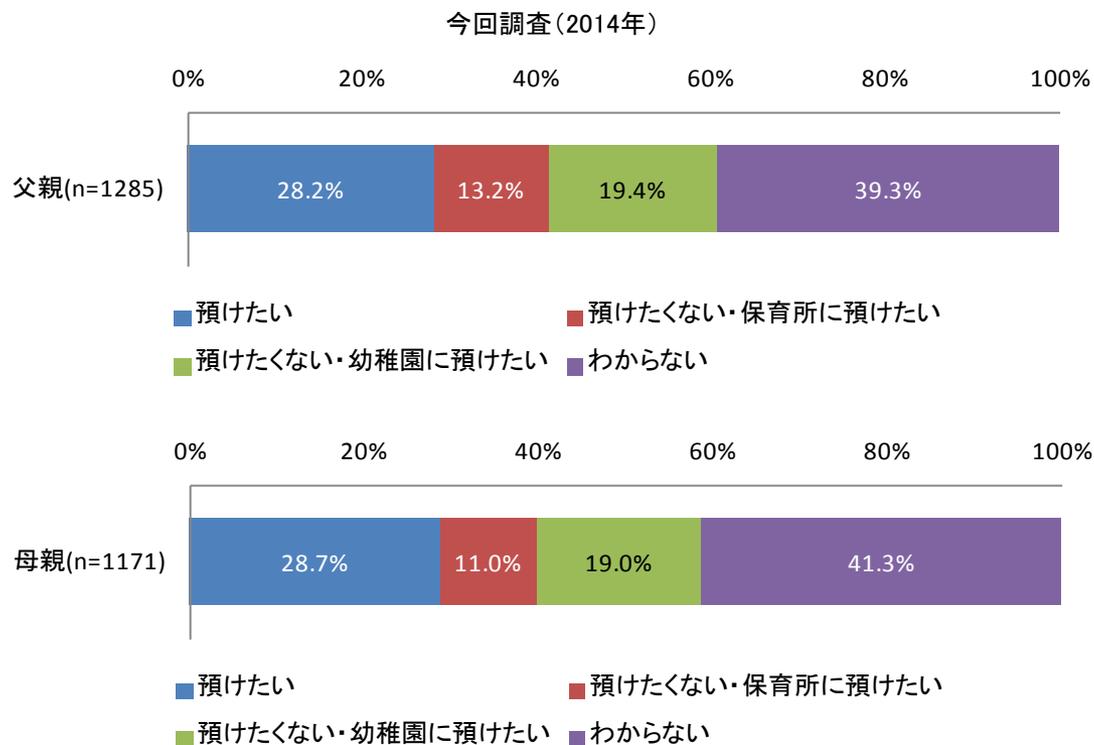
		(利用していないが)利用したいサービス											
		合計	認可保育所 (認定保育 所を含む)	認可外保育 所	幼稚園	認定こども 園	ベビーシッ ター	保育ママ	一時預かり	幼稚園の預 かり保育	イベント時 の託児サー ビス	放課後児童 クラブ(学 童保育)	
全体		4000 100.0	420 10.5	106 2.7	384 9.6	305 7.6	130 3.3	89 2.2	518 13.0	340 8.5	277 6.9	507 12.7	
夫婦の 就業 形態	正社員×正社員	619 100.0	69 11.1	18 2.9	45 7.3	56 9.0	25 4.0	14 2.3	67 10.8	28 4.5	36 5.8	94 15.2	
	正社員×非正社員	853 100.0	73 8.6	15 1.8	48 5.6	63 7.4	24 2.8	16 1.9	84 9.8	41 4.8	49 5.7	121 14.2	
	非正社員×非正社員	203 100.0	12 5.9	4 2.0	10 4.9	9 4.4	15 7.4	5 2.5	24 11.8	12 5.9	12 5.9	34 16.7	
	正社員×専業主婦 (夫)	2038 100.0	225 11.0	60 2.9	250 12.3	154 7.6	52 2.6	43 2.1	288 14.1	233 11.4	159 7.8	229 11.2	
	非正社員×専業主婦 (夫)	197 100.0	32 16.2	4 2.0	24 12.2	14 7.1	7 3.6	4 2.0	39 19.8	17 8.6	17 8.6	18 9.1	
	ともに働いていない	13 100.0	1 7.7	1 7.7	1 7.7	1 7.7	1 7.7	0 0.0	0 0.0	1 7.7	4 30.8	1 7.7	1 7.7

		(利用していないが)利用したいサービス つづき										
		合計	病後児保育 サービス	「つどいの ひろば」 「子育て支 援セン ター」な ど)	ファミリー・サ ポート・セン ターなど地域互 助サービス	家事・介護 代行サービ ス	子育て支援 サービスに 関する情報 提供サービ ス	子育てに関 する相談 サービス	子育て家庭 教育に関す る講座・セ ミナー	その他	ない	わからない
全体		4000 100.0	329 8.2	140 3.5	223 5.6	159 4.0	181 4.5	206 5.2	168 4.2	22 0.6	971 24.3	929 23.2
夫婦の 就業 形態	正社員×正社員	619 100.0	81 13.1	13 2.1	30 4.8	28 4.5	27 4.4	30 4.8	31 5.0	6 1.0	134 21.6	126 20.4
	正社員×非正社員	853 100.0	69 8.1	24 2.8	44 5.2	30 3.5	36 4.2	30 3.5	29 3.4	3 0.4	217 25.4	213 25.0
	非正社員×非正社員	203 100.0	19 9.4	7 3.4	13 6.4	9 4.4	4 2.0	9 4.4	9 4.4	0 0.0	67 33.0	44 21.7
	正社員×専業主婦 (夫)	2038 100.0	132 6.5	75 3.7	116 5.7	76 3.7	97 4.8	119 5.8	88 4.3	10 0.5	474 23.3	481 23.6
	非正社員×専業主婦 (夫)	197 100.0	15 7.6	15 7.6	15 7.6	9 4.6	11 5.6	12 6.1	8 4.1	3 1.5	61 31.0	40 20.3
	ともに働いていない	13 100.0	1 7.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	4 30.8	4 30.8

(13) 認定こども園が増えた際の認定こども園の利用意向

認定こども園が増えた際の認定こども園の利用意向について父親、母親ともに最も多いのは「わからない」がそれぞれ39.3%、41.3%であり、次いで「預けたい」(28.2%、28.7%)、「預けたくない・幼稚園に預けたい」(19.4%、19.0%)、「預けたくない・保育所に預けたい」(13.2%、11.0%)の順であった。また、制度や保育・教育内容について知られておらず判断が難しい状況にあるとみられる。

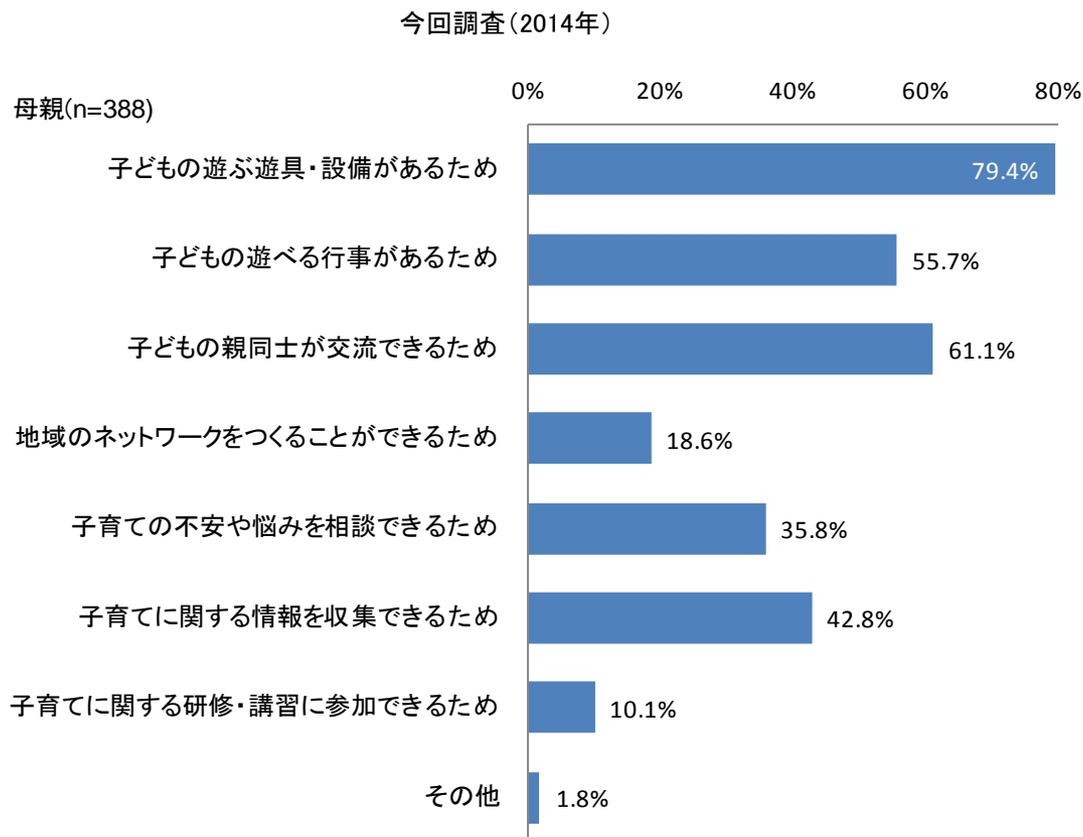
図表23 認定こども園が増えた際の認定こども園の利用意向：単数回答



(14)子育て中の親と子とが気軽に集まって話ができる場(「つどいのひろば」「子育て支援センター」など)を利用する理由

子育て中の親と子とが気軽に集まって話ができる場(「つどいのひろば」「子育て支援センター」など)を利用する理由として最も多いのは、「子どもの遊べる遊具・設備があるため」が79.4%であり、次いで「子どもの親同士が交流できるため」が61.1%であった。

図表24 子育て中の親と子とが気軽に集まって話ができる場を利用する理由(母親):複数回答



3. 子育てにおける父母の役割分担

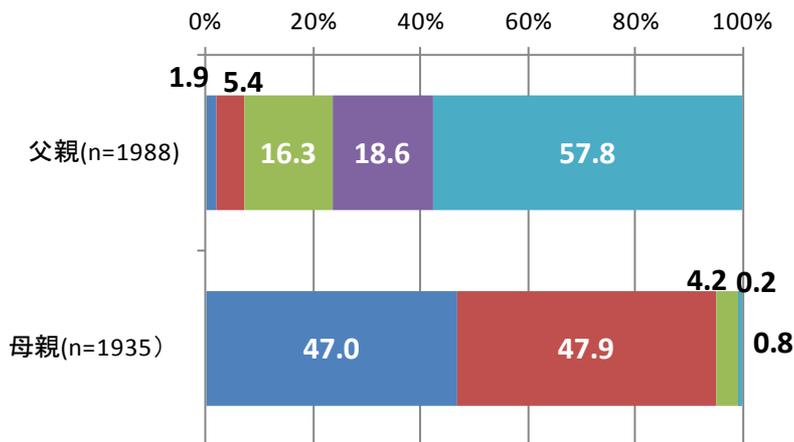
(1) 家事、子育ての役割分担

① 家事の役割分担

家事の役割分担について、父親で最も多いのは「配偶者・パートナーが主で自分が一部担っている」が57.8%、次いで「配偶者・パートナーがすべて担っている」が18.6%である。一方、母親で最も多いのは「自分が主で、配偶者・パートナーが一部担っている」が47.9%、次いで、「自分がすべて担っている」が47.0%である。

図表25 家事の役割分担：単数回答

今回調査(2014年)

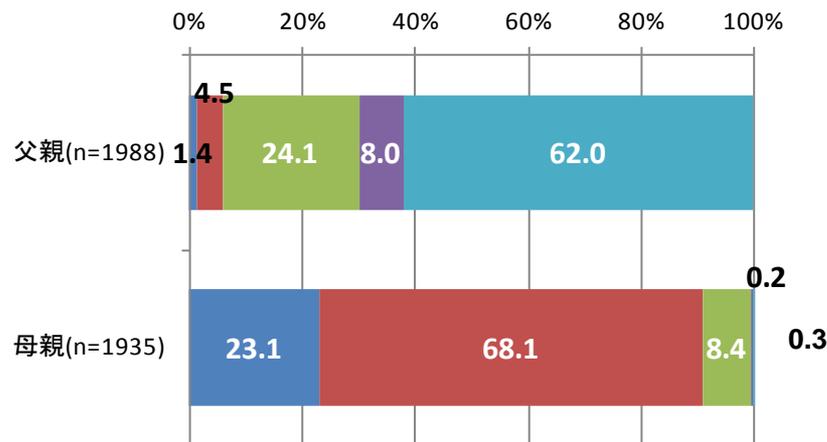


- 自分がすべて担っている
- 自分が主で配偶者・パートナーが一部担っている
- 自分と配偶者・パートナーが同程度に担っている
- 配偶者・パートナーがすべて担っている
- 配偶者・パートナーが主で自分が一部担っている

② 子育ての役割分担

子育ての役割分担について、父親で最も多いのは「配偶者・パートナーが主で自分が一部担っている」が62.0%、次いで「自分と配偶者・パートナーが同程度に担っている」が24.1%である。一方、母親で最も多いのは「自分が主で、配偶者・パートナーが一部担っている」が68.1%、次いで、「自分がすべて担っている」が23.1%である。家事よりも子育ての方が夫婦で担われている。

図表26 子育ての役割分担：単数回答



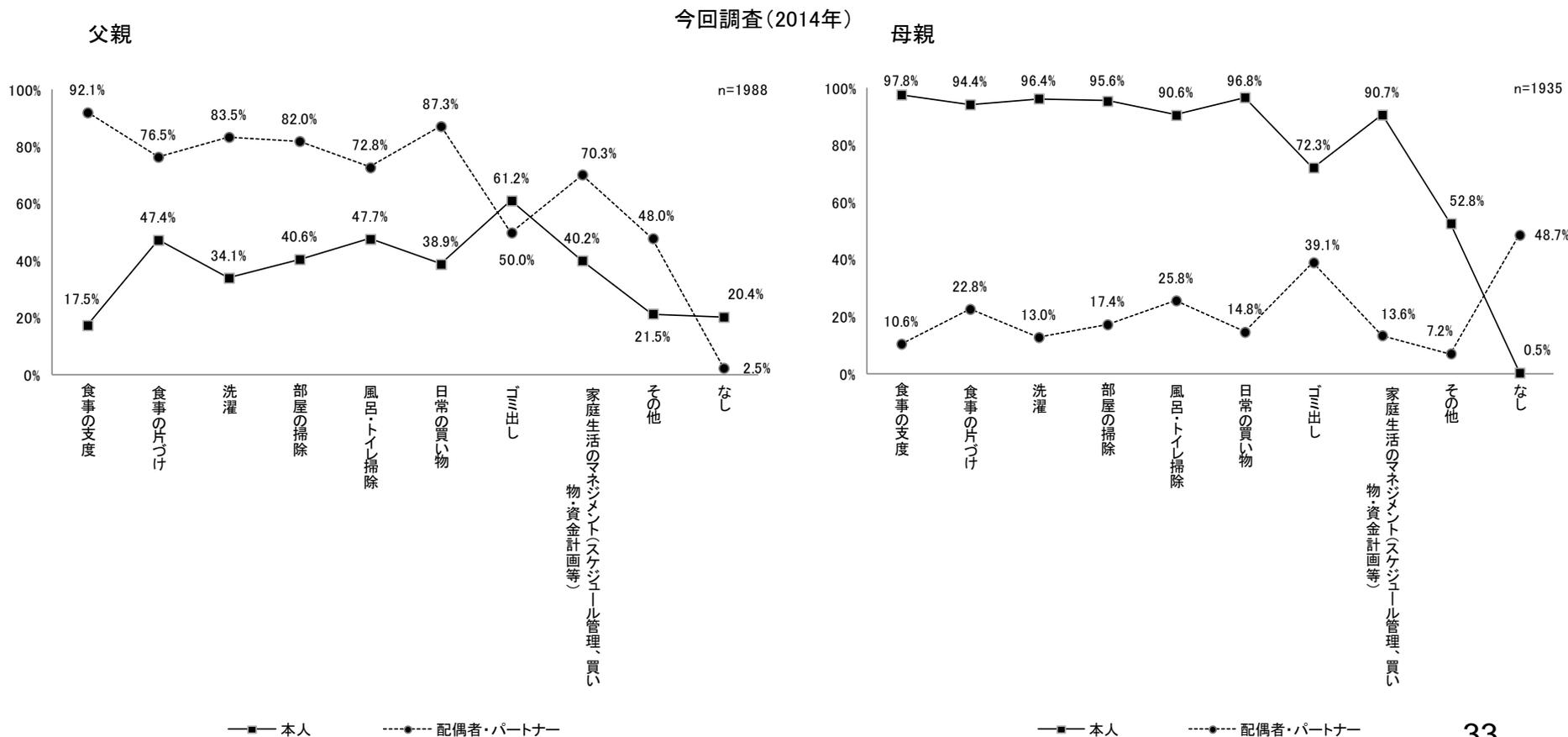
- 自分がすべて担っている
- 自分が主で配偶者・パートナーが一部担っている
- 自分と配偶者・パートナーが同程度に担っている
- 配偶者・パートナーがすべて担っている
- 配偶者・パートナーが主で自分が一部担っている

(2)担っている家事、子育て

①担っている家事

父親自身が担っていると考え、また、母親が配偶者・パートナー(父親)が担っていると考えている家事で最も多いものは、ともに「ゴミ出し」(61.2%、39.1%)であった。一方、母親自身が担っていると考え、また、父親が配偶者・パートナー(母親)が担っていると考えている家事で最も多いものは、ともに「食事の支度」(97.8%、92.1%)であった。

図表27 担っている家事：複数回答

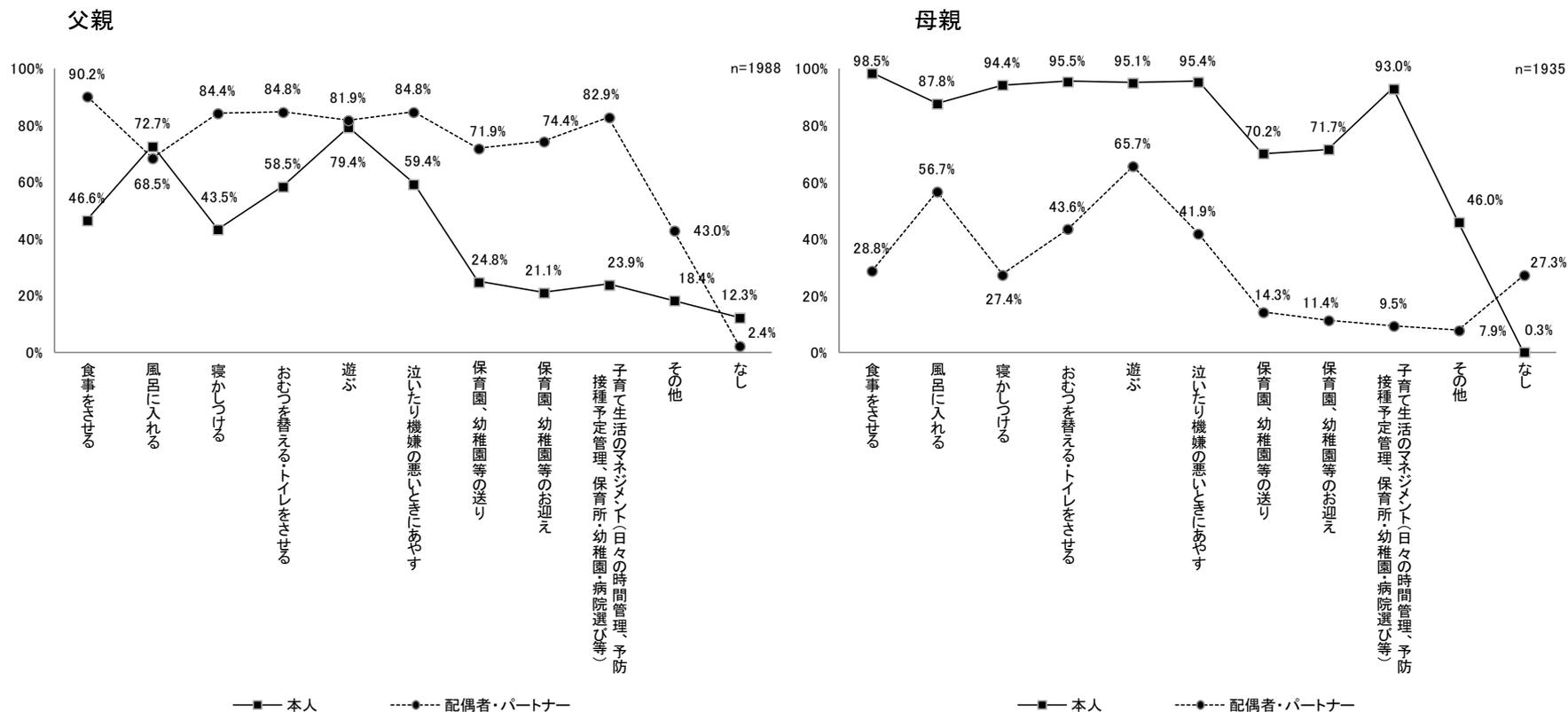


②担っている子育て

父親自身が担っていると考え、また、母親が配偶者・パートナー(父親)が担っていると考えている子育てで最も多いものは、ともに「遊ぶ」(79.4%、65.7%)であった。一方、母親自身が担っていると考え、また、父親が配偶者・パートナー(母親)が担っていると考えている子育てで最も多いものは、ともに「食事をさせる」(98.5%、90.2%)であった。

図表28 担っている子育て：複数回答

今回調査(2014年)



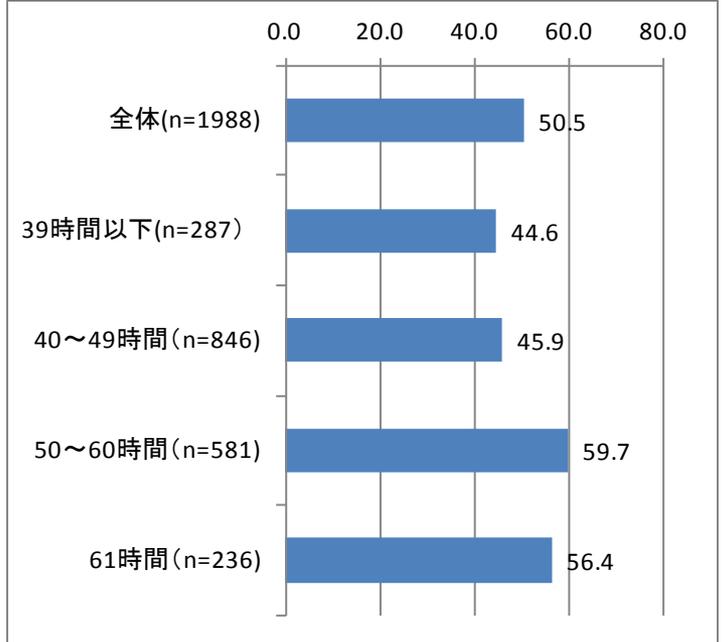
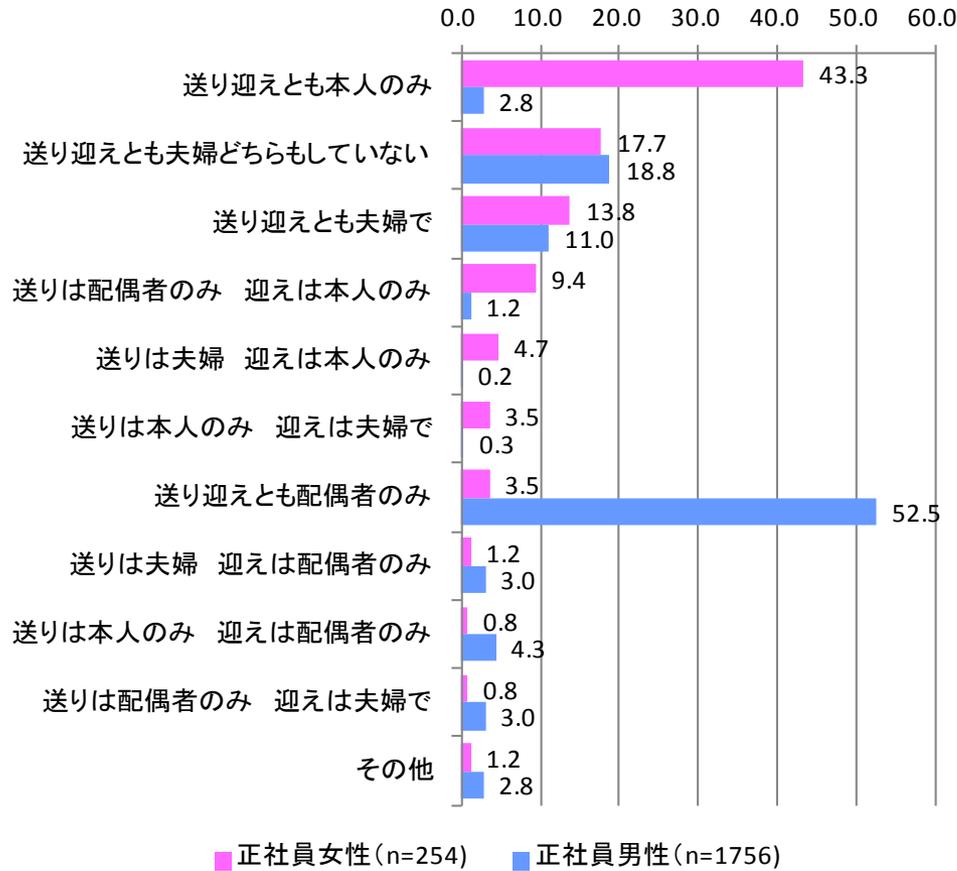
③ 保育園等の送り迎えの分担

保育園・幼稚園等の送り迎えの実態を把握するため、正社員男性(父親)と正社員女性(母親)に絞って、夫婦とそれ以外の人との役割の組み合わせを集計した。母親が送り迎えとも本人のみの割合は43.3%であり、父親が配偶者のみに送り迎えを任せている割合は52.5%である。父親の週あたり労働時間が50時間以上では、配偶者に任せる割合が高くなっている。送り迎えとも父母以外という回答も母親・父親ともに18%前後ある。

今回調査(2014年)

図表29 正社員男性・女性の保育園等の送り迎えの分担

図表30 「送り迎えとも配偶者のみ」と回答した正社員男性の週あたり労働時間



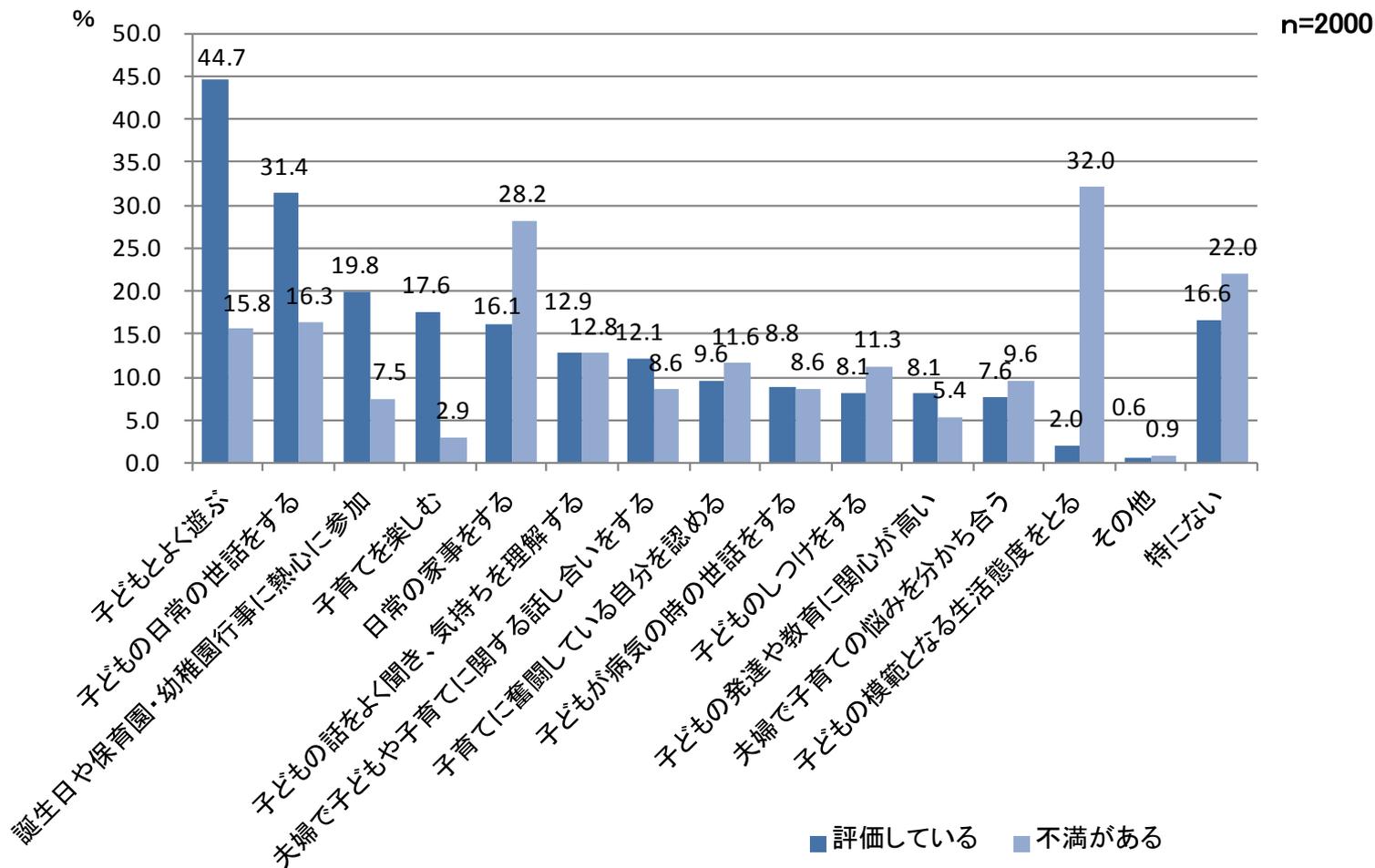
注: 配偶者の就業形態は正社員に限らない。専業主婦・夫も含む。

(3)父親の家事・子育てについての母親の評価点・不満点

父親の家事・子育てへの関わりについて、母親が評価している点としては、「子どもとよく遊ぶ」、「子どもの日常の世話をする」が多くあげられている。一方、不満な点としては、「子どもの模範となる生活態度をとる」、「日常の家事をする」が多くあげられている。ただし、不満な点は「特にない」という回答も2割を超える。

今回調査(2014年)

図表31 父親の家事・子育てに対する母親の評価点・不満点:複数回答

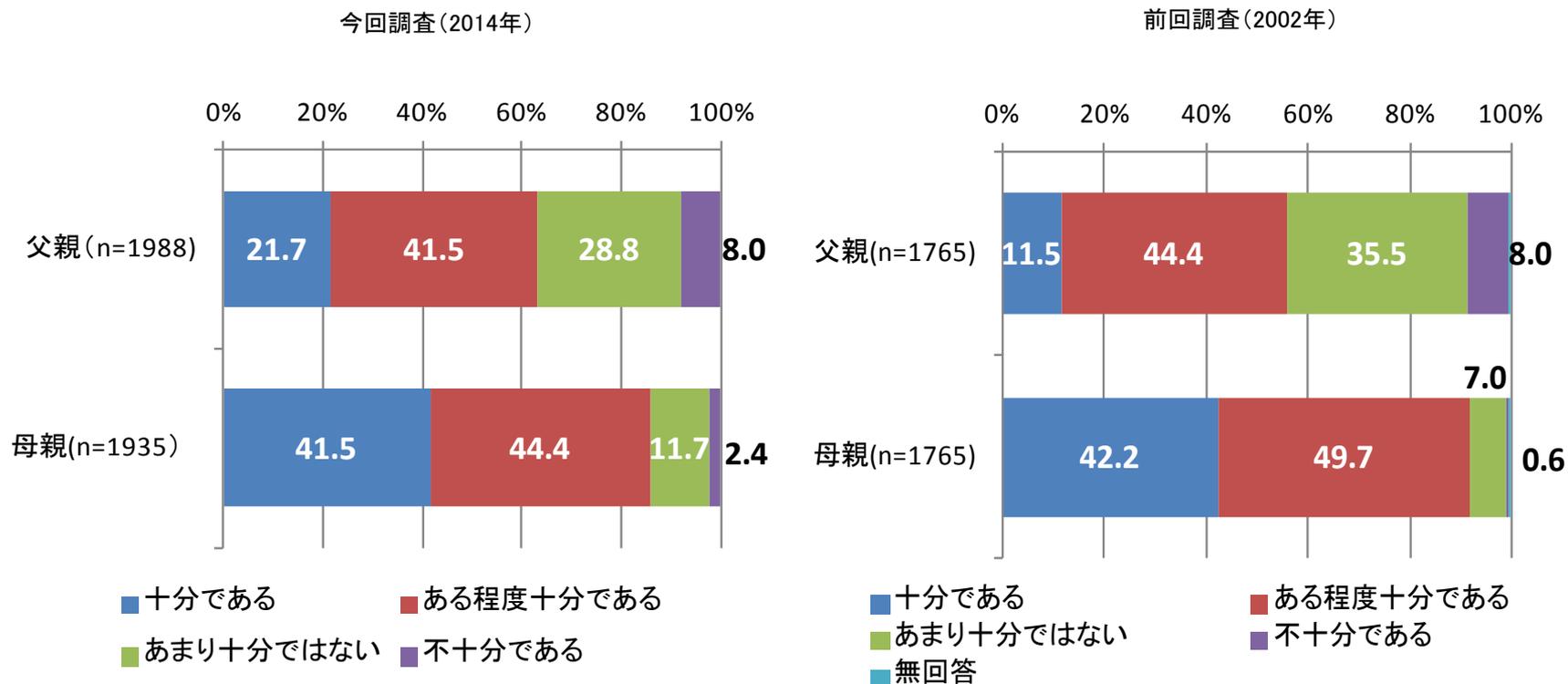


(4)子育てへの関わり度合い

自身の子育てへの関わり度合いについて、父親でもっとも多いのは「ある程度は十分である」で41.5%であり、「ある程度は十分である」と「十分である」の合計は63.2%である。一方、母親でもっとも多いのは「ある程度は十分である」で44.4%であり、「ある程度は十分である」と「十分である」の合計は85.9%である。

前回調査では、自身の関わりについて「十分である」と「ある程度は十分である」を合計した割合は父親で55.9%、母親で91.9%であった。

図表32 子育てへの関わり度合い:単数回答



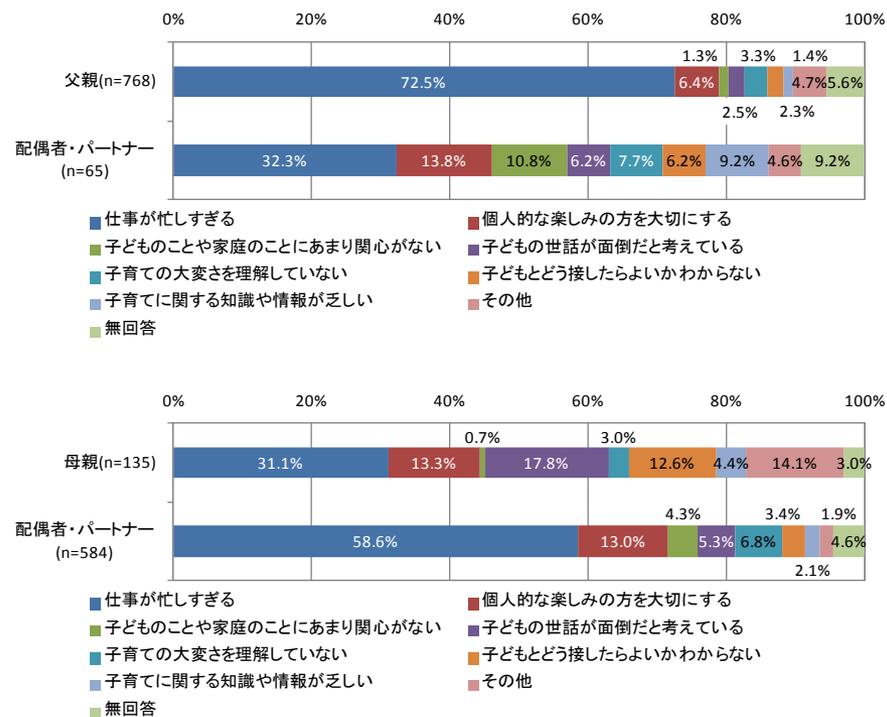
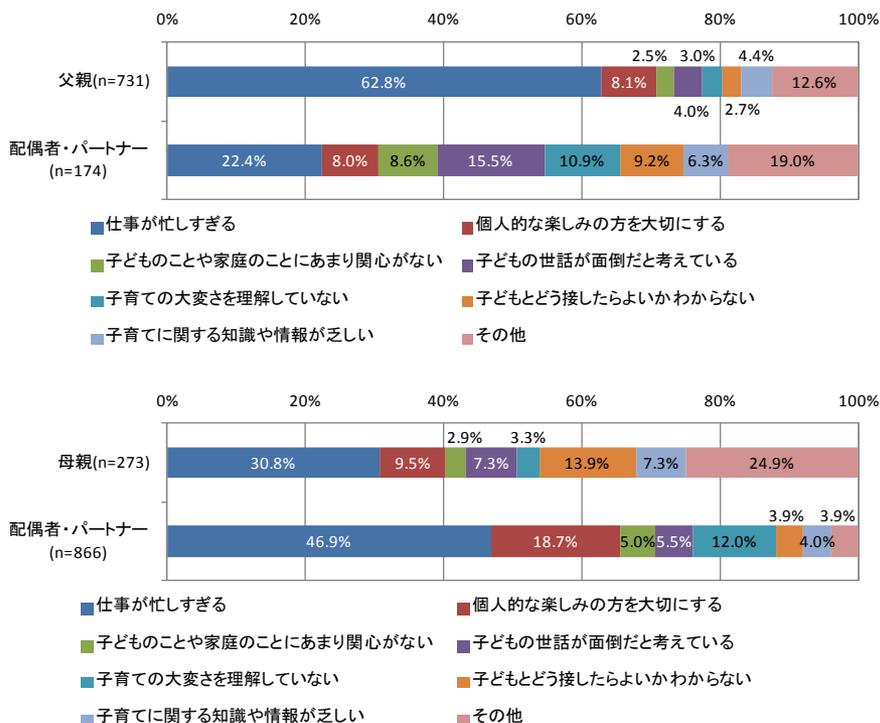
(5)子育てへの関わりが十分でない原因

自身の子育てへの関わりが十分でない一番の原因について、父親で最も多いのは「仕事が忙しすぎる」で、62.8%、次いで、「趣味や自分の個人的な楽しみの方を大切にするため」で、8.1%である。一方、母親で最も多いのは「仕事が忙しすぎる」で、30.8%、次いで、「子どもとどう接したらよいかわからないため」で13.9%である。前回調査でも、父親、母親ともに、「仕事が忙しすぎる」と回答した割合が最も高く、それぞれ72.5%、31.1%であった。

図表33 子育てへの関わりが十分でない原因：単数回答

今回調査(2014年)

前回調査(2002年)

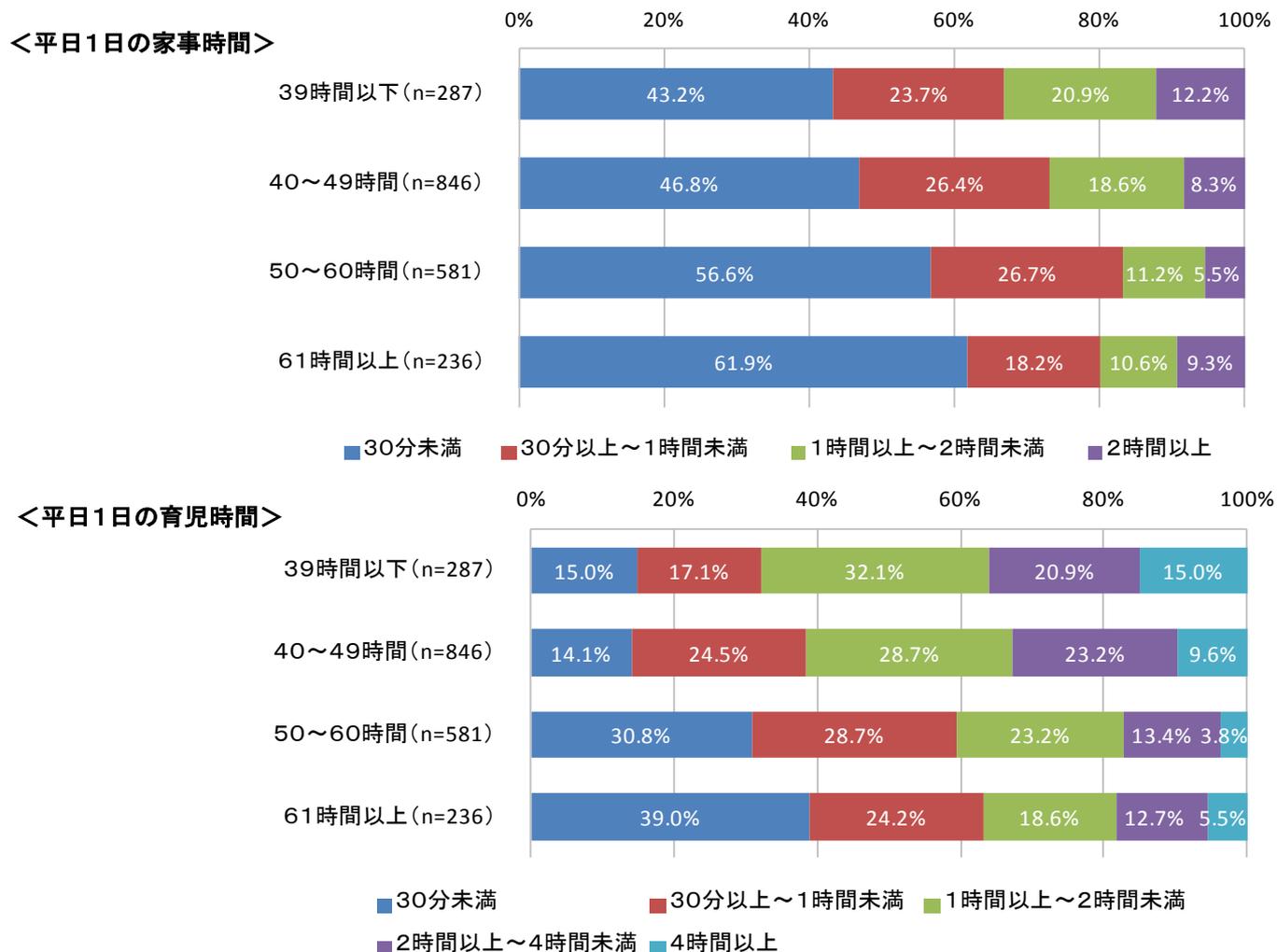


(6)父親の労働時間と家事・育児時間

父親について、週当たり労働時間別に平日1日あたりの家事・育児時間をみると、家事時間は、労働時間が長いほど、1日「30分未満」の割合が高くなっている。育児時間は、家事時間よりは全体に長い傾向がみられ、労働時間が長いほど1時間未満までの割合が高くなっている。

今回調査(2014年)

図表34 父親の労働時間別家事・育児時間:単数回答



4. 仕事と子育ての両立の状況

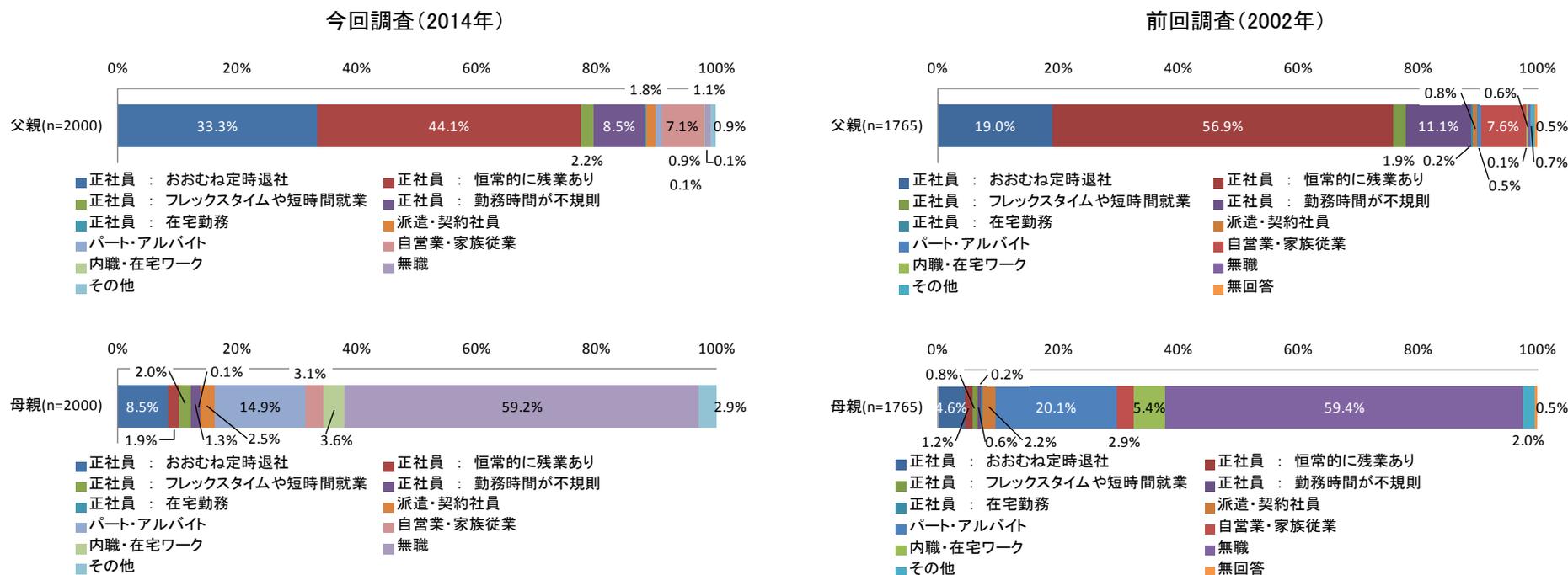
(1) 就業形態

① 回答者

父親の就業形態で最も多いのは、「正社員：恒常的に残業あり」で44.1%、次いで「正社員：おむね定時退社」で33.3%である。一方、母親の就業形態で最も多いものは「無職」で59.2%、次いで「パート・アルバイト」で14.9%である。

前回調査でも、父親は、「正社員：恒常的に残業あり」がもっとも多く、今回調査よりも高い割合で56.9%と過半数を占めた。母親は、前回は「無職」がもっとも多く59.4%で今回とほぼ同じ割合であった。

図表35 就業形態：単数回答

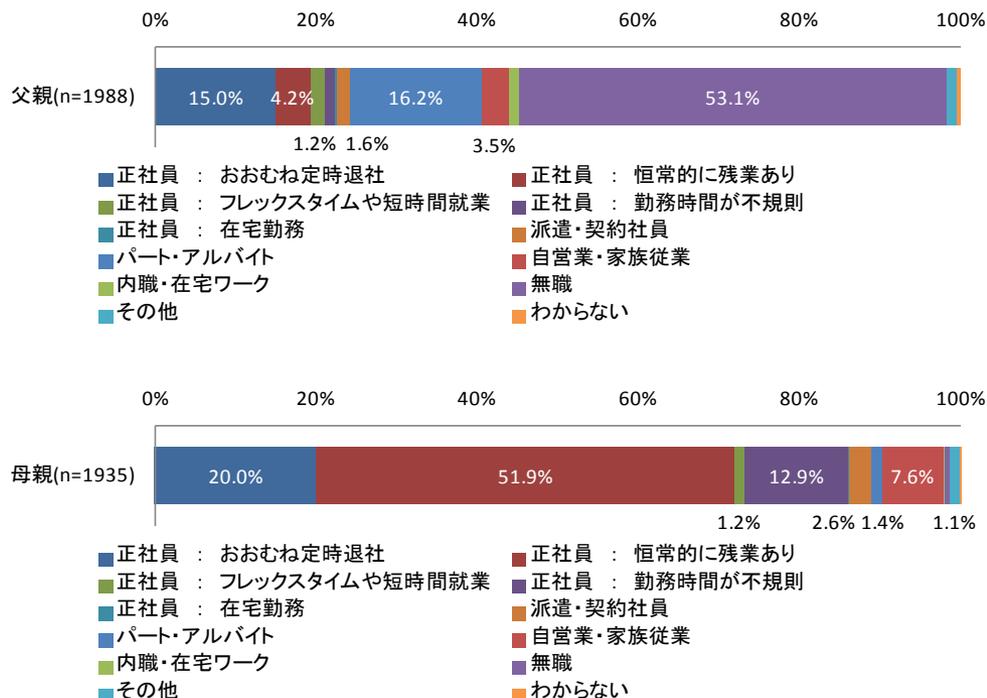


②回答者の配偶者・パートナー

父親の配偶者・パートナーの就業形態は「無職」が最も多く、53.1%であり、次いで「パート・アルバイト」が16.2%である。母親の配偶者・パートナーの就業形態は「正社員：恒常的に残業あり」が最も多く、51.9%であり、次いで「正社員：おおむね定時退社」が20.0%である。

図表36 配偶者・パートナーの就業形態：単数回答

今回調査(2014年)



	合計	正社員					派遣・契約社員	パート・アルバイト	自営業・家族従業	内職・在宅ワーク	無職	その他	わからない
		おおむね定時退社	恒常的に残業あり	フレックスタイムや短時間就業	勤務時間が不規則	在宅勤務							
父親	1988	299	83	40	23	5	31	323	69	24	1056	25	10
	100.0%	15.0%	4.2%	2.0%	1.2%	0.3%	1.6%	16.2%	3.5%	1.2%	53.1%	1.3%	0.5%
母親	1935	387	1005	24	249	4	51	27	148	3	13	21	3
	100.0%	20.0%	51.9%	1.2%	12.9%	0.2%	2.6%	1.4%	7.6%	0.2%	0.7%	1.1%	0.2%

(2)通常働いている日に帰宅する時間

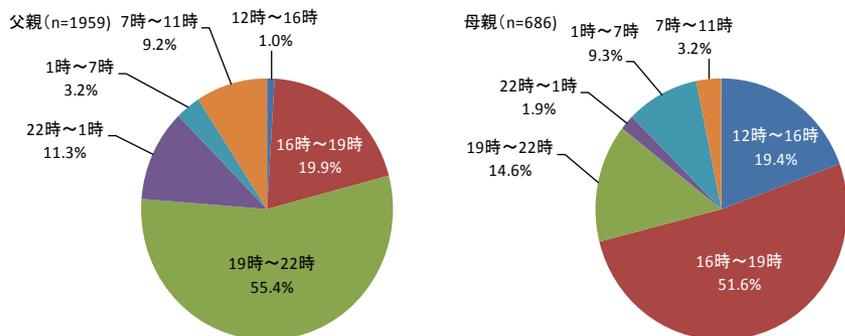
①回答者

父親の通常働いている日の平均帰宅時間は18.1時、母親の平均帰宅時間は15.6時であった。回答分布では、父親が通常働いている日に帰宅する時間で最も多いのは、「19時以降21時未満」で55.4%、次いで「16時以降19時未満」で19.9%、一方、母親で最も多いものは「16時以降19時未満」で51.6%、次いで「12時以降16時未満」で19.4%であった。

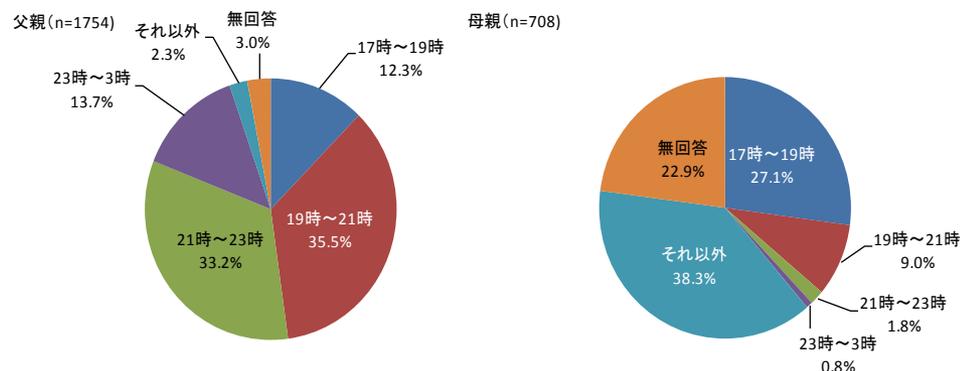
前回調査では、父親の平均帰宅時間は20.0時、母親の平均帰宅時間は16.1時であった。回答分布では、前回調査では「無回答」の割合が一定あるため、割合の比較は困難だが、父親はで最も多かった回答は「19時以降21時未満」、次に多いのが「21時以降23時未満」であり、母親では「それ以外(3時～17時)」が最も多く、次いで「17時以降19時未満」が多かった。

図表37 通常働いている日に帰宅する時間

今回調査(2014年)



前回調査(2002年)



②回答者の配偶者・パートナー

配偶者・パートナーについて、通常働いている日に帰宅する時間をみると、父親の配偶者・パートナーでもっとも多いのは、「16時以降19時未満」で52.1%、次いで「19時以降22時未満」で18.0%、一方、母親の配偶者・パートナーでもっとも多いのは「19時以降22時未満」で49.1%、次いで「22時以降1時未満」で20.6%である。

本人と配偶者・パートナーの帰宅時間のうち最も多い組合せは、父親及び配偶者・パートナーで「父親の19時以降22時未満と配偶者・パートナーの16時以降19時未満」で55.4%であった。

母親と配偶者・パートナーの帰宅時間のうちもっとも多い組合せは、「母親の16時以降19時未満×配偶者・パートナーの19時以降22時未満」で55.8%であった。

図表38 通常働いている日に帰宅する時間

今回調査(2014年)

	合計	配偶者・パートナー					
		12時～15時	16時～18時	19時～21時	22時～24時	1時～6時	7時～11時
全体	873 100.0%	146 16.7%	455 52.1%	157 18.0%	15 1.7%	76 8.7%	24 2.7%
父親	12時～15時	10 100.0%	3 30.0%	5 50.0%	1 10.0%	1 10.0%	0 0.0%
	16時～18時	205 100.0%	30 14.6%	136 66.3%	29 14.1%	1 0.5%	8 3.9%
	19時～21時	439 100.0%	85 19.4%	243 55.4%	89 20.3%	5 1.1%	14 3.2%
	22時～24時	83 100.0%	16 19.3%	39 47.0%	16 19.3%	6 7.2%	2 2.4%
	1時～6時	33 100.0%	5 15.2%	7 21.2%	0 0.0%	1 3.0%	19 57.6%
	7時～11時	84 100.0%	7 8.3%	22 26.2%	10 11.9%	0 0.0%	31 36.9%
							1 16.7%

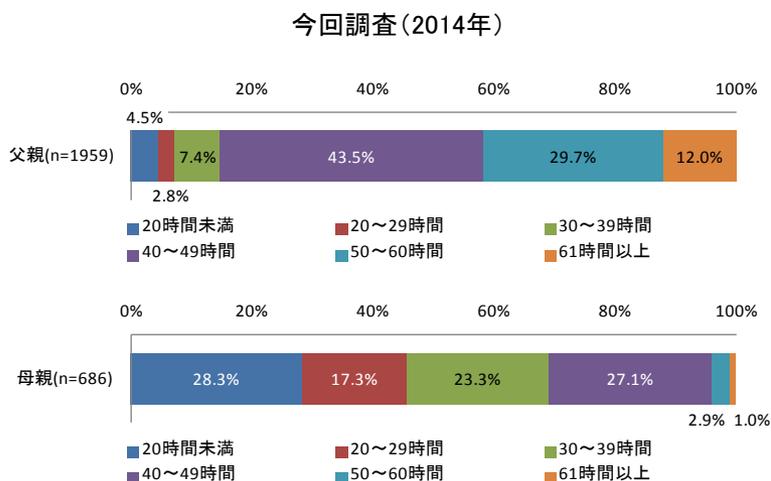
	合計	配偶者・パートナー					
		12時～15時	16時～18時	19時～21時	22時～24時	1時～6時	7時～11時
全体	1895 100.0%	28 1.5%	264 13.9%	930 49.1%	391 20.6%	92 4.9%	190 10.0%
母親	12時～15時	125 100.0%	10 8.0%	14 11.2%	73 58.4%	21 16.8%	2 1.6%
	16時～18時	321 100.0%	2 0.6%	77 24.0%	179 55.8%	51 15.9%	8 2.5%
	19時～21時	89 100.0%	0 0.0%	5 5.6%	62 69.7%	19 21.3%	1 1.1%
	22時～24時	10 100.0%	1 10.0%	1 10.0%	3 30.0%	4 40.0%	1 10.0%
	1時～6時	58 100.0%	1 1.7%	2 3.4%	12 20.7%	10 17.2%	15 25.9%
	7時～11時	19 100.0%	0 0.0%	1 5.3%	5 26.3%	2 10.5%	3 15.8%
							8 42.1%

(3) 週当たりの平均労働時間

① 回答者

週当たりの平均労働時間で父親は「40～49時間」と答えた割合が最も高く、母親の週当たりの平均労働時間で最も多いものは「20時間未満」で28.3%である。

図表39 週当たりの平均労働時間：単数回答



② 回答者別の配偶者・パートナー

配偶者・パートナーの週当たりの平均労働時間で父親は「40～49時間」と答えた割合が最も高く、32.0%、一方、母親の配偶者・パートナーの週当たりの平均労働時間でもっとも多いものは「40～49時間未満」と「50～60時間未満」で、ともに33.6%である。本人と配偶者・パートナーの労働時間の組み合わせは、下表のとおりである。

図表40 回答者の週当たりの平均労働時間：単数回答

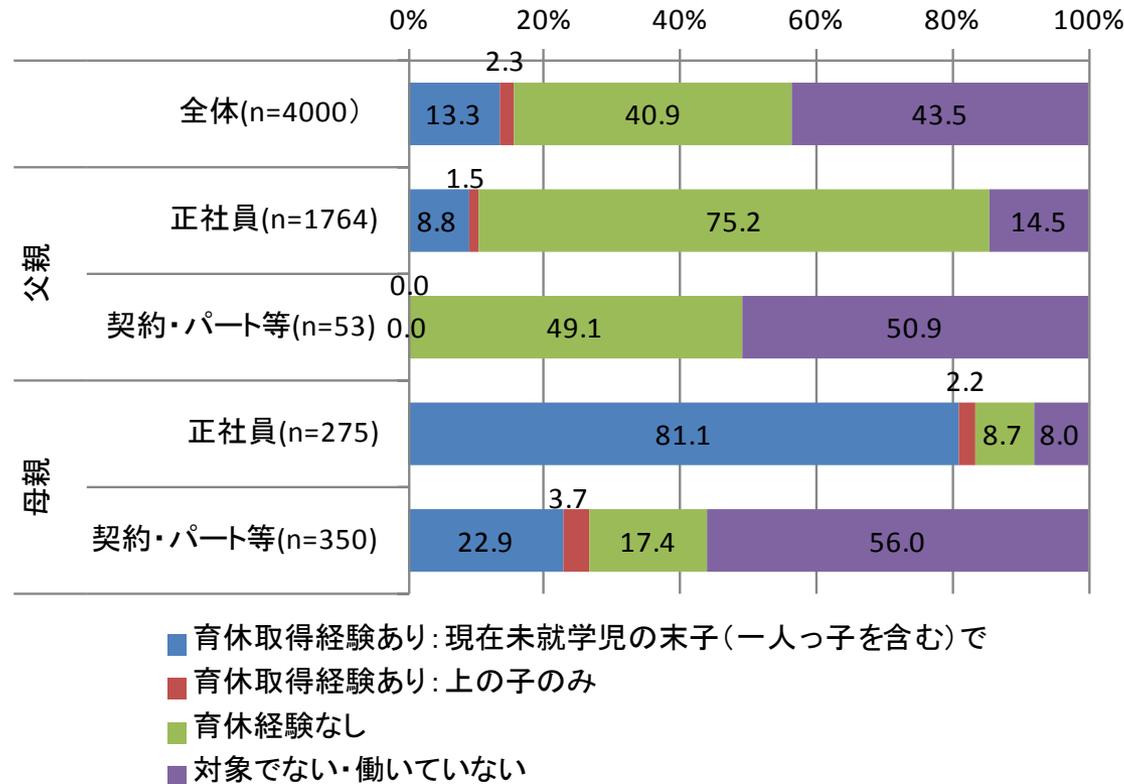
	合計	配偶者・パートナー					
		20時間以下	21～29時間	30～39時間	40～49時間	50～60時間	61時間以上
全体	873	220	117	184	279	58	15
	100.0%	25.2%	13.4%	21.1%	32.0%	6.6%	1.7%
父親	20時間以下	47	30	5	3	6	0
		100.0%	63.8%	10.6%	6.4%	12.8%	0.0%
	21～29時間	25	10	5	3	5	2
		100.0%	40.0%	20.0%	12.0%	20.0%	8.0%
	30～39時間	70	18	11	31	9	1
		100.0%	25.7%	15.7%	44.3%	12.9%	1.4%
	40～49時間	374	71	53	83	149	17
	100.0%	19.0%	14.2%	22.2%	39.8%	4.5%	
50～60時間	237	61	34	49	74	19	
	100.0%	25.7%	14.3%	20.7%	31.2%	8.0%	
60時間以上	101	29	9	12	30	11	
	100.0%	28.7%	8.9%	11.9%	29.7%	10.9%	

	合計	配偶者・パートナー					
		20時間以下	21～29時間	30～39時間	40～49時間	50～60時間	61時間以上
全体	1895	61	26	66	636	636	470
	100.0%	3.2%	1.4%	3.5%	33.6%	33.6%	24.8%
母親	20時間以下	182	15	2	8	64	47
		100.0%	8.2%	1.1%	4.4%	35.2%	25.8%
	21～29時間	106	5	3	7	36	37
		100.0%	4.7%	2.8%	6.6%	34.0%	34.9%
	30～39時間	140	1	0	11	55	46
		100.0%	0.7%	0.0%	7.9%	39.3%	32.9%
	40～49時間	172	2	2	2	74	68
	100.0%	1.2%	1.2%	1.2%	43.0%	39.5%	
50～60時間	18	1	0	0	3	10	
	100.0%	5.6%	0.0%	0.0%	16.7%	55.6%	
60時間以上	4	0	0	0	0	1	
	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	

(4) 育児休業取得の状況

現在未就学児である末子(一人っ子の場合は長子)で育児休業を取得した割合は、父親の場合、正社員で8.8%、契約・パート等いわゆる非正社員(自営・内職を含まない)で8.8%である。末子で取得した割合には、上の子どもでも取得したことがある人も含まれる。育休取得と答えているが、育児・介護休業法に基づく育休ではないもの(会社独自の制度あるいは有給休暇等)も含めて答えている可能性があると考えられる。母親では、正社員で81.1%、契約・パート等で22.9%である。父母ともに、契約・パート等では「対象でない・働いていない」が5割強を占めるが、中には、自身が対象であるもののそのことを知らない人が含まれる可能性がある。

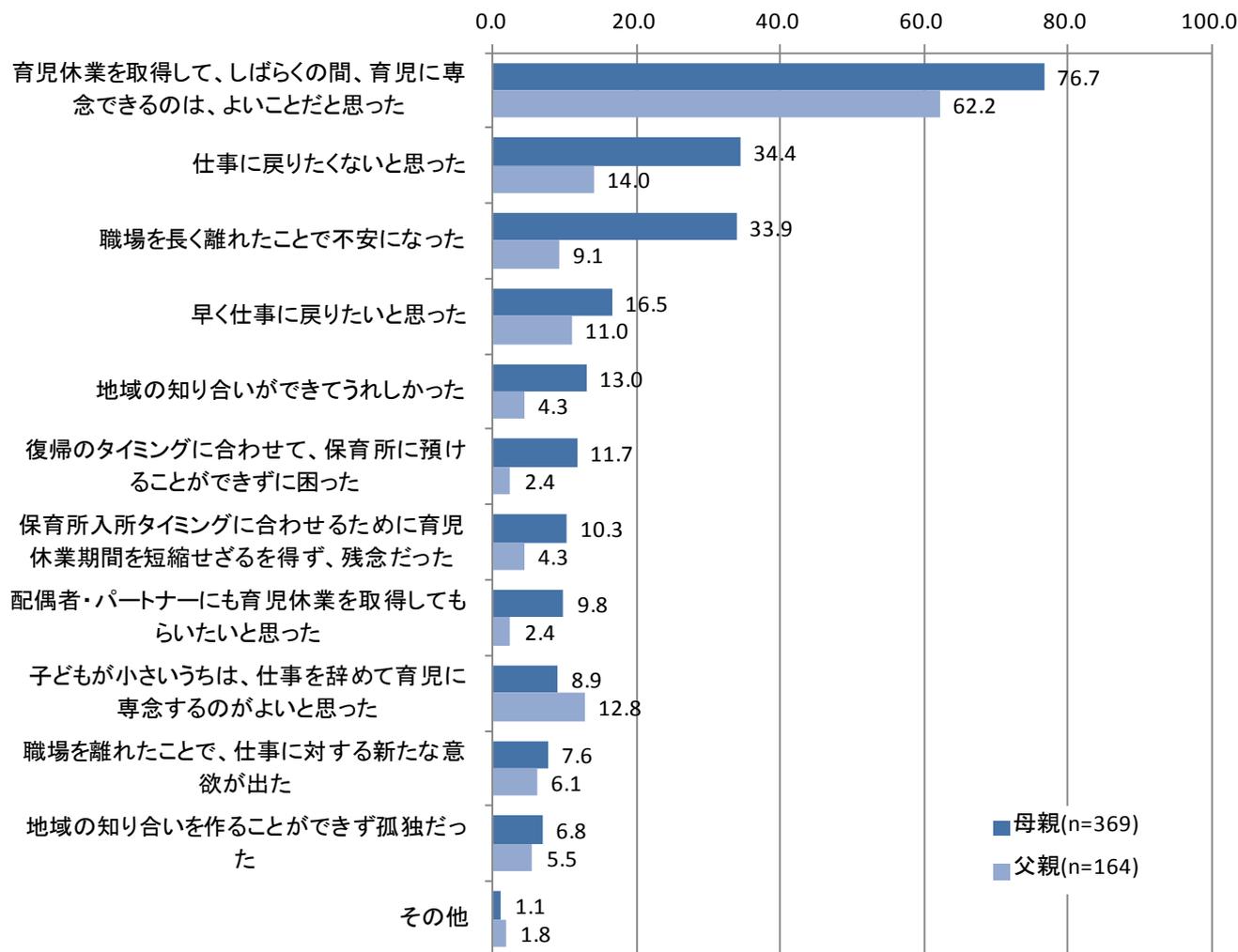
図表41 就業形態別育児休業取得状況：単数回答



(4) 育児休業を取得した感想

育休を取得した人の感想としては、父母ともに「しばらくの間、育児に専念できるのはよいことだ」がもっとも多いが、長期間休業をする母親では「仕事に戻りたくないと思った」、「職場を長く離れたことで不安になった」がいずれも3割を超える。復帰のタイミングで保育所に預けられなかった、保育所のタイミングに合わせるため休業期間を短縮した母親がいずれも1割強いる。

図表42 育児休業を取得した感想：複数回答

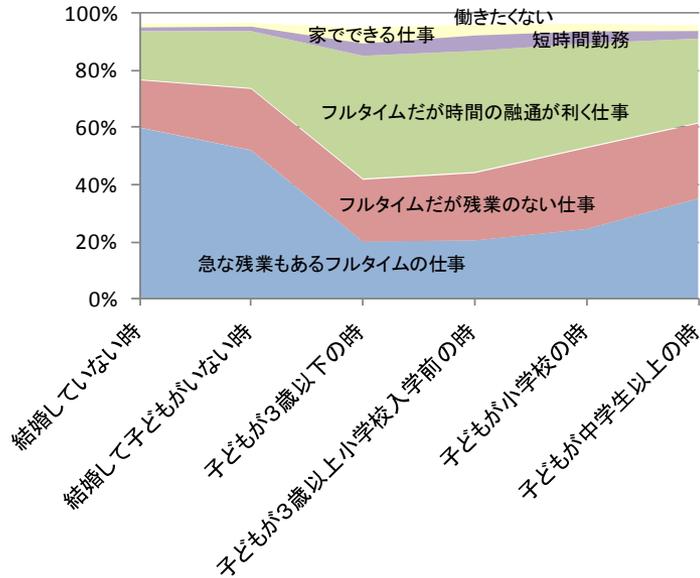


(4)理想の働き方

結婚していない時の理想の働き方について最も多いのは、父親、母親ともに「急な残業もあるフルタイムの仕事」で、それぞれ、60.3%、66.4%だが、父親、母親ともに、「結婚して子どもがいない時」、「子どもが3歳以下の時」になると、「急な残業もあるフルタイムの仕事」は減少し、父親では「フルタイムだが時間の融通が利く仕事」が増加する。母親では、一次的に「働きたくない」の割合が増えるが、子の年齢とともに減少し、「短時間勤務」、「フルタイムだが時間の融通が利く仕事」などの割合が高くなっている。

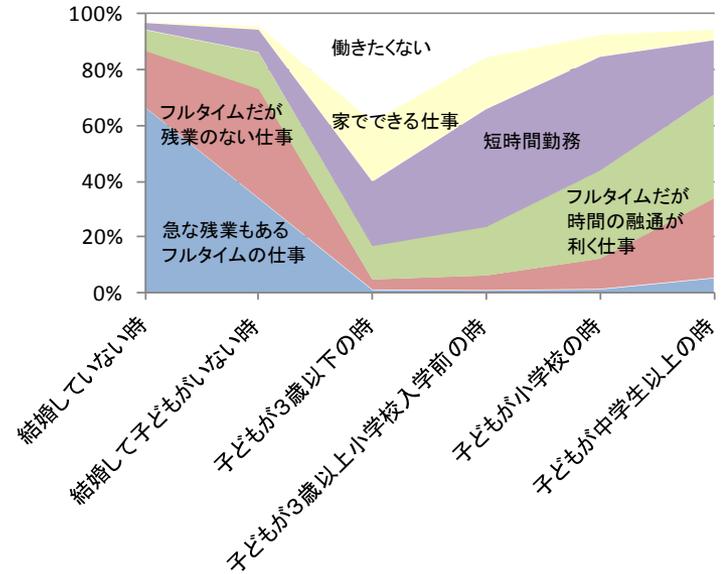
図表43 理想の働き方:単数回答

父親 (n=2000)



母親 (n=2000)

今回調査 (2014年)



	結婚して いない時	結婚して子 どもがいない 時	子どもが3歳 以下の時	子どもが4歳 以上小学校 入学前の時	子どもが小 学生の時	子どもが中 学生以上の 時	
父親	働きたくない	73 3.6%	64 3.2%	99 4.9%	74 3.7%	80 4.0%	
	家でできる仕事	25 1.3%	28 1.4%	109 5.4%	78 3.9%	55 2.7%	
	短時間勤務	30 1.5%	35 1.8%	95 4.7%	114 5.7%	89 4.5%	
	フルタイムだが時間の融通が利く仕事	337 16.9%	399 19.9%	860 43.0%	848 42.4%	727 36.3%	588 29.4%
	フルタイムだが残業のない仕事	330 16.5%	428 21.4%	432 21.6%	471 23.5%	566 28.3%	524 26.2%
	急な残業もあるフルタイムの仕事	1205 60.3%	1046 52.3%	405 20.3%	415 20.7%	493 24.7%	708 35.4%

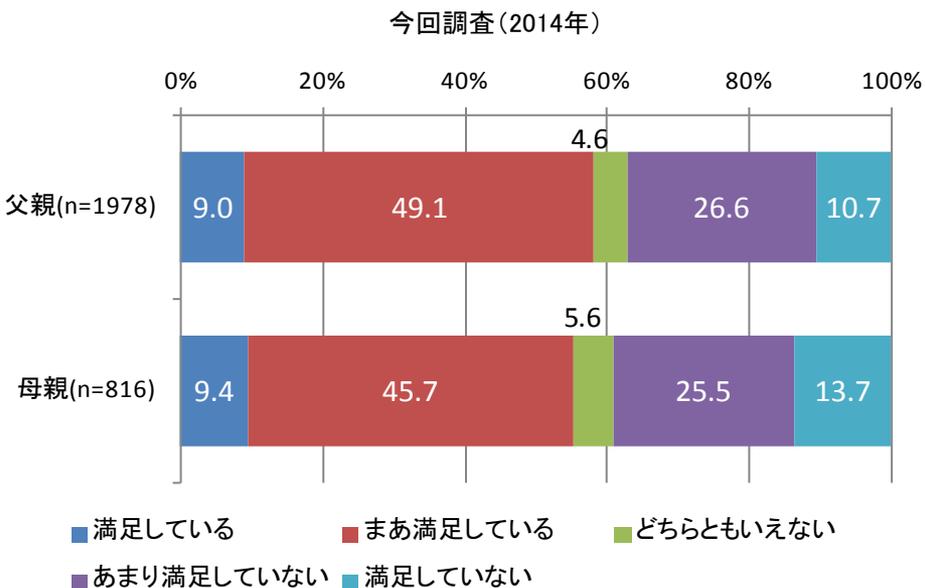
	結婚して いない時	結婚して子 どもがいない 時	子どもが3歳 以下の時	子どもが4歳 以上小学校 入学前の時	子どもが小 学生の時	子どもが中 学生以上の 時	
母親	働きたくない	56 2.8%	85 4.3%	774 38.7%	312 15.6%	151 7.5%	112 5.6%
	家でできる仕事	7 0.4%	25 1.3%	424 21.2%	368 18.4%	156 7.8%	77 3.8%
	短時間勤務	45 2.3%	160 8.0%	461 23.0%	841 42.1%	812 40.6%	390 19.5%
	フルタイムだが時間の融通が利く仕事	151 7.5%	265 13.2%	245 12.3%	354 17.7%	636 31.8%	746 37.3%
	フルタイムだが残業のない仕事	412 20.6%	787 39.4%	72 3.6%	104 5.2%	217 10.8%	568 28.4%
	急な残業もあるフルタイムの仕事	1329 66.4%	678 33.9%	24 1.2%	21 1.0%	28 1.4%	107 5.4%

(5)ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)の満足度

①満足度

自身のワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)の満足度について、満足している(「満足している」と「まあ満足している」を合わせた)割合は、父親で58.1%、母親で55.1%である。

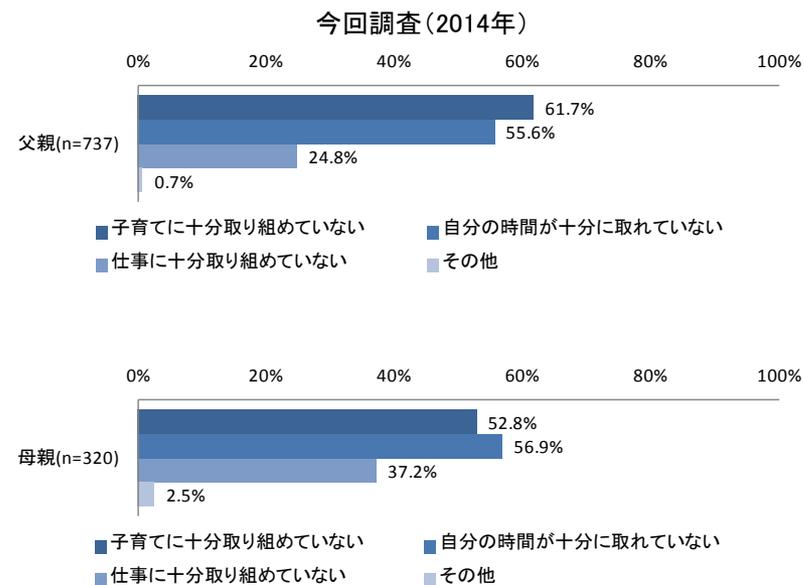
図表44 ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)の満足度
:単数回答



②満足していない理由

ワーク・ライフ・バランスに満足していない理由について、父親で最も多いのは「子育てに十分取り組めていない」が61.7%、次いで、「自分の時間が十分に取れていない」が55.6%である。一方、母親で最も多いのは「自分の時間が十分に取れていない」が56.9%、次いで、「子育てに十分取り組めていない」が52.8%である。

図表45 ワーク・ライフ・バランスに満足していない理由:複数回答

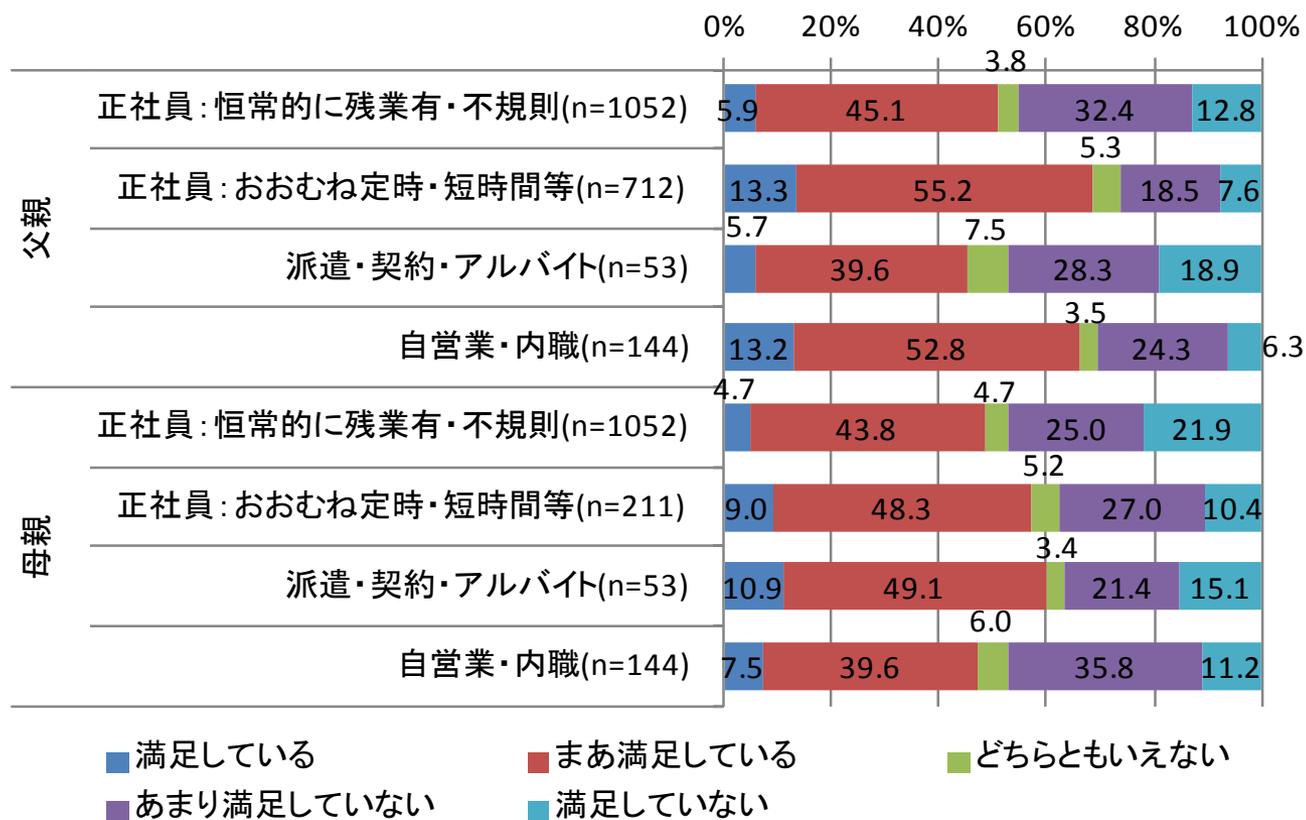


(4) 就業形態とWLB満足

就業形態別にWLB満足度をみると、父母ともに、同じ正社員でも「恒常的に残業有りあるいは不規則」であると、「おおむね定時退社・短時間・フレックス・在宅勤務等」よりもWLB満足度が低い。また、父親では「派遣・契約・アルバイト」が、母親では「自営業・内職」が、WLB満足度が低くなっている。

今回調査(2014年)

図表46 就業形態別WLB満足度:単数回答



5.基本属性

(1)年齢

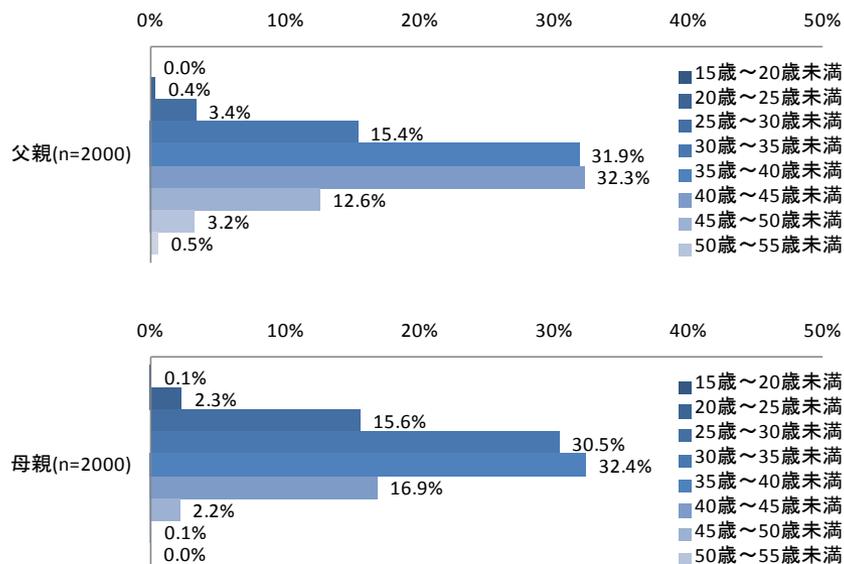
父親の平均は39.4歳、母親の平均は34.6歳であった。父親の年齢で最も多い回答は、「40歳～45歳未満」で32.3%、次いで「35歳～40歳未満」で31.9%、一方、母親の年齢で最も多い回答は「35歳～40歳未満」で32.4%、次いで「30歳～35歳未満」で30.5%である。

前回調査では、父親の平均年齢は37.3歳、母親の平均年齢は34.9歳であった。父親の年齢で最も多い回答は、「40歳以上」で31.6%、母親の年齢で最も多い回答は「36歳以上40歳未満」で31.7%であった。

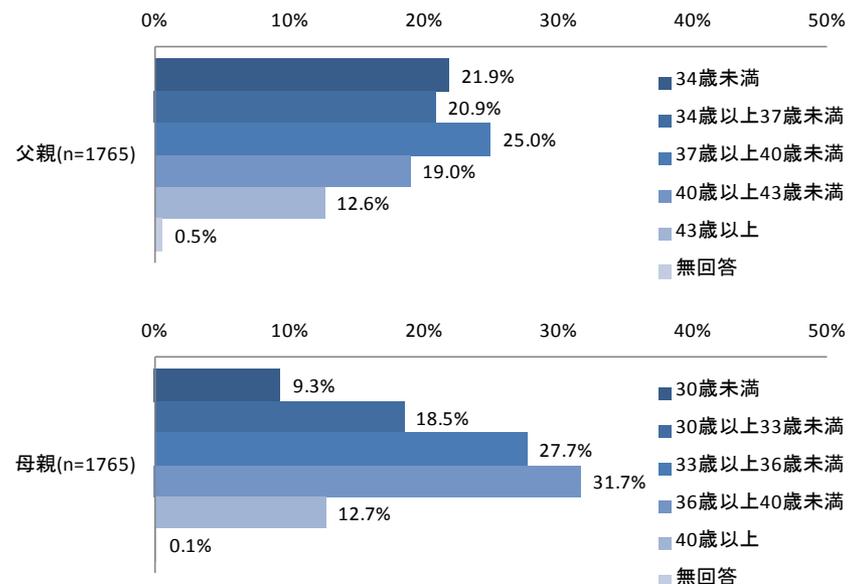
本調査の父親及び母親の年齢構成は前回調査とほぼ変わらない状況である。

図表47 年齢：単数回答

今回調査(2014年)



前回調査(2002年)



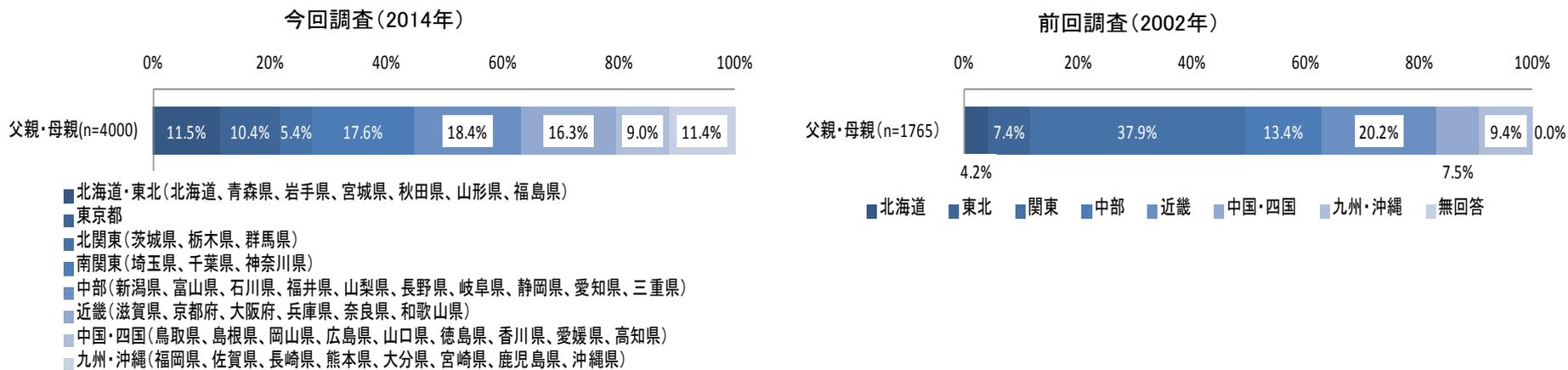
(2)居住地

居住地は、父親、母親ともに「関東」(33.4%)、「近畿」(18.4%)、「中部」(16.3%)の3地域で約70%であった。

前回調査でも、同様に、「関東」(37.9%)、「近畿」(20.2%)、「中部」(13.4%)の3地域で約70%であった。

本調査の父親及び母親の居住地の構成は前回調査とほぼ変わらない状況である。

図表48 居住地:単数回答



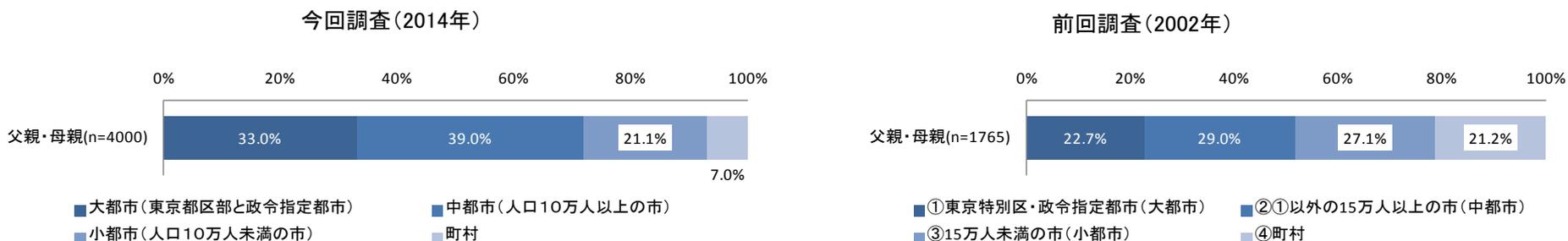
(3) 居住市区町村の規模

居住している市区町村の規模は、父親、母親ともに「中都市(人口10万人以上の市)」の割合が最も多く、39.0%、次いで「大都市(東京都区部と政令指定都市)」が33.0%、「小都市(人口10万人未満の市)」が21.1%、「町村」が7.0%であった。

前回調査では、「東京特別区・政令指定都市(大都市)以外の15万人以上の都市(中都市)」が29.0%、「15万人未満の市(小都市)」が27.1%、「東京特別区・政令指定都市(大都市)」が22.7%、「町村」が21.2%であった。

本調査では、前回調査よりも、「町村」の割合が低く、「中都市(人口10万人以上の市)」の割合が高くなっている。

図表49 居住市区町村の規模：単数回答

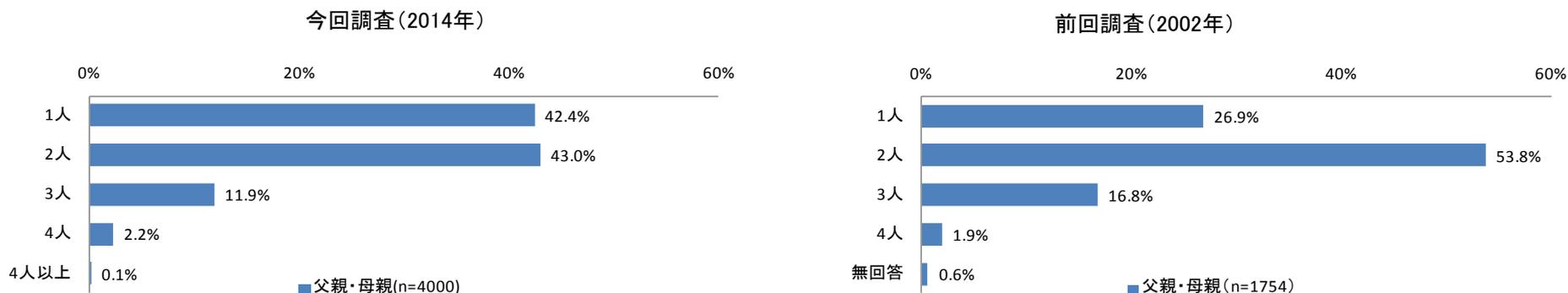


(4)子どもの人数

父親が回答した子どもの平均人数は1.8人、母親が回答した子どもの平均人数は1.7人であった。回答分布では、「2人」と答えた割合が最も多く、43.0%である。次いで、「1人」と答えた割合が42.4%である。

前回調査では、全体の平均人数は1.9人であり、回答分布では、「2人」が53.8%で最も多かった。本調査の子ども的人数は前回調査とほぼ変わらない状況である。

図表50 子どもの人数:単数回答



**子育て支援策等に関する調査2014 報告書
(未就学の父母アンケート調査) 概要**

**三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
〒105-8501 東京都港区虎ノ門5-11-2オランダヒルズ森タワー
女性活躍推進・ダイバーシティマネジメント戦略室
経済・社会政策部
矢島、鈴木、川澤、尾島**

子育て支援策等に関する調査 2014 報告書(中高生の意識調査)概要

調査目的:次世代を担う中高生について、日頃の活動や友達・両親との関係、将来に対する意識等を把握するため、アンケートにより調査を実施した。

調査対象:中高生1,200名

(中学生・男女 各300名、高校生・男女 各300名)

調査方法:ネット調査会社の登録モニターのお子さんを対象としたウェブアンケート調査 ※2002年調査は登録モニターのお子さんを対象とした郵送調査

抽出方法:北海道・東北、東京都、北関東、南関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄の8つの地域ブロック別に、人口比率に合わせて登録モニターを無作為に抽出

調査実施時期:平成26年6月

<分析項目>

1. 日頃の活動（地域活動やクラブ活動、多世代との交流等）
2. 友達づきあいの状況
3. 最近の悩み事
4. 両親について
5. 就労、結婚、子育てについての希望・イメージ
6. 就労観・結婚観・子育て観によるグループ分け
7. 基本属性

<まとめ>

1. 日頃の活動(地域活動やクラブ活動、多世代との交流等)

～パソコンやゲーム、スマートフォン等に時間をかけたい中高生は、全体の2割にのぼる。地域活動やクラブ活動等には、中学生の8割以上、高校生の半数程度が参加。小さな子どもとふれあう機会は前回調査より減少し、学校の授業や行事でのふれあいが最多に～

(p.12-15)

●余裕があったら一番時間をかけたいこと

中学生は「友人と一緒に遊ぶこと」(32.7%)、高校生は「趣味の活動」(27.8%)がトップ。2位はともに「パソコンやゲーム、スマートフォン等をする事」(中高生全体:21.2%)で、前回調査(2002年)の類似選択肢である「パソコンやゲームをする事」(8.9%)に比べて、大幅に増加している。

●地域活動やクラブ活動への参加状況

中学生は、「学校の部活動、クラブ活動」に8割以上が参加している。高校生は「学校の部活動、クラブ活動」への参加は半数弱で、「特に活動しているものはない」も4割にのぼる。

●小さな子どもとふれあう機会

中高生とも、小さな子どもと「ふれあう機会はない」(前回66.1%、今回72.7%)人が、前回調査と比べて増加している。さらに、ふれあう機会がある場合も、「学校の授業や行事」が10.3%で最も多く、前回調査で最も多かった「親戚の子どもと遊んだりする」(前回14.4%、今回8.9%)を抜いてトップとなった。

日頃の活動との関係では、学校外での活動・地域活動等^(※)に参加している方が、学校の活動にのみ参加している、もしくは特に活動しているものはない中高生に比べて、何らかの形で小さな子どもとふれあう機会が多い傾向がみられる。

※学校外での活動・地域活動等:学校外のクラブやサークル、定期的なボランティア活動、仲間とバンドやダンスなどのグループを組んで活動、子ども会や町内会の地域イベント、定期的なアルバイト

2. 友達つきあいの状況

～前回調査と比べて、全体的に友達関係の希薄化が進んでいるが、日頃、学校外の活動に参加したり、自宅外にも居心地の良い場所がある中高生は、良好な友達関係を築いている傾向がみられる。女子高校生は友達と親密な関係を求めている半面、「親しい友達を作ることができない」人が約4割にのぼる～

(p.16-18)

中学生は、「何でも話せる同性の友達がいる」人が74.8%と多く、「親しい友達を作ることができない」人は13.2%にとどまっているが、高校生は、「何でも話せる同性の友達がいる」人が60.7%とやや少なくなり、「親しい友達を作ることができない」人が33.2%と、中学生に比べて、良好な友達関係を築けていない人が多くなっている。特に、女子高校生は、「いつも友達のそばにいたり、連絡をとっていないとさみしい」が29.0%と就学・男女別で最も多く、友達と親密な関係を求めている半面、「親しい友達を作ることができない」人も38.0%と、最も多くなっている。

前回調査と比べると、何でも話せる同性の友達や、親しい異性の友達がいる人の割合は減少し、「親しい友達を作ることができない」(前回9.6%、今回23.2%)人が大幅に増加するなど、全体的に友達関係の希薄化が進んでいる傾向がみられる。

日頃の活動との関係では、学校外での活動に参加している方が、学校の活動にのみ参加していたり、特に活動しているものがない中高生に比べて、「友達と本気でけんかをすることがある」、「何でも話せる同性の友達がいる」人が多く、良好な友達関係を築いている人が多い傾向がみられる。

また、居心地のよい場所が、自宅のみ(「自宅の居間」もしくは「自分の自宅の部屋」のみ)や、「そのような場所はない」中高生に比べて、自宅以外^(※)にもそのような場所があると感じている方が、「何でも話せる同性の友達がいる」、「親しい異性の友達がいる」という人が多い。友達との関係が良好であると、自宅以外にも居心地のよい「居場所」が見つけられていることがうかがえる。

※自宅以外:学校の教室、学校の部活動等の部屋、友達の家、塾・習い事の教室、繁華街・にぎやかなところ、公園、ファーストフード店・ファミリーレストラン・コンビニ等

3. 最近の悩み事

～主な悩みは、勉強のこと、学校生活、将来のこと、身長や体重・外見など。これら悩み事の相談相手は、中学生は主に母親と学校の友達だが、高校生は約半数が誰にも相談していない。悩みの相談は、大半が直接会ってしているが、高校生はSNS(LINE,Facebook等)の利用も約1割にのぼる～

(p.19-21)

●悩み事、悩み事の相談相手

中学生の約半数は、最も悩んでいることとして「勉強のこと」(45.8%)をあげている。そのほか、「学校生活に関すること」、「将来のこと」などが上位にあげられている。悩み事の相談相手は、「母親」が最も多く、次いで「学校の友達」が多い。

高校生は、「勉強のこと」、「将来のこと」、「身長や体重、外見」などが上位にあげられている。また、女子高校生は、他と比べて、「身長や体重、外見」をあげる人が多く、「悩んでいることはない」の割合は、就学・男女別で最も少ない。悩み事の相談相手は、最も悩んでいること、2番目、3番目に悩んでいることのいずれについても、「相談している人はいない」が半数近くとなっている。相談している人がいる場合は、「学校の友達」、次いで「母親」が多くなっている。

前回調査では、悩み事の相談相手は、「学校の友達」が最も多く、次いで「母親」の順であったが、今回調査では、特に中学生において、「母親」が多くあげられている点が特徴といえる。また、「相談している人はいない」(最も悩んでいることについて、前回22.7%、今回29.5%)も、増加傾向にある。

●悩み事を相談する方法

悩み事を相談する方法(直接相談、メール、SNS等)は、「直接会う」が約9割と大半を占めている。ただし、高校生は、携帯電話やパソコン等の普及を背景として、「LINEやFacebook等のSNS」を利用する人も約1割を占めている。

4. 両親について

～父親や母親とほとんど会話をしない中高生は増加傾向。両親との会話の有無や、夫婦の仲の良さ、家庭の状況(家族でよく出かけた、家庭は和やかなど)が、両親に対する満足度や、両親への評価(自分を理解していると思うかなど)に大きく影響するとともに、両親との信頼関係が良好な友達関係を築く基盤に～

(p.22-25)

●両親の就業状況

現在は「共働き」が約半数、次いで「専業主婦(夫)」のいる家庭が約3割である。前回調査と比べると、小学校就学前において共働きの世帯が増加している。

●両親との会話

父親との話題は、「学校や塾、習い事での出来事」、「勉強のこと」、「テレビ番組の話題」など、母親との話題は、「学校や塾、習い事での出来事」、「友達のこと」、「勉強のこと」などが上位にあげられている。ただし、高校生では、父親と「ほとんど会話をしない」が約3割にのぼるなど、両親と会話をしない中高生(前回・父親14.8%,母親3.4%、今回・父親21.7%,母親9.4%)が増加傾向にある。

●両親に対する評価

父親・母親が自分を理解していると思う割合は、中学生では8～9割、高校生では6～7割である。また、父親・母親に対する満足度は、中学生は8割以上、高校生は7割前後だが、就学・男女別にみると、女子高校生は父親や母親に対する満足度が最も低くなっている。前回調査と比べると、父親・母親が仕事や家事にやりがいを感じているか、子育てに熱心と思うかについて、「そう思う」と答えた割合は減少した。

両親への評価や満足度は、両親の就業状況(共働き世帯、専業主婦世帯等)ではあまり差はみられないが、両親との会話の有無や、夫婦の仲の良さ、小学校時に家族でよく出かけたか、家庭はなごやかで楽しかったかどうかなどでは、大きな差がみられた。さらに、両親との関係が良好であったり、家庭が居心地が良いと思える中高生は、友達関係も良好な傾向がみられ、両親との信頼関係が友達関係を築いていく基盤となっていることがうかがえる。

5. 就労、結婚、子育てについての希望・イメージ

～将来の意識をみると、就労、結婚、子育てについて具体的な希望やイメージを持っていない中高生は増加傾向にある。また、高校生は、中学生に比べて、結婚や子育てに消極的な人も多い。これら将来に対して前向きな希望・イメージがもっているかは、良好な友達関係を築けているかどうかとも深く関係している～

(p.26-32)

将来、「自分の能力を発揮できる、やりがいのある仕事につきたい」という前向きな希望や、「ぜひ結婚したい」、もしくは「できるだけ結婚したい」と考える層は、それぞれ6～7割程度である。子育てについては、「当然、子どもを持って育てたいと思う」、「自分の子どもはかわいいと思う」など、ポジティブなイメージは、それぞれ約4割となっている。

就学・男女別にみると、男子中学生は、「わからない」が最も多く、将来のことに対して、具体的な希望やイメージをまだ持っていない傾向がみられる。一方、高校生は、中学生に比べて、より現実的な考え方をするようになるためか、結婚や子育てに対して消極的な考えや、ネガティブなイメージが多い。「結婚はしたくない」(12.7%)、「子どもは欲しいと思わない」(16.5%)など、結婚・子育てに消極的な考えの人は、結婚について「時間やお金を自由に使えなくなる」、「他人と家庭を築くのは面倒そう」、「相手の家族等との付き合いが面倒そう」、子育てについて「自由な時間がなくなる」、「子育ては、お金等かかり、負担が大きい」、「子どもはわずらわしい」など、ネガティブなイメージを有する人が多い。結婚と子育ての希望は相互に深く関係しており、結婚に対して前向きな人の方が、子どもを欲しい人が多いという傾向がみられる。

また、友達関係や親子関係が良好な方が、就労や結婚、子育てに対して前向きな傾向がみられ、安定した人間関係が、将来に対する希望につながっている。さらに、小さな子どもとふれあう機会がない人は、結婚や子育てについて具体的なイメージを持っていない人が多い傾向にあり、子どもとのふれあいは、結婚観や子育て観の形成に役立っていることがうかがえる。

6. 就労観・結婚観・子育て観によるグループ分け

～仕事に対して現実的な意識を持つグループが2つ。就労観・結婚観・子育て観、全てに後ろ抜きのグループは中高生男子の中の少数派から、女性も含めた一定割合を占める層に拡大～

(p.33-38)

これまでの分析によって、就労観、結婚観、子育て観には密接な関わりがみられたことから、クラスター分析によって、就労観・結婚観・子育て観によるグループ分けを行ったところ、「クラスター1:全て前向き(特に仕事にやりがい)」「クラスター2:特に結婚に前向き。子育てにも前向き。仕事はお金を稼ぐこと」「クラスター3:仕事はお金を稼ぐこと。他は後ろ向き」「クラスター4:全て後ろ向き」「クラスター5:結婚に前向きだが、仕事に後ろ向き」の5つのグループに分けることができた。

前回調査でも同様の設問、方法でグループ分けを行ったが、今回調査のグループ分けの特徴として、就労観について「お金を稼ぐことができる」で特徴のあるグループが2グループあった。この10年間に経済状況が悪化する中、中高生の就労観も、やりがいなどより、まずはお金を稼ぐことといった現実的な意識が強くなっていることがうかがえる。また、全て後ろ向きのグループは、前回調査では男子中高生の割合が高くなっていたが、今回調査では、属性の特徴は認められなかった。また、そのグループが全体に占める割合は7.5%から17.2%へと高くなっており、男子中高生の中にみられる少数の特有グループから、女性も含めた一定割合を占める層に拡大していることがうかがえた。

各グループの特徴は次頁以降のとおりである。

●クラスター1:全て前向き(特に仕事にやりがい) 20.0%

女子高校生の割合が高く、日頃の活動は友達つきあいが中心である。悩みを相談できる仲の良い友達もいる人が多い。就労・結婚・子育てに対しては、いずれも前向きな意識を持っている人が多い。両親に対しては、子育てに熱心、自分のことを理解してくれているなど、肯定的な意識を持っている人が多く、将来のことを話すなどコミュニケーションも取れており、家庭の雰囲気もよい状況がうかがえた。また、父親、母親とも、仕事や家事にやりがいを持っていると感じている割合も高い。

●クラスター2:特に結婚に前向き。子育てにも前向き。仕事はお金を稼ぐこと 26.2%

属性に特徴は見られない。日頃の活動は、友達つきあいが充実している様子うかがえた。就労・結婚・子育てに対しては、仕事に対して、お金を稼ぐために収入の高い仕事に就きたいと考える現実的なイメージを持っている人が多い。特に結婚願望が強く、子育てに対しても前向きな意識を持っている人が多い。生活のためにきちんと稼ぎ、結婚し、子どもを持つということを、より現実的に考えている堅実的なグループであることがうかがえた。

●クラスター3:仕事はお金を稼ぐこと。他は後ろ向き 22.9%

男子中学生の割合が高い。日頃の活動は、友達との関わりは薄く、パソコンやゲームなどに時間を割いている様子うかがえた。仕事に対してはお金を稼ぐために収入の高い仕事に就きたいと考える現実的なイメージを持っている人が多い。また、結婚や子育てについては、時間やお金を自由に使えなくなる、面倒そうといった自分中心の意識がまだ強い傾向にある。一方で、わからないと回答した割合も高く、仕事については現実的なイメージのみ、結婚・子育てについては漠然としたイメージしか持つことのできていない状況がうかがえた。小さな子どもとふれあう機会がない人が8割を超えており、こうしたことも子どもを持つことのイメージが持てない要因となっているとも考えられる。

●クラスター4: 全て後ろ向き 17.2%

属性に特徴は見られない。日頃の活動をみると、特に活動しているものはない、時間をかけたいものもないと回答した割合が高く、友達との関わりも希薄な人が多い。悩んでいることがないと回答した割合が高く、全般的に活動意欲が低い様子が見えられた。就労に対しては、大変そう、自由な時間が少なくなる、結婚・子育てに対しては、面倒そう、負担がかかるなどの自分中心の意識が強い。結婚や子育ては、わからないと回答した割合も高く、小さな子どもとふれあう機会がない人も多い。このグループは、両親は自分のことを理解してくれていないと感じている割合が高く、家庭の雰囲気が悪く、特に両親とのコミュニケーションが薄い状況が見えられた。

●クラスター5: 結婚に前向きだが、仕事に後ろ向き 23.8%

属性に特徴は見られない。将来について悩んでいる人が多く、仕事に対しては、大変そう、自由な時間がなくなるといったネガティブなイメージを持っている人が多い。一方、結婚に対しては、ぜひ結婚したいと回答した割合が高く、ポジティブなイメージを持っている人が多い。子育てについても、ポジティブなイメージを持っている人が多く、町内会や子ども会、学校の授業や行事で小さな子どもとふれあう機会のある人が多くなっていた。結婚願望が強く、子どもを持つことについてもポジティブなイメージを持つことができている反面、仕事に対する意識は低く、それが将来の悩みにもつながっていることが見えられた。

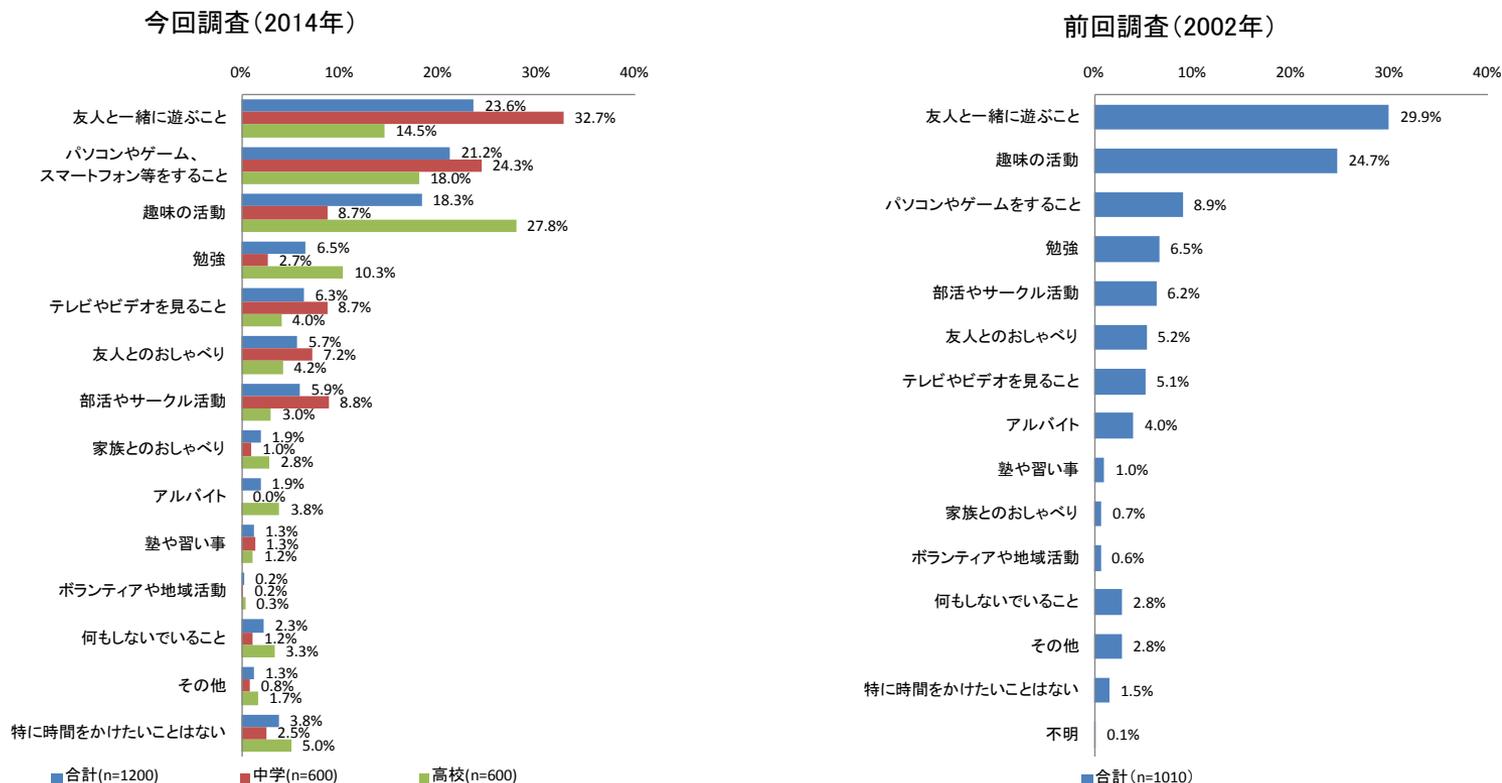
<参照データ>

1.日頃の活動(地域活動やクラブ活動、多世代との交流)

(1)余裕があったら時間をかけたいこと

中学生の1位は「友人と一緒に遊ぶこと」で32.7%、高校生の1位は「趣味の活動」で27.8%。2位はともに「パソコンやゲーム、スマートフォン等をする事」で、中高生全体では21.2%(中学生24.3%、高校生18.0%)。前回調査の類似選択肢である「パソコンやゲームをする事」は中高生全体で8.9%であったが、今回調査では大きく増加した。

図表1 余裕があったら、一番時間をかけたいこと:単数回答(Q6)

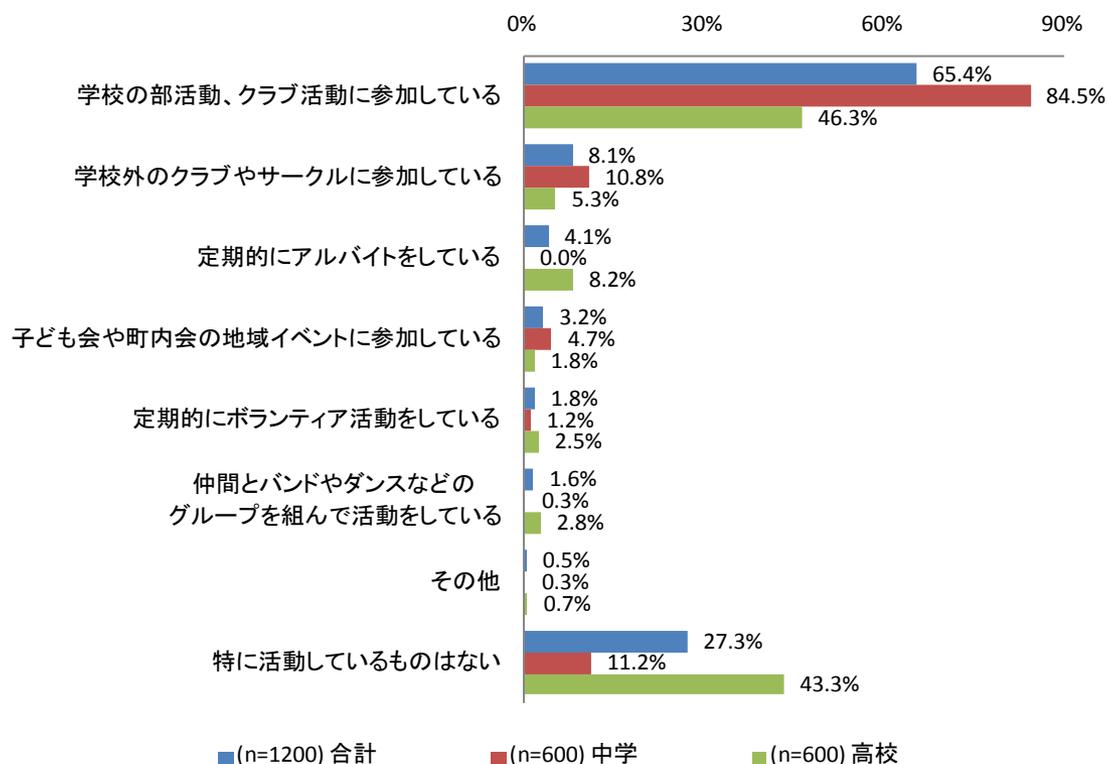


(2)地域活動やクラブ活動への参加状況

中学生は、「学校の部活動、クラブ活動に参加している」が84.5%で最も多く、次いで「学校外のクラブやサークルに参加している」が10.8%で続いている。

高校生は、「学校の部活動、クラブ活動に参加している」が46.3%で最も多く、次いで「定期的にアルバイトをしている」が8.2%で続いている。ただし、「特に活動しているものはない」人も43.3%にのぼり、中学生に比べて、地域活動やクラブ活動に参加している割合は少ない。

図表2 地域活動やクラブ活動への参加状況：複数回答(Q8)

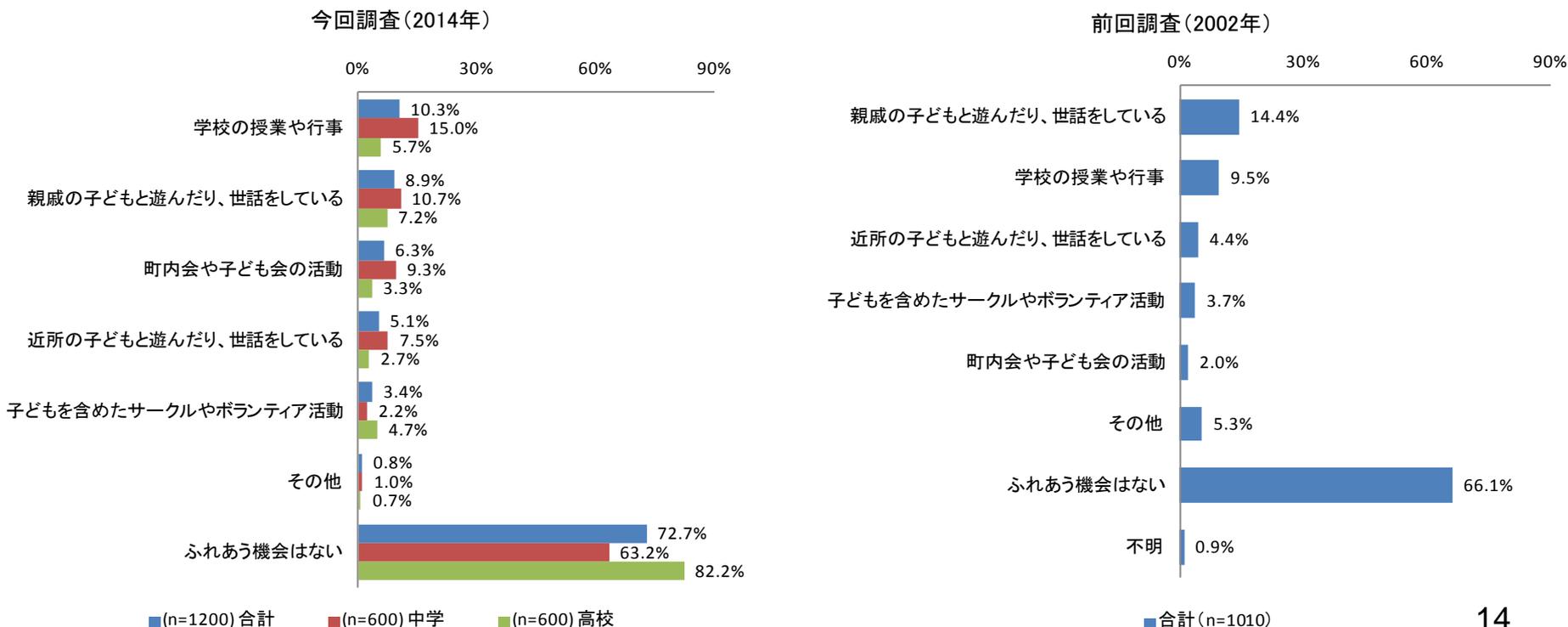


(3) 小さな子ども(小学校に入る前の乳幼児)とふれあう機会

小さな子どもと「ふれあう機会はない」という中高生が72.7%で最も多く、前回調査(66.1%)から増加している。

一方、ふれあう機会をみると、中高生全体で「学校の授業や行事」が10.3%で最も多く、前回調査で最も多かった「親戚の子どもと遊んだり、世話をしている」(前回14.4%、今回8.9%)を上回った。少子化の進展を背景に、親戚の子どもと遊ぶ機会が減少し、学校の授業や行事が、小さな子どもとふれあう機会の一つとして、重要性が高まっていることがうかがえる。

図表3 小さな子どもとふれあう機会：複数回答(Q9)



日頃の地域活動やクラブ活動への参加状況別に、小さな子どもとふれあう機会をみると、「学校外の活動、地域活動等に参加」、「学校の活動のみ参加」、「特に活動しているものはない」の順に、ふれあう機会がある人が多くなっている。「特に活動しているものはない」人では、「ふれあう機会はない」が約9割にのぼっており、学校内外での活動や、地域活動等への参加が、何らかの形で小さな子どもとふれあう機会につながっていることがうかがえる。

図表4 地域活動やクラブ活動への参加状況別 小さな子どもとふれあう機会：複数回答(Q9)

日頃の活動※	合計	Q9 小さな子どもとふれあう機会						
		町内会や子ども会の活動でふれあう	子どもを含めたサークルや、ボランティア活動	学校の授業や行事でふれあう	親戚の子どもと遊んだり、世話をしている	近所の子どもと遊んだり、世話をしている	その他	ふれあう機会はない
全体	1200	76	41	124	107	61	10	872
	100.0	6.3	3.4	10.3	8.9	5.1	0.8	72.7
学校の活動のみ参加	675	48	14	81	57	35	6	471
	100.0	7.1	2.1	12.0	8.4	5.2	0.9	69.8
学校外の活動、地域活動等に参加	198	27	25	35	31	23	3	104
	100.0	13.6	12.6	17.7	15.7	11.6	1.5	52.5
特に活動しているものはない	327	1	2	8	19	3	1	297
	100.0	0.3	0.6	2.4	5.8	0.9	0.3	90.8

※地域活動やクラブ活動への参加状況(Q8)の回答結果をもとに、以下のように再分類している。

「学校の活動のみ参加」:「学校の部活動、クラブ活動に参加している」のみ選択した人。

「学校外の活動、地域活動等に参加」:「特に活動しているものはない」に該当せず、「学校の部活動、クラブ活動に参加している」以外の選択肢を1つでも選択した人。

「特に活動しているものはない」:「特に活動しているものはない」のみを選択した人。

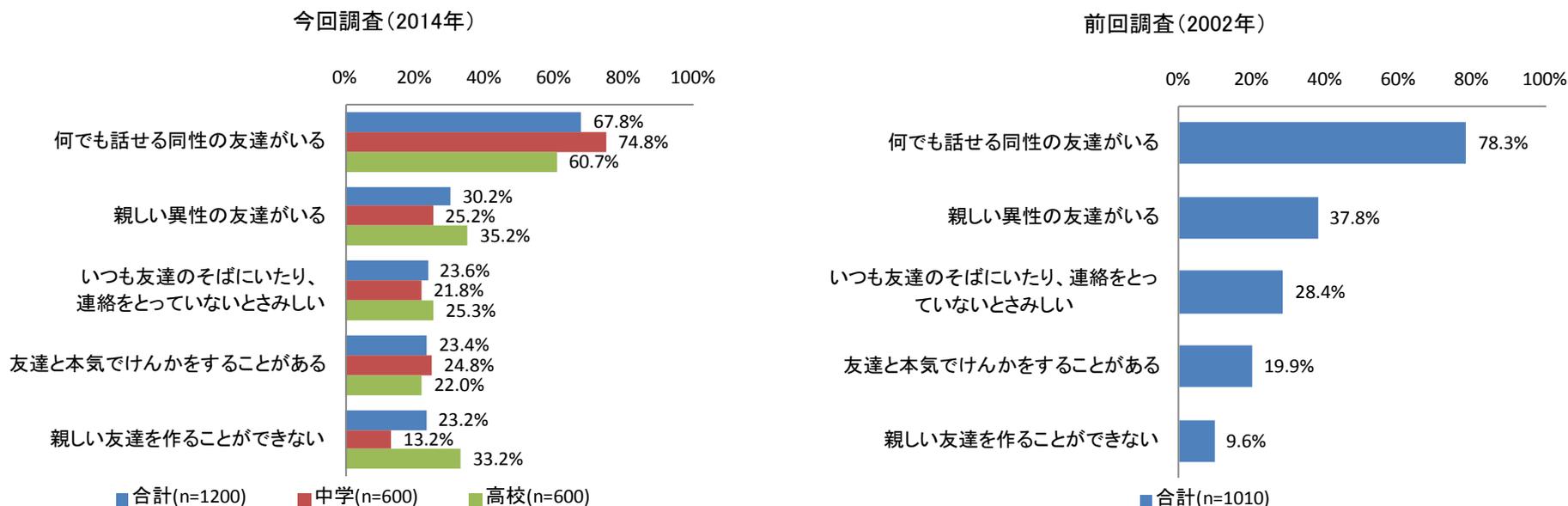
2.友達つきあいの状況

(1)友達つきあいの状況

中高生全体でみると、「何でも話せる同性の友達がいる」人は7割弱、「友達と本気でけんかをすることがある」人は2割強、「親しい異性の友達がいる」人は約3割となっている。

一方、「親しい友達を作ることができない」人は、2割強だが、高校生の方が中学生よりもその割合は多く、高校生では約3分の1にのぼっている。前回調査と比べて、「何でも話せる同性の友達がいる」(前回78.3%、今回67.8%)人は減少し、「親しい友達を作ることができない」(前回9.6%、今回23.2%)人が増加するなど、友達関係の希薄化がうかがえる。

図表5 最近の友達とのつきあい:単数回答(Q12)



※グラフの数値は、各項目に「はい」と回答した人の割合

就学・男女別に、友達とのつきあいの状況をみると、男子高校生は、他と比較して、「友達と本気でけんかをすることがある」、「何でも話せる同性の友達がいる」に「いいえ」と回答した人の割合（それぞれ81.7%、42.3%）が多い。

また、女子高校生は、他と比較して、「いつも友達のそばにいたり、連絡をとっていないとさみしい」（29.0%）人が最も多い一方、「親しい友達を作ることができない」（38.0%）という人も最も多く、友達と親密な関係を求める傾向が強い半面、良好な友達関係を築くことができていない傾向がうかがえる。

図表6 就学・男女別 最近の友達とのつきあい：単数回答(Q12)

就学・男女別	合計	Q12.1 友達と本気でけんかをする ことがある		Q12.2 何でも話せる同性の 友達がいる		Q12.3 親しい異性の友 達が いる		Q12.4 いつも友達のそばに いたり、連絡をとっていないと さみしい		Q12.5 親しい友達をつ くることができない	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	1200	281	919	813	387	362	838	283	917	278	922
	100.0	23.4	76.6	67.8	32.3	30.2	69.8	23.6	76.4	23.2	76.8
中学生・男性	300	79	221	222	78	75	225	54	246	37	263
	100.0	26.3	73.7	74.0	26.0	25.0	75.0	18.0	82.0	12.3	87.7
中学生・女性	300	70	230	227	73	76	224	77	223	42	258
	100.0	23.3	76.7	75.7	24.3	25.3	74.7	25.7	74.3	14.0	86.0
高校生・男性	300	55	245	173	127	99	201	65	235	85	215
	100.0	18.3	81.7	57.7	42.3	33.0	67.0	21.7	78.3	28.3	71.7
高校生・女性	300	77	223	191	109	112	188	87	213	114	186
	100.0	25.7	74.3	63.7	36.3	37.3	62.7	29.0	71.0	38.0	62.0

地域活動やクラブ活動への参加状況別及び居心地の良い場所別に友達とのつきあいの状況をみると、日頃、学校外の活動に参加したり、自宅外にも居心地の良い場所がある中高生の方が、良好な友達関係を築けている傾向がみられる。

図表7 地域活動やクラブ活動への参加状況別 最近の友達とのつきあい:単数回答(Q12)

日頃の活動*	合計	Q12.1 友達と本気でけんかをすることがある		Q12.2 何でも話せる同性の友達がいる		Q12.3 親しい異性の友達がいる		Q12.4 いつも友達のおそばにいたり、連絡をとっていないときみしい		Q12.5 親しい友達を作ることができない	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	1200 100.0	281 23.4	919 76.6	813 67.8	387 32.3	362 30.2	838 69.8	283 23.6	917 76.4	278 23.2	922 76.8
学校の活動のみ参加	675 100.0	158 23.4	517 76.6	495 73.3	180 26.7	185 27.4	490 72.6	160 23.7	515 76.3	126 18.7	549 81.3
学校外の活動、地域活動等に参加	198 100.0	63 31.8	135 68.2	146 73.7	52 26.3	86 43.4	112 56.6	62 31.3	136 68.7	43 21.7	155 78.3
特に活動しているものはない	327 100.0	60 18.3	267 81.7	172 52.6	155 47.4	91 27.8	236 72.2	61 18.7	266 81.3	109 33.3	218 66.7

※地域活動やクラブ活動への参加状況(Q8)の回答結果をもとに、以下のように再分類している。

「学校の活動のみ参加」:「学校の部活動、クラブ活動に参加している」のみを選択した人。

「学校外の活動、地域活動等に参加」:「特に活動しているものはない」に非該当で、「学校の部活動、クラブ活動に参加している」以外の選択肢を1つでも選択した人。

「特に活動しているものはない」:「特に活動しているものはない」のみを選択した人。

図表8 居心地の良い場所別 最近の友達とのつきあい:単数回答(Q12)

居心地の良い場所*	合計	Q12.1 友達と本気でけんかをすることがある		Q12.2 何でも話せる同性の友達がいる		Q12.3 親しい異性の友達がいる		Q12.4 いつも友達のおそばにいたり、連絡をとっていないときみしい		Q12.5 親しい友達を作ることができない	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
全体	1200 100.0	281 23.4	919 76.6	813 67.8	387 32.3	362 30.2	838 69.8	283 23.6	917 76.4	278 23.2	922 76.8
自宅のみ	772 100.0	169 21.9	603 78.1	519 67.2	253 32.8	206 26.7	566 73.3	160 20.7	612 79.3	186 24.1	586 75.9
自宅以外にもあり	355 100.0	100 28.2	255 71.8	270 76.1	85 23.9	137 38.6	218 61.4	110 31.0	245 69.0	73 20.6	282 79.4
そのような場所はない	73 100.0	12 16.4	61 83.6	24 32.9	49 67.1	19 26.0	54 74.0	13 17.8	60 82.2	19 26.0	54 74.0

※居心地の良い場所(Q11)の回答結果をもとに、以下のように再分類している。

「自宅のみ」:「自宅の居間」もしくは「自宅の自分の部屋」のみを選択した人。

「自宅以外にもあり」:「そのような場所はない」に非該当で、「自宅の居間」、「自宅の自分の部屋」以外の選択肢を、1つでも選択した人。

「そのような場所はない」:「そのような場所はない」のみを選択した人。

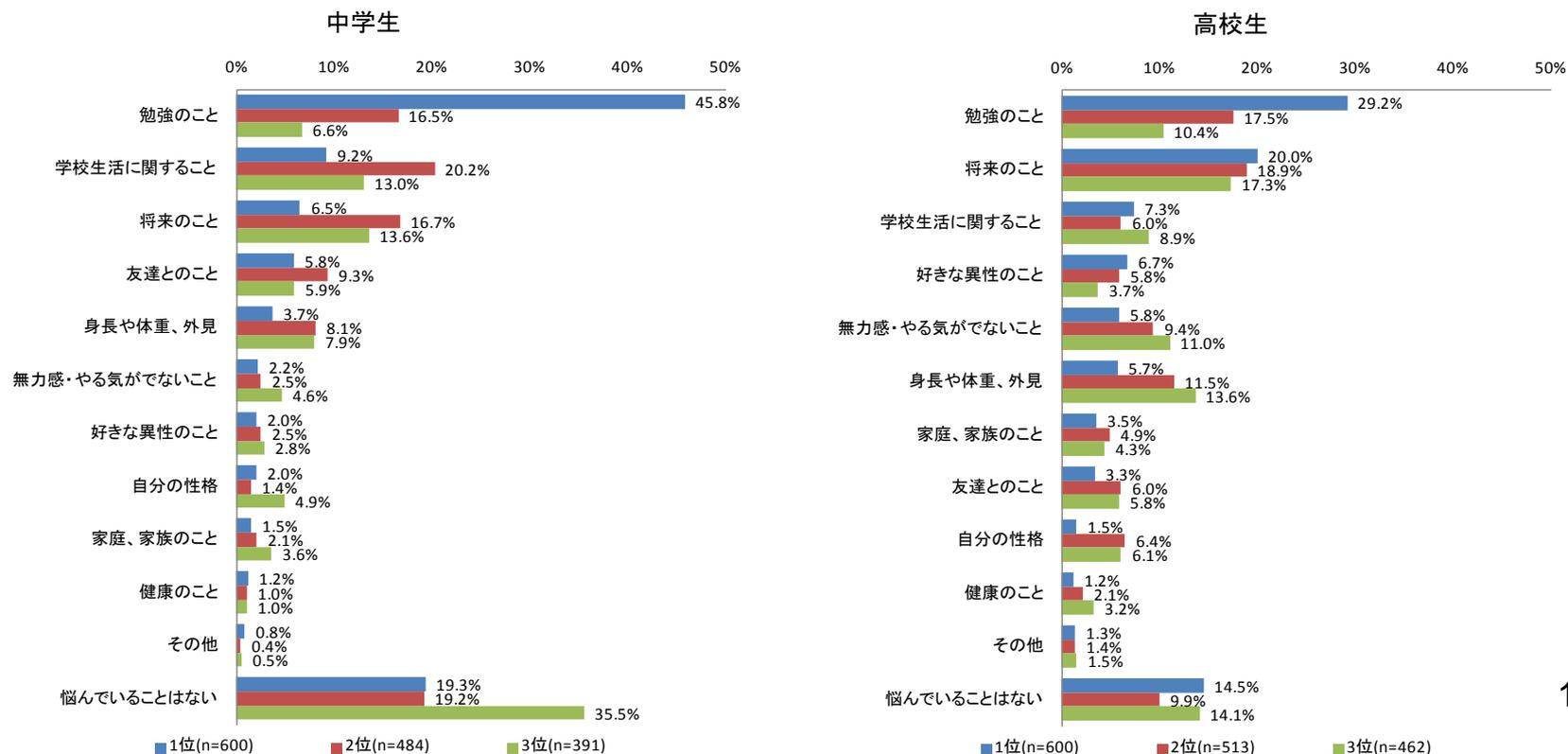
3.最近の悩み事

(1)最近の悩み事

中学生が最も悩んでいる事は、「勉強のこと」(45.8%)が半数弱を占め、次いで「学校生活に関すること」(9.2%)が続いている。また、「悩んでいることはない」は19.3%である。

高校生が最も悩んでいる事は、「勉強のこと」(29.2%)、「将来のこと」(20.0%)などが上位である。「悩んでいることはない」は14.5%である。

図表9 最近の悩み事(1位~3位):単数回答(Q10)

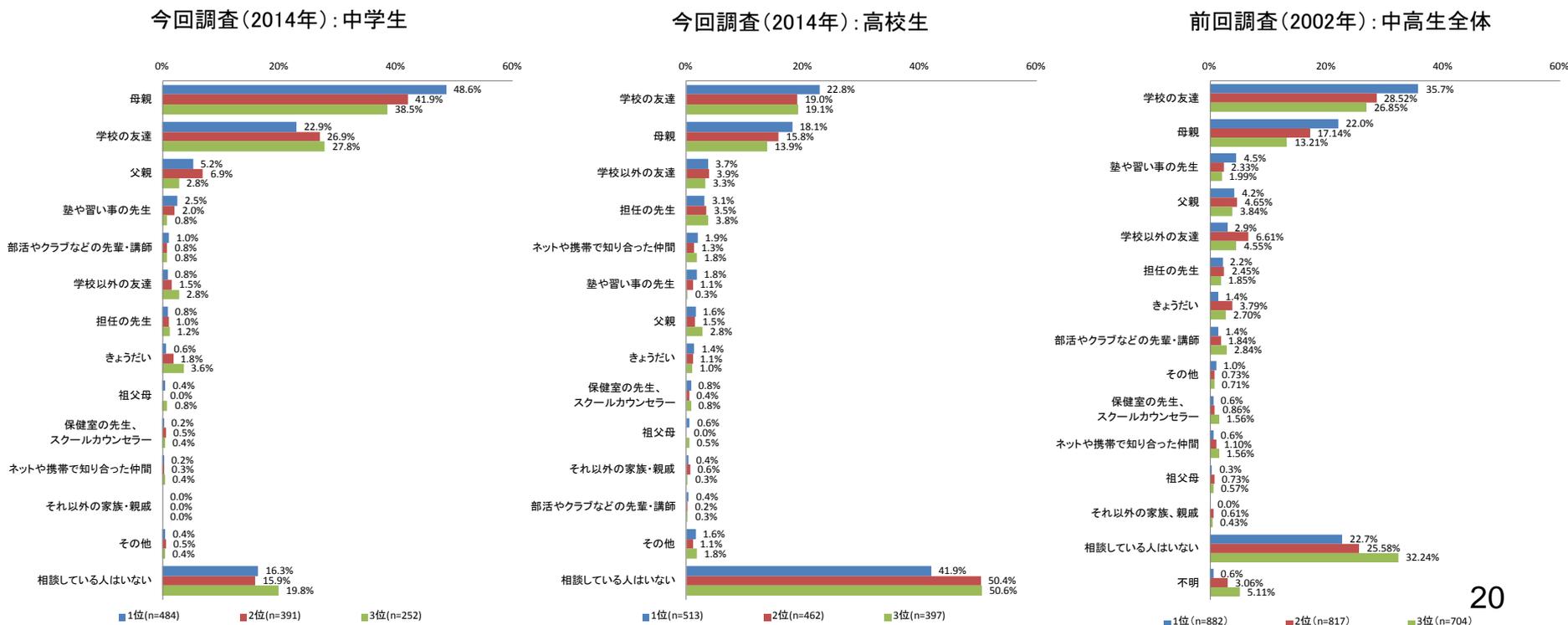


(2) 悩み事の相談相手

最も悩んでいる事を相談する相手を見ると、中学生は「母親」(48.6%)や、「学校の友達」(22.9%)が多い。高校生は、「相談している人はいない」(41.9%)が最も多く、4割を上回っている。次いで「学校の友達」(22.8%)、「母親」(18.1%)となっている。

前回調査では、「学校の友達」(中高生全体:35.7%)が最も多く、次いで「母親」(同22.0%)の順であったが、今回は「母親」が「学校の友達」より多くなっている。また、「相談している人はいない」(前回22.7%、今回29.5%)も増え、誰にも悩みを相談しない中高生が増えている傾向がうかがえる。

図表10 悩み事(1位~3位)の相談相手:単数回答(Q10)

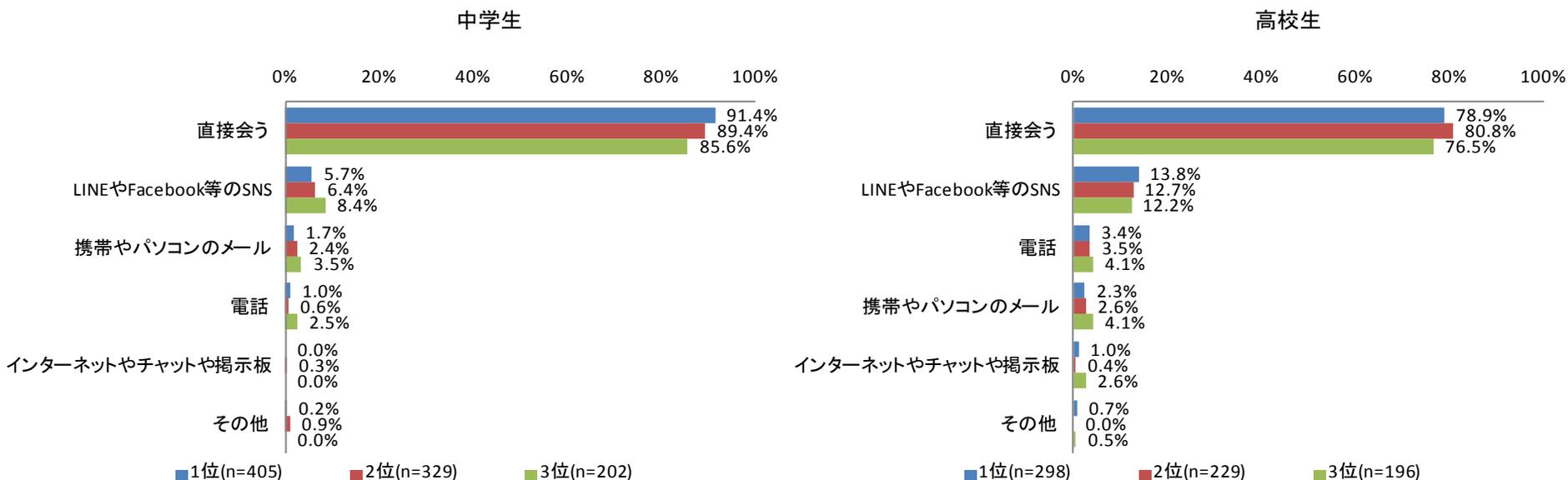


(3) 悩み事の相談方法

最も悩んでいる事について相談する方法は、中学生は「直接会う」(91.4%)が最も多い。

高校生は、「直接会う」(78.9%)が最も多いものの、8割弱にとどまり、「LINEやFacebook等のSNS」(13.8%)を利用する人も1割強を占めている。

図表11 悩み事(1位~3位)の相談方法:単数回答(Q10)



4.両親について

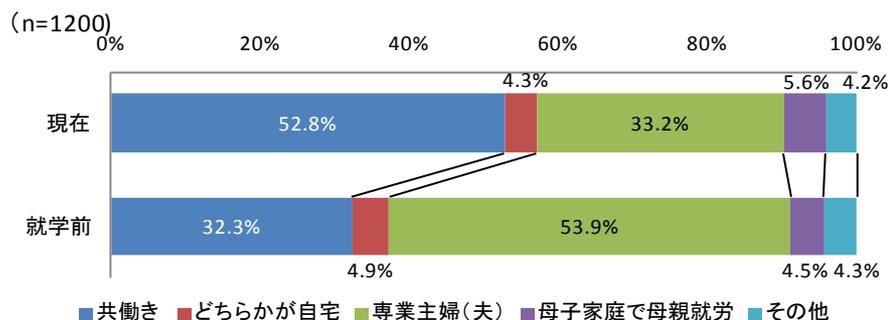
(1)両親の就業状況

現在の両親の就業状況は、「共働き」が52.8%で最も多く、次いで「専業主婦(夫)」が33.2%である。小学校就学前の両親の就業状況は、「共働き」が32.3%で最も多く、次いで「専業主婦(夫)」が53.9%である。

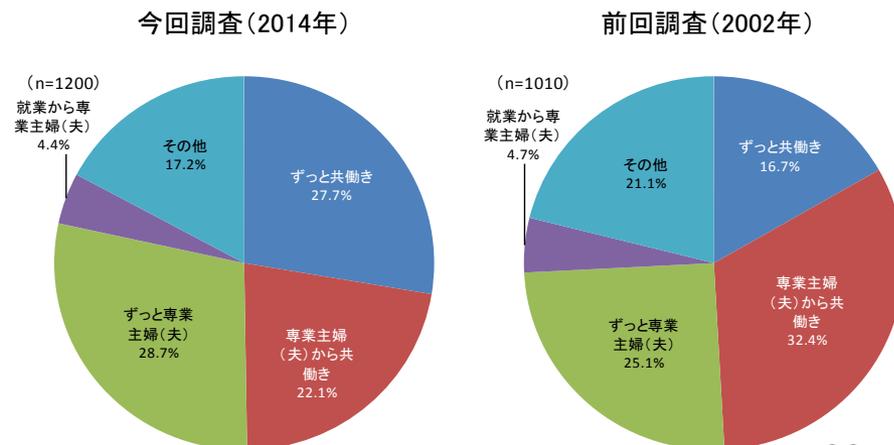
両親の就業状況の変化をみると、「ずっと共働き」と「ずっと専業主婦(夫)」がいずれも3割弱、次いで「専業主婦(夫)から共働き」が22.1%となっている。

前回調査と比べて、小学校就学前における共働き世帯の割合が増加しており、両親の就業状況の変化をみても、「ずっと共働き」(前回16.7%、今回27.7%)の世帯が多くなっている。

図表12 現在及び小学校就学前の両親の就業状況
:単数回答(Q21)



図表13 両親の就業状況の変化:単数回答
(Q21)

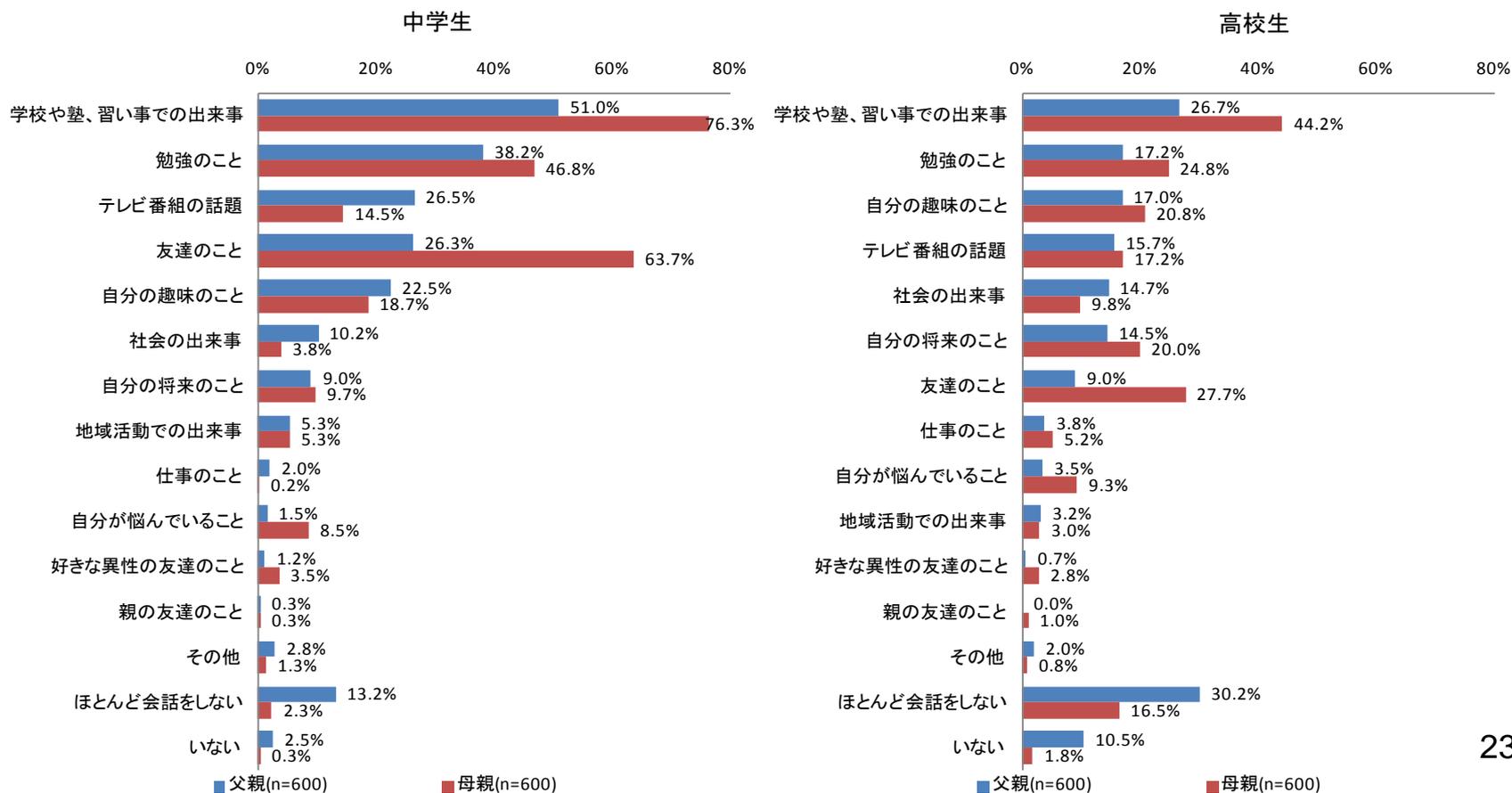


※現在と、小学校就学前の両親の就業状況の回答をもとに作成。
「その他」には、両親とも非就業の世帯や、母子家庭などが含まれる。

(2)両親との会話

両親との会話の内容をみると、中高生ともに、父親とは「学校や塾、習い事での出来事」、「勉強のこと」、母親とは「学校や塾、習い事での出来事」、「友達のこと」を話している人が多い。一方、「ほとんど会話をしない」人は、中学生に比べて高校生で多い。また、中高生全体でみると、前回調査から増加傾向にある(前回・父親14.8%、母親3.5%、今回・父親21.7%、母親9.4%)。

図表14 両親との会話の内容:複数回答(Q20)



(3)両親に対する評価・満足度

父親・母親と、学校や塾、習い事での出来事や、友達とのことなどを話している中高生は、両親が自分を理解しているか、子育てに熱心と思うか、両親は仲が良いかについて、「そう思う」もしくは「まあそう思う」と回答した人が多い。一方、両親と「ほとんど会話をしない」場合は、「そう思わない」、「あまりそう思わない」という回答が多く、両親との会話の状況と、両親に対する評価は大きく関係していることがうかがえる。

図表15 両親との会話の内容別 両親に対する評価：単数回答(Q23)

両親との会話の内容	合計	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
<父親との会話の内容>					
Q23_1_1 自分を理解している:父					
全体	1122 100.0	208 18.5	598 53.3	222 19.8	94 8.4
学校や塾、習い事での出来事	466 100.0	113 24.2	296 63.5	48 10.3	9 1.9
ほとんど会話をしない	260 100.0	23 8.8	83 31.9	86 33.1	68 26.2
<母親との会話の内容>					
Q23_2_1 自分を理解している:母					
全体	1187 100.0	312 26.3	630 53.1	183 15.4	62 5.2
友達とのこと	548 100.0	186 33.9	307 56.0	51 9.3	4 0.7
ほとんど会話をしない	113 100.0	7 6.2	37 32.7	30 26.5	39 34.5
<父親との会話の内容>					
Q23_1_4 子育てに熱心:父					
全体	1122 100.0	110 9.8	476 42.4	387 34.5	149 13.3
学校や塾、習い事での出来事	466 100.0	62 13.3	250 53.6	130 27.9	24 5.2
ほとんど会話をしない	260 100.0	12 4.6	49 18.8	113 43.5	86 33.1
<母親との会話の内容>					
Q23_2_4 子育てに熱心:母					
全体	1187 100.0	246 20.7	615 51.8	258 21.7	68 5.7
友達とのこと	548 100.0	148 27.0	302 55.1	87 15.9	11 2.0
ほとんど会話をしない	113 100.0	4 3.5	32 28.3	40 35.4	37 32.7

両親との会話の内容	合計	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
<父親との会話の内容>					
Q23_3 両親は仲が良い					
全体	1109 100.0	337 30.4	507 45.7	178 16.1	87 7.8
学校や塾、習い事での出来事	459 100.0	168 36.6	216 47.1	53 11.5	22 4.8
ほとんど会話をしない	257 100.0	41 16.0	94 36.6	70 27.2	52 20.2
<母親との会話の内容>					
Q23_3 両親は仲が良い					
全体	1109 100.0	337 30.4	507 45.7	178 16.1	87 7.8
友達とのこと	530 100.0	177 33.4	246 46.4	76 14.3	31 5.8
ほとんど会話をしない	102 100.0	16 15.7	31 30.4	26 25.5	29 28.4

小学校の頃の家庭の様子別に、父親・母親に対する満足度をみると、「家族でよく出かけた」、「家庭はなごやかで楽しかった」に「いいえ」と回答した中高生は、父親・母親に対して「不満である」もしくは「やや不満である」と回答する人が多く、家庭の状況は、両親に対する満足度に大きく影響しているといえる。

また、両親が自分を理解していると思う中高生は、そう思わない場合に比べて、友達関係が良好な傾向がみられる。両親との信頼関係が、友達関係を築く基盤になっていることがうかがえる。

図表16 小学校の頃の家庭の様子別
両親に対する満足度:単数回答(Q25)

小学校の頃の家庭の様子	合計	Q25.1 父親に対する満足度				
		大変満足している	まあ満足している	やや不満である	不満である	
	1122	217	620	186	99	
	100.0	19.3	55.3	16.6	8.8	
家族でよく出かけた	はい	878	192	501	130	55
	いいえ	244	25	119	56	44
家庭はなごやかで楽しかった	はい	911	209	541	124	37
	いいえ	211	8	79	62	62
	100.0	3.8	37.4	29.4	29.4	

小学校の頃の家庭の様子	合計	Q25.2 母親に対する満足度				
		大変満足している	まあ満足している	やや不満である	不満である	
	1187	299	692	143	53	
	100.0	25.2	58.3	12.0	4.5	
家族でよく出かけた	はい	921	251	554	90	26
	いいえ	266	48	138	53	27
家庭はなごやかで楽しかった	はい	968	283	583	82	20
	いいえ	219	16	109	61	33
	100.0	7.3	49.8	27.9	15.1	

図表17 両親に対する理解度別
友達とのつきあいの状況:単数回答(Q12)

自分を理解している(父)	合計	Q12.2 何でも話せる同性の友達がいる		Q12.5 親しい友達を作ることができない	
		はい	いいえ	はい	いいえ
全体	1200	813	387	278	922
	100.0	67.8	32.3	23.2	76.8
そう思う	208	160	48	45	163
	100.0	76.9	23.1	21.6	78.4
まあそう思う	598	415	183	103	495
	100.0	69.4	30.6	17.2	82.8
あまりそう思わない	222	139	83	65	157
	100.0	62.6	37.4	29.3	70.7
そう思わない	94	48	46	38	56
	100.0	51.1	48.9	40.4	59.6

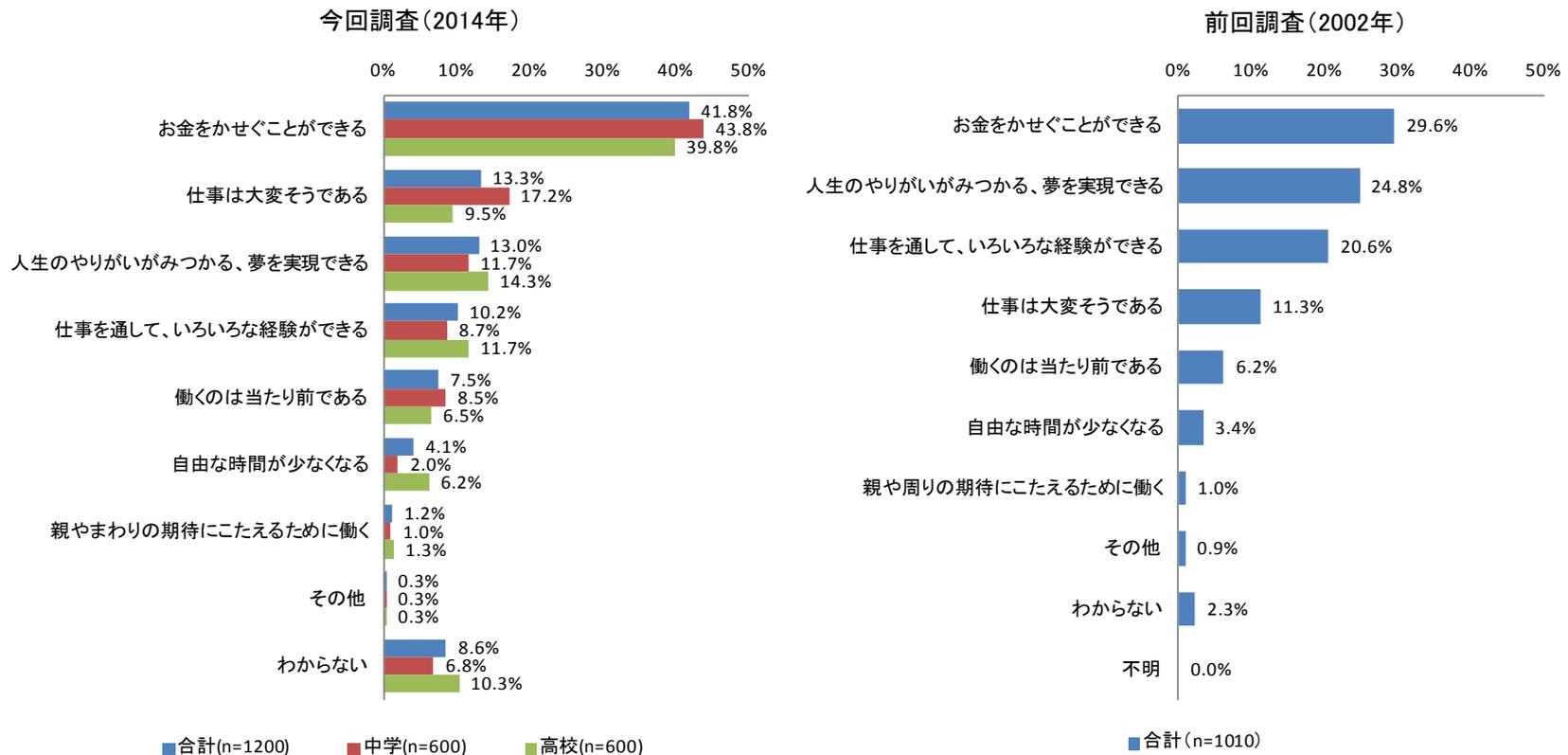
自分を理解している(母)	合計	Q12.2 何でも話せる同性の友達がいる		Q12.5 親しい友達を作ることができない	
		はい	いいえ	はい	いいえ
全体	1200	813	387	278	922
	100.0	67.8	32.3	23.2	76.8
そう思う	312	236	76	66	246
	100.0	75.6	24.4	21.2	78.8
まあそう思う	630	435	195	130	500
	100.0	69.0	31.0	20.6	79.4
あまりそう思わない	183	106	77	49	134
	100.0	57.9	42.1	26.8	73.2
そう思わない	62	28	34	26	36
	100.0	45.2	54.8	41.9	58.1

5.就労、結婚、子育てについての希望・イメージ

(1)就労について

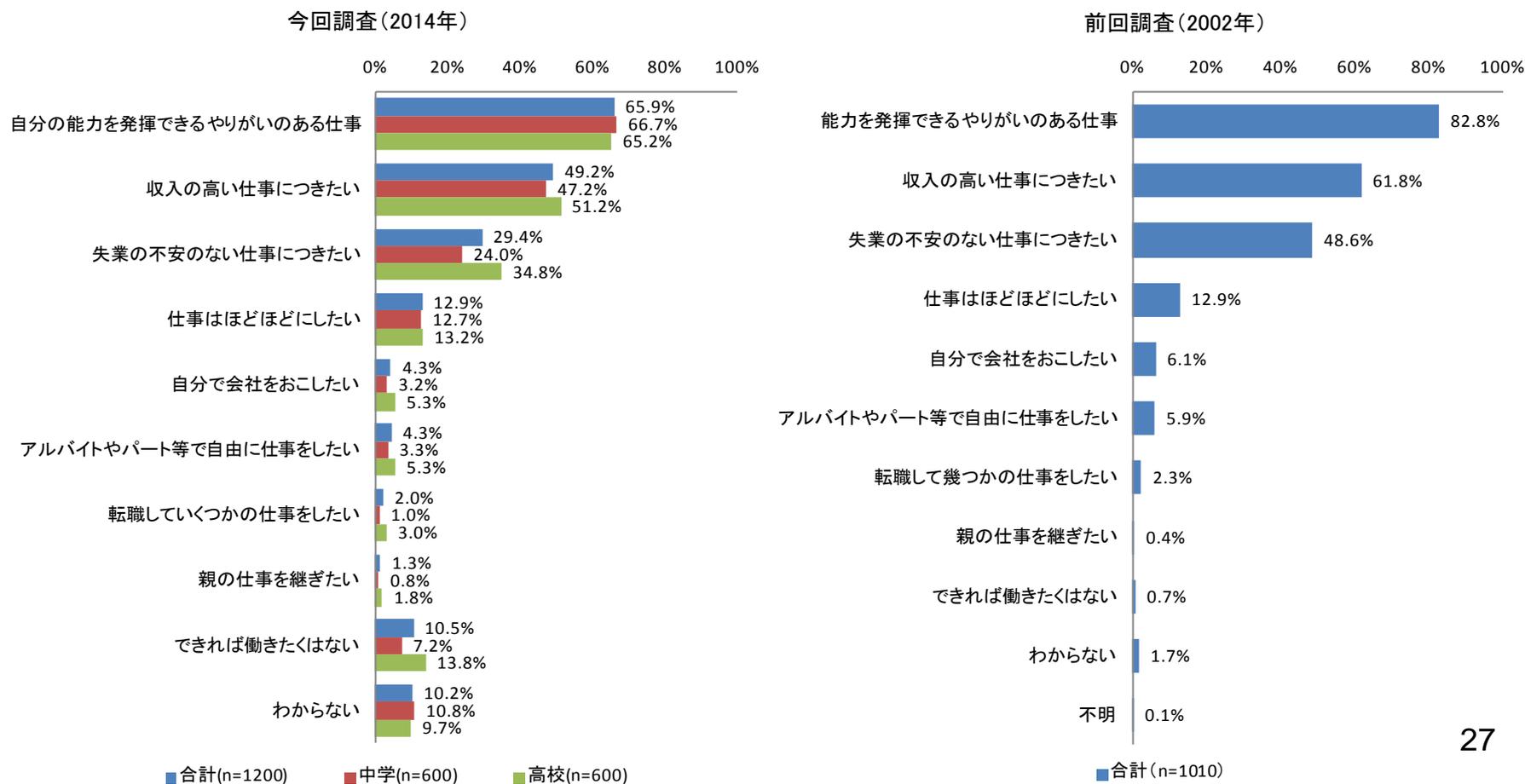
仕事のイメージは、「お金をかせぐことができる」(41.8%)が最も多く、次いで「仕事は大変そうである」(13.3%)、「人生のやりがい、夢の実現」(13.0%)となっている。前回調査と比べると、「お金をかせぐことができる」(前回29.6%)が約10ポイント増加し、「人生のやりがいが見つかる、夢を実現できる」(同24.8%)や、「仕事を通して、いろいろな経験ができる」(同20.6%)はいずれも10ポイント前後低下した。

図表18 仕事のイメージ:単数回答(Q13)



仕事についての希望は、「自分の能力を発揮できるやりがいのある仕事につきたい」(65.9%)が最も多く、次いで「収入の高い仕事につきたい」(49.2%)、「失業の不安のない仕事につきたい」(29.4%)となっている。前回調査と比べると、「能力を発揮できるやりがいのある仕事につきたい」(82.8%)、「収入の高い仕事につきたい」(61.8%)などは10ポイント以上低下し、一方、「できれば働きたくはない」(前回0.7%、今回10.5%)や、「わからない」(前回1.7%、今回10.2%)などが増加した。

図表19 仕事についての希望:複数回答(Q14)

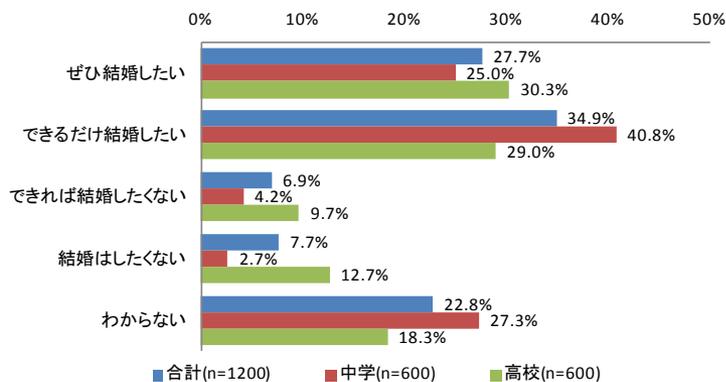


(2)結婚について

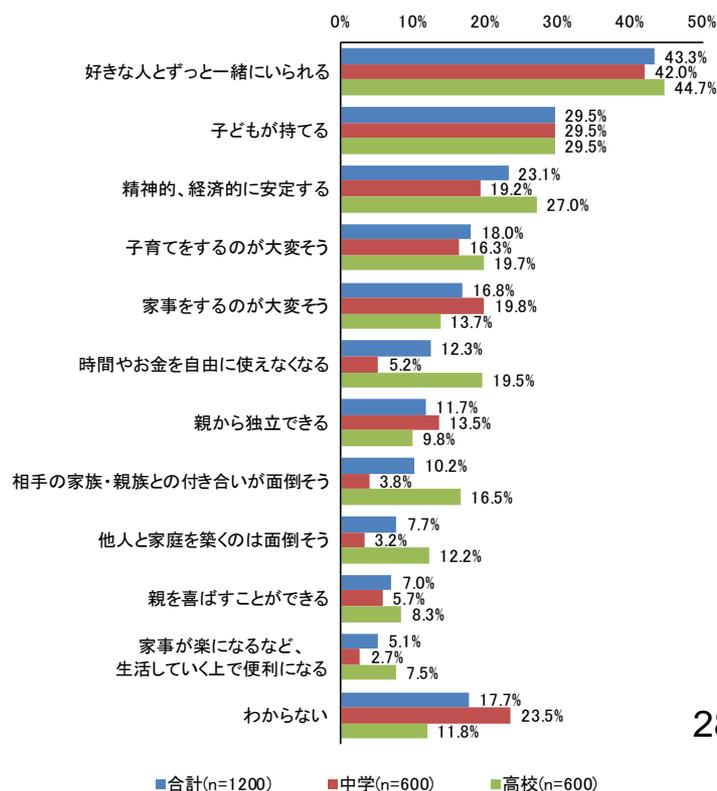
結婚を希望する中高生(「ぜひ結婚したい」+「できるだけ結婚したい」)は全体の約6割である。ただし、高校生は、中学生に比べて、「結婚はしたくない」(12.7%)、「できれば結婚したくない」(9.7%)といった消極的な考えの人が多く。

結婚のイメージについては、「好きな人とずっと一緒にいられる」(43.3%)、「子どもが持てる」(29.5%)などポジティブなイメージが上位であるが、高校生では、より現実的なイメージとして、「時間やお金を自由に使えなくなる」(16.5%)、「他人と家庭を築くのは面倒そう」(12.2%)などが、中学生に比べて多くなっている。一方、中学生は「わからない」がそれぞれ2～3割にのぼり、結婚について、まだ具体的な考えやイメージ持っていないことがうかがえる。

図表20 結婚についての考え:単数回答(Q15)



図表21 結婚のイメージ:複数回答(Q16)



結婚についての考えを、小さな子どもとふれあう機会や、友達とのつきあいの状況別にみると、小さな子どもとふれあう機会がある方が、「ぜひ結婚したい」、「できるだけ結婚したい」という希望が多く、逆に、ふれあう機会がない人は、「結婚はしたくない」、「わからない」が多くなっている。

友達との関係についても、「友達と本気でけんかをすることがある」、「何でも話せる同性の友達がいる」、「親しい異性の友達がいる」、「いつも友達のそばにいたり、連絡をとっていないとさみしい」など、良好な友達関係を築いている人の方が、結婚についても前向きな考えをもっている傾向がみられる。

図表22 小さな子どもとふれあう機会別 結婚についての考え
:単数回答(Q15)

小さい子どもと ふれあう機会	合計	Q15 結婚についての考え方				
		ぜひ 結婚したい	できるだけ 結婚したい	できれば 結婚したく ない	結婚は したくない	わからない
全体	1200 100.0	332 27.7	419 34.9	83 6.9	92 7.7	274 22.8
ふれあう機会が ある	328 100.0	108 32.9	136 41.5	25 7.6	9 2.7	50 15.2
ふれあう機会が ない	872 100.0	224 25.7	283 32.5	58 6.7	83 9.5	224 25.7

図表23 友達とのつきあいの状況別 結婚についての考え
:単数回答(Q15)

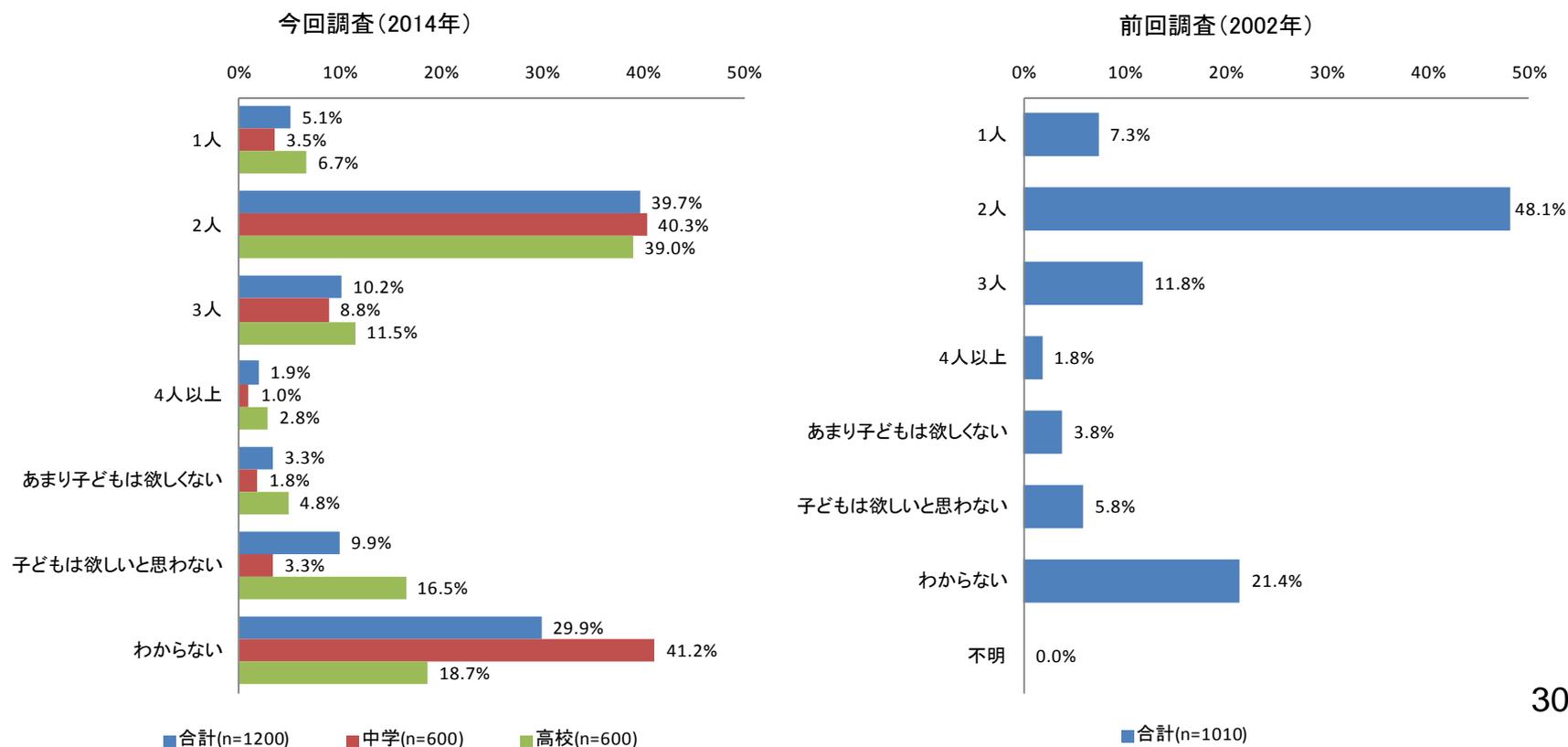
友達とのつきあいの状況	合計	Q15 結婚についての考え方					
		ぜひ 結婚したい	できるだけ 結婚したい	できれば 結婚したく ない	結婚は したくない	わからない	
全体	1200 100.0	332 27.7	419 34.9	83 6.9	92 7.7	274 22.8	
友達と本気で けんかを することがある	はい	281 100.0	101 35.9	100 35.6	24 8.5	15 5.3	41 14.6
	いいえ	919 100.0	231 25.1	319 34.7	59 6.4	77 8.4	233 25.4
何でも話せる 同性の 友達がいる	はい	813 100.0	266 32.7	305 37.5	48 5.9	45 5.5	149 18.3
	いいえ	387 100.0	66 17.1	114 29.5	35 9.0	47 12.1	125 32.3
親しい異性の 友達がいる	はい	362 100.0	140 38.7	120 33.1	22 6.1	17 4.7	63 17.4
	いいえ	838 100.0	192 22.9	299 35.7	61 7.3	75 8.9	211 25.2
いつも友達の そばにいたり、 連絡をとって いないとさみしい	はい	283 100.0	111 39.2	94 33.2	21 7.4	14 4.9	43 15.2
	いいえ	917 100.0	221 24.1	325 35.4	62 6.8	78 8.5	231 25.2
親しい友達を 作ることが できない	はい	278 100.0	63 22.7	71 25.5	40 14.4	39 14.0	65 23.4
	いいえ	922 100.0	269 29.2	348 37.7	43 4.7	53 5.7	209 22.7

(3)子育てについて

欲しい子どもの人数は、「2人」(39.7%)、「3人」(10.2%)の順である。一方、「わからない」(29.9%)も約3割を占めており、中学生で特に多い。高校生は、「子どもは欲しいと思わない」(16.5%)が、中学生に比べて多くなっている。

前回調査と比べると、「わからない」(前回21.4%、今回29.9%)が増えるとともに、「子どもは欲しいと思わない」(前回5.8%、今回9.9%)もやや増えている。

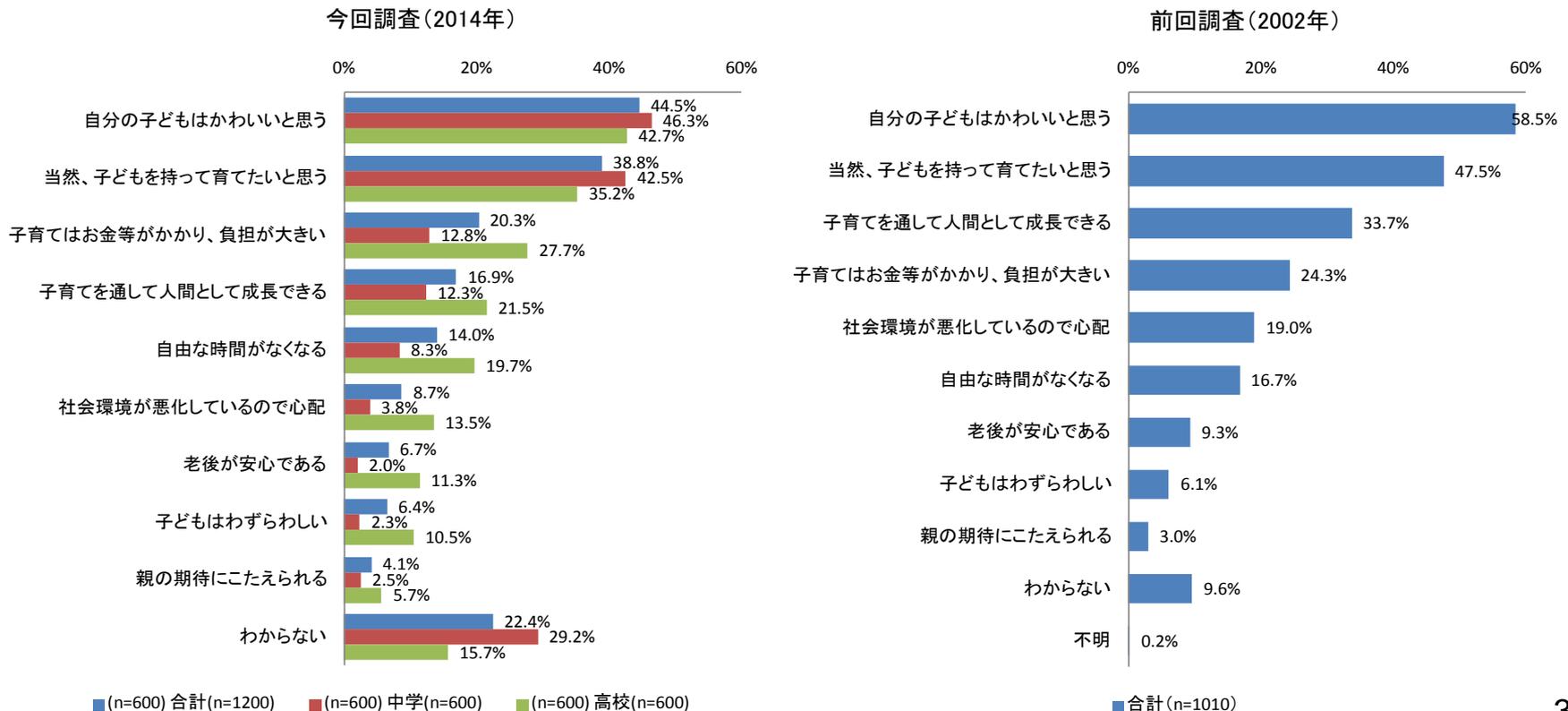
図表24 欲しい子どもの人数:単数回答(Q17)



子どもをもつことに対するイメージをみると、「自分の子どもはかわいいと思う」(44.5%)が最も多く、次いで、「当然、子どもを持って育てたいと思う」(38.8%)となっている。ただし、高校生では、「子育てはお金等がかかり、負担が大きい」(27.7%)、「自由な時間がなくなる」(19.7%)など、ネガティブなイメージが、中学生に比べて多くなっている。

前回調査と比べると、「わからない」(前回9.6%、今回22.4%)が大きく増えており、子どもを持つことを具体的にイメージできない中高生が増えていることがうかがえる。

図表25 子どもをもつことに対するイメージ:複数回答(Q18)



小さな子どもとふれあう機会の有無別に、欲しい子どもの人数をみると、「ふれあう機会がある」人は、「2人」(47.6%)が多い。一方、機会がない人は、「子どもは欲しいと思わない」や、「わからない」が多い傾向がみられる。

同様に、子どもを持つことについても、「ふれあう機会がある」人は、「当然子どもを持って育てたいと思う」(51.5%)、「自分の子どもはかわいいと思う」(53.7%)など、ポジティブなイメージの人が多く。一方、ふれあう機会がない人は、「子育てはお金等がかかり、負担が大きい」や、「わからない」など、ネガティブなイメージもしくは具体的なイメージのない人が多い傾向がみられる。

図表26 小さな子どもとふれあう機会別 欲しい子どもの人数:単数回答(Q17)

小さな子どもと ふれあう機会	合計	Q17 欲しい子どもの人数						
		1人	2人	3人	4人以上	あまり 子どもは 欲しくない	子どもは 欲しいと 思わない	わからない
全体	1200 100.0	61 5.1	476 39.7	122 10.2	23 1.9	40 3.3	119 9.9	359 29.9
ふれあう機会がある	328 100.0	16 4.9	156 47.6	49 14.9	12 3.7	8 2.4	13 4.0	74 22.6
ふれあう機会はない	872 100.0	45 5.2	320 36.7	73 8.4	11 1.3	32 3.7	106 12.2	285 32.7

図表27 小さな子どもとふれあう機会別 子どもを持つことへのイメージ:複数回答(Q18)

小さな子どもと ふれあう機会	合計	Q18 子どもを持つことへのイメージ									
		当然、 子どもを 持って育て たいと思う	自分の 子どもはか わいいと 思う	老後が安 心である	子育てを 通して人間 として成長 できる	親の期待 に応えられ る	自由な 時間が なくなる	子育ては、 お金等が かかり、負 担が大きい	子どもはわ ずらわしい	社会環境 が悪化して いるので心 配	わからない
全体	1200 100.0	466 38.8	534 44.5	80 6.7	203 16.9	49 4.1	168 14.0	243 20.3	77 6.4	104 8.7	269 22.4
ふれあう機会がある	328 100.0	169 51.5	176 53.7	30 9.1	63 19.2	19 5.8	39 11.9	43 13.1	11 3.4	20 6.1	50 15.2
ふれあう機会はない	872 100.0	297 34.1	358 41.1	50 5.7	140 16.1	30 3.4	129 14.8	200 22.9	66 7.6	84 9.6	219 25.1

6.就労観・結婚観・子育て観によるグループ分け(クラスター分析)

(1)クラスター分析の実施

就労観、結婚観、子育て観には密接な関わりがあることから、これらのライフプランに対してクラスター分析を行い、就労観・結婚観・子育て観によるグループ分けを行った。

「問13.仕事のイメージ」、「問15.結婚についての考え方」、「問17.欲しい子どもの人数」のデータを用いてクラスター分析を行い、5つのグループに分類することができた。

クラスター分析の手法、各クラスターの規模、各クラスターの特徴は以下のとおりである。

図表28 クラスター分析の方法

- ・原データの距離計算：原データのユークリッド距離
- ・合併後の距離計算：ウォード法

図表29 クラスターの規模と特徴

	件数	比率	仕事	結婚	子ども	
クラスター1	240	20.0%	◎	○	◎	全て前向き（特に仕事にやりがい）
クラスター2	314	26.2%	△	◎	○	特に結婚に前向き。子育てにも前向き。仕事はお金を稼ぐこと。
クラスター3	275	22.9%	△	×	×	仕事はお金を稼ぐこと。他は後ろ向き
クラスター4	206	17.2%	×	×	×	全て後ろ向き
クラスター5	165	13.8%	×	◎	○	結婚に前向きだが、仕事に後ろ向き

参考：前回調査(2002年)でのグループ分けの状況

	件数	比率	仕事	結婚	子ども	
クラスター1	470	46.6%	○	◎	◎	全て前向き
クラスター2	319	31.6%	△	○	△	ほどほど
クラスター3	76	7.5%	×	△	○	結婚と子どもは前向きだが、仕事だけでも後ろ向き
クラスター4	76	7.5%	×	×	×	全て後ろ向き
クラスター5	68	6.7%	◎ (△)	×	×	仕事だけでも積極的（仕事はお金を稼ぐこと）

※クラスターと「問13.仕事のイメージ」、「問15.結婚についての考え方」、「問17.欲しい子どもの人数」とのクロス集計を行い、各クラスターの特徴をまとめたもの。

(1)各クラスターの特徴

①クラスター1:全て前向き(特に仕事にやりがい)

- 基本属性:**「高校生・女性」、「2人きょうだい」が多い。
- 日頃の活動:**友達との付き合いが中心にあり、悩みを相談できる仲の良い友達がいる人が多いことがうかがえた。自宅以外にも居心地のよい場所がある人も多い。
- 就労・結婚・子育てに関する意識:**仕事に対しては、「人生のやりがいがみつかる、夢を実現している」「仕事を通じて、いろいろな経験ができる」などポジティブなイメージを持ち、自分の能力を発揮できる、やりがいのある仕事に就きたいと思っている人が多くなっていた。
結婚については、結婚したいと思っている人が多く、そのイメージは、「好きな人とずっといられる」「精神的、経済的に安定する」「子どもが持てる」といった前向きなイメージの割合が高くなっていた。
欲しい子どもの数は2人以上の割合が高くなっており、4人以上も約1割を占めていた。子どもを持つイメージは「自分の子どもはかわいいと思う」「子育てを通じて人間として成長できる」など、前向きなものの割合が高く、将来行いたい子育てについても、「子どもの自主性を尊重し、子どもの自由に育てたい」「できるだけ子どもとの時間を多く取りたい」など、前向きに関わっていきたいと考えている人の多いことがうかがえた。
- 両親について:**現在も、小学校就学前も共働きの割合が高くなっていた。父親、母親とも自分の将来のことについて話している割合が高く、自分のことを理解してくれていると感じている割合も高い。さらに、父親、母親ともに、仕事や家事にやりがいを感じている、子育てに熱心であると思っている割合が高くなっていた。両親の仲は良く、家族は和やかで楽しい環境にあり、小学校の時に家族で良く出かけたという割合も高くなっていた。しつけや教育には厳しい面もうかがえ、「習い事や塾を3種類以上していた」「テレビやゲーム、パソコン、スマートフォン等の時間が決められていた」の割合が高くなっていた。
- 生活の満足度について:**生活の満足度は大変高く、父親、母親、学校生活、友達との関係とも、「大変満足している」の割合が高くなっていた。

②クラスター2：特に結婚に前向き。子育てにも前向き。仕事はお金を稼ぐこと

- 基本属性**：基本属性について、特に特徴は見られない。
- 日頃の活動**：友達に、何でも相談したり、本気で友達とけんかすることもあるなど、友達との付き合いが充実している様子が見えたと。同性だけでなく、特に異性との友達との付き合いに関心のある人の割合が高い傾向にあった。
- 就労・結婚・子育てに関する意識**：仕事に対しては、お金をかせぐために収入の高い仕事につきたいと考える、現実的なイメージを持っている割合が高くなっていた。そのため、「失業の不安のない仕事につきたい」と回答した割合も高くなっていた。
結婚願望は強く、「ぜひ結婚したい」と回答した割合が高く、「好きな人とずっと一緒にいられる」「精神的、経済的に安定する」「子どもが持てる」という前向きなイメージを持っている割合が高くなっていた。
希望の子どもの人数は1人、2人で、「当然、子どもを持って育てたいと思う」「自分の子どもはかわいいと思う」「子育てを通じて人間として成長できる」という前向きなイメージを持っている人の割合が高くなっていた。将来行いたい子育ても、「できるだけ子どもとの時間を多く取りたい」と考えている割合が高くなっていた。
- 両親について**：現在も、小学校就学前も共働きの割合が高くなっていた。
父親に対しては、自分に対して過保護であると感じている割合が高くなっていた。
- 生活の満足度について**：学校生活への満足度が高くなっていた。

③クラスター3:仕事はお金を稼ぐこと。他は後ろ向き

●**基本属性:**「高校生・男性」が多い。

●**日頃の活動:**友達との付き合いは「友達と本気でけんかをする事ができない」「親しい異性の友達がいらない」「いつも友達のそばにいたり、連絡をとってなくてもさみしくない」の割合が高く、時間をかけたいこととしては、「パソコンやゲーム、スマートフォン等をする事」の割合が高くなっており、友達との関わりは薄く、パソコンやゲームなどに時間を割いている様子が見えられた。

一方で、時間をかけたいこととして、「パソコンやゲーム、スマートフォン等をする事」の割合が高いものの、最も悩んでいることの相談は「直接会う」の割合が高く、悩みなどは直接の関わりの中で相談していきたいと感じている人の多いことが見えられた。

●**就労・結婚・子育てに関する意識:**仕事に対しては、クラスター2と同様に、お金をかせぐために収入の高い仕事につきたいと考える、現実的なイメージを持っている割合が高くなっていった。

結婚に対しては、「結婚はしたくない」が1割強おり、「時間やお金を自由に使える」「他人と家庭を築くのは面倒そう」といったネガティブなイメージを持っている割合が高くなっていった。一方で、「わからない」の割合も高く、結婚に対するイメージを持つことができていない人が多いことも見えられた。

子どもについても、「子どもは欲しいと思わない」が2割おり、「子育ては、お金や手間がかかり、負担が大きい」というイメージを持つ人、将来行いたい子育ては「子育て中も、自分のために使う時間を多く取りたい」と考える人の割合が高い一方で、子どもの人数の希望や子どもを持つことにイメージについて「わからない」と回答した割合も高くなっていった。小さな子どもとふれあう機会の有無をみると、「ふれあう機会はなし」が8割を超えて割合が高くなっており、小さな子どもとふれあう機会のないことが子どもを持つことのイメージが持てない要因となっているとも考えられる。

●**両親について:**両親の就業状況について、「ずっと専業主婦(夫)」の割合が高くなっていった。

●**生活の満足度について:**特に特徴は見られない。

④クラスター4: 全て後ろ向き

●**基本属性:**基本属性について、特に特徴は見られない。

●**日頃の活動:**学校や地域で特に活動しているものはなく、特に時間をかけたいことはないという人の割合が高くなっていた。

「友達と一緒に遊ぶこと」に時間をかけたいと考える人の割合は低く、友達との付き合いも「友達と本気でけんかをする事がない」「何でも話せる同性の友達がいない」「親しい異性の友達がいない」「いつも友達のそばにいたり、連絡をとっていなくてもさみしくない」の割合が高くなっており、友達との関わりが希薄であることがうかがえた。

「悩んでいることはない」の割合が高く、全般的に活動意欲が低い様子が見られた。

●**就労・結婚・子育てに関する意識:**仕事に対しては、「働くのは当たり前である」「仕事は大変そうである」「自由な時間が少なくなる」というネガティブなイメージを持っている人の割合が高く、仕事への意欲も低い人の割合が高くなっていた。

結婚についても「結婚はしたくない」の割合が高く、「他人と家庭を築くのは面倒そう」「相手の家族・親族との付き合いが面倒そう」というマイナスのイメージを持っている人の割合が高くなっていた。一方で、クラスター3と同様に、「わからない」の割合が高く、結婚に対するイメージを持つことができていない人が多いこともうかがえた。

子育てについても「子どもは欲しいと思わない」「子育ては、お金や手間がかかり、負担が大きい」というネガティブなイメージや、「子育て中も、自分のために使う時間を多く取りたい」というまだ自分中心に考えている人の割合が高い一方、「わからない」の割合が高く、子どもを持つことに対するイメージも持つことができていない人が多いことがうかがえた。小さな子どもとふれあう機会の有無をみると、「ふれあう機会はない」が8割を超えて割合が高くなっていた。

④クラスター4:全て後ろ向き:つづき

●**両親について:**両親の就業状況は「ずっと専業主婦(夫)」の割合が高くなっていた。

父親、母親とも、ほとんど会話をしていない状況がうかがえ、父親、母親に対する意識も、自分のことを理解してくれていると思っていない人の割合が高くなっていた。また、父親については、「仕事や家事にやりがいを感じている」と思っていない人の割合が高く、5%ほどだが他と比較して父親が働いていない割合も高くなっていた。また、母親については、「子育てに熱心である」と思っている人の割合が高くなっていた。両親の仲は良い状態になく、小学校の育てられ方として「家庭は和やかで楽しかった」で「いいえ」と回答した割合が高くなっており、家庭の雰囲気も悪い状況がうかがえた。

●**生活の満足度について:**母親、学校生活、友達の関係に対して、不満である割合が高くなっていた。

⑤クラスター5:結婚に前向きだが、仕事に後ろ向き

●**基本属性:**基本属性について、特に特徴は見られない。

●**日頃の活動:**将来について悩んでいる人の割合が高くなっていた。

●**就労・結婚・子育てに関する意識:**仕事に対しては、できれば働きたくない人の割合が高く、「仕事は大変そうである」「自由な時間が少なくなる」など、ネガティブなイメージを持っている人の割合が高くなっていた。一方、結婚については、「ぜひ結婚したい」人の割合が高く、「好きな人とずっと一緒にいられる」「子どもが持てる」「親から独立できる」といったポジティブなイメージを持っている人の割合が高くなっていた。子育てについても、子どもの人数の希望は1~3人の割合が高く、「当然、子どもを持って育てたいと思う」「自分の子どもはかわいいと思う」というポジティブなイメージを持っている人の割合が高く、町内会や子ども会、学校の授業や行事で小さな子どもとふれあっている人の割合も高くなっていた。

●**両親について:**父親について、自分のことを理解してくれていると感じている人の割合が高くなっていた。

●**生活の満足度について:**生活の満足度について、特に特徴は見られない。

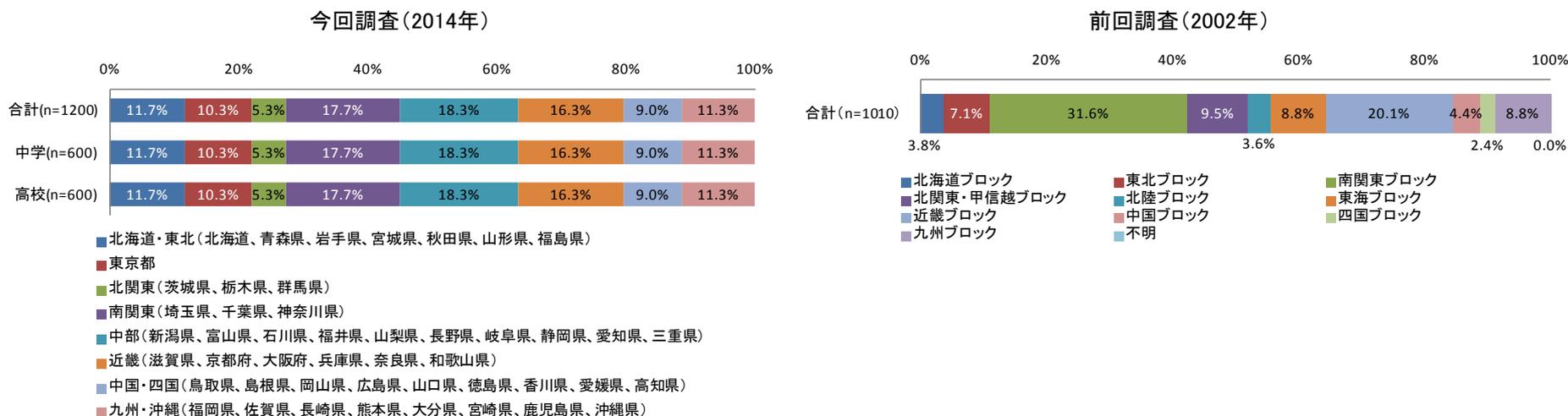
7.基本属性

(1)居住地

居住地は、「中部(新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)」「(18.3%)が最も多く、次いで「南関東(埼玉県、千葉県、神奈川県)」「(17.7%)である。

前回調査では、今回調査と地域ブロックの設定範囲が異なるが、「南関東」(31.6%)が最も多く、次いで「近畿」(20.1%)であった。

図表30 居住地:単数回答(Q1)

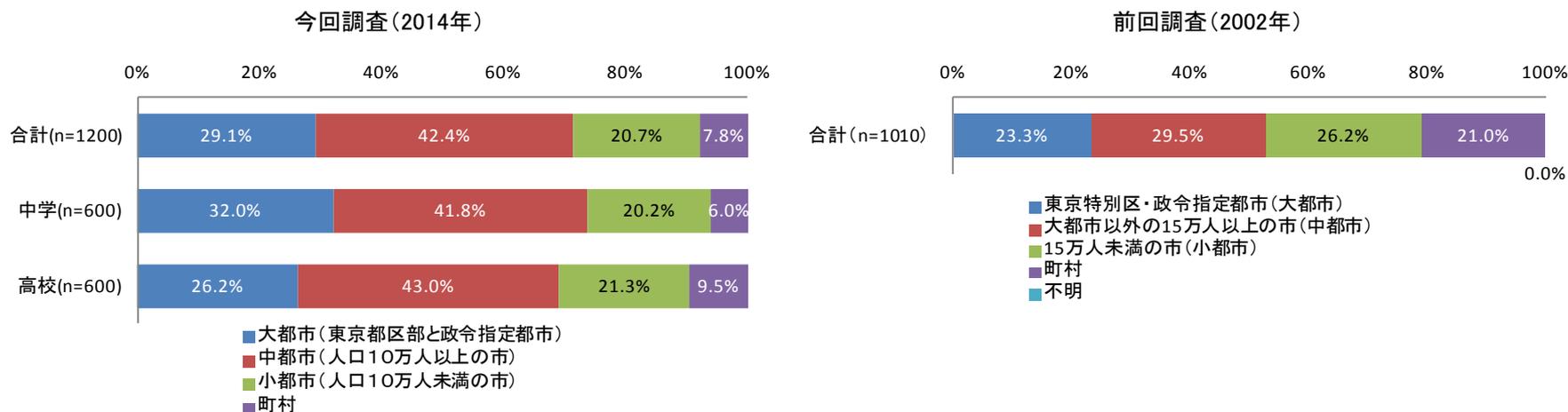


(2) 居住市区町村の規模

中高校生ともに、「中都市(人口10万人以上の市)」が最も多く、それぞれ41.8%、43.0%である。次いで「大都市(東京都区部と政令指定都市)」がそれぞれ32.0%、26.2%である。

前回調査では、今回調査と規模の設定が異なるが、「大都市以外の15万人以上の市(中都市)」(29.5%)及び「15万人未満の市(小都市)」(26.2%)がそれぞれ3割弱であった。

図表31 居住市区町村の規模:単数回答(Q2)

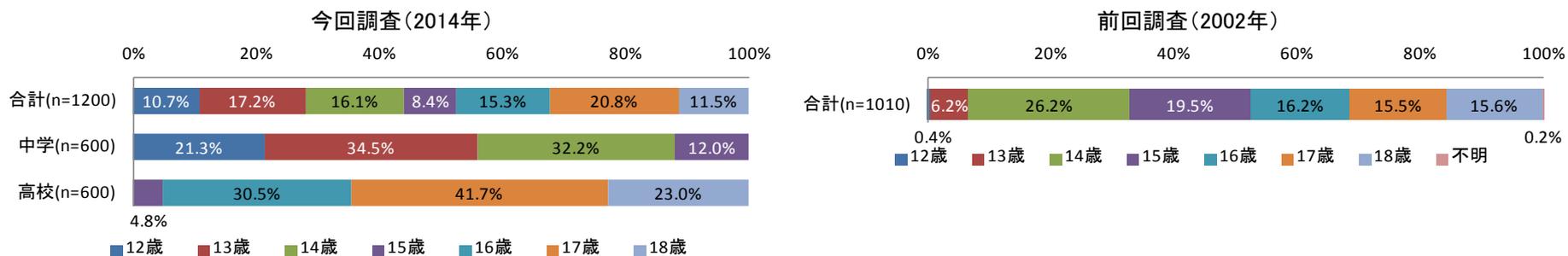


(3)年齢

前回調査、今回調査とも、「12歳～15歳」と、「16歳～18歳」がほぼ半々を占めている。

年齢別にみると、「17歳」(20.8%)が最も多く、次いで「13歳」が17.2%、「14歳」が16.1%である。

図表32 年齢:単数回答(Q3)

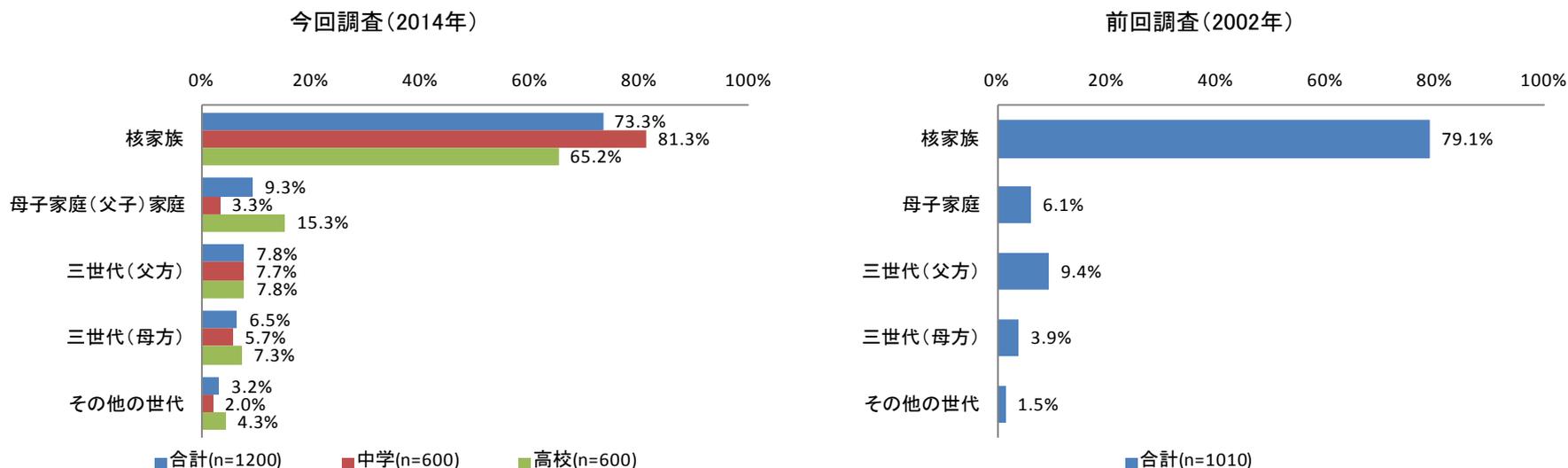


(4) 家族形態

家族形態は、「核家族」(73.3%)が最も多く、次いで「母子(父子)家庭」(9.3%)、「三世代(父方)」(7.8%)である。

前回調査では、「核家族」(79.1%)が最も多く、次いで「三世代(父方)+(母方)」(13.3%)であった。三世代については、父方の祖父母と同居している「三世代(父方)」が多くなっていた。「母子家庭」は6.1%であった。

図表33 家族形態:単数回答(Q4)



※同居している家族(Q4・複数回答)の回答をもとに作成。

**子育て支援策等に関する調査2014 報告書
(中高生アンケート調査) 概要**

**三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
〒105-8501 東京都港区虎ノ門5-11-2オランダヒルズ森タワー
女性活躍推進・ダイバーシティマネジメント戦略室
経済・社会政策部
矢島、鈴木、川澤、尾島**